

市内遺跡確認調査等報告書

2 0 1 0

札幌市教育委員会

例 言

- 1 本書は、札幌市教育委員会が、市内で計画される各種の開発事業に先立ち、埋蔵文化財包蔵地の保存保護を図る資料とするため、埋蔵文化財包蔵地の範囲や内容を詳細に把握することを目的として、昭和55年から平成13年にかけて実施した確認調査等16件の報告書である。
- 2 本書では、16件の確認調査等の結果について、調査年度順に報告する。
- 3 各調査の報告書は、調査時の所見に基づき調査終了後速やかに作成されたものであり、必ずしも現状の認識と一致するものではない。
- 4 本書に掲載する確認調査等の概要は、以下に示すとおりである。なお、「整理番号」は、調査原因である各種開発事業に伴う協議毎に、札幌市で任意に付した整理番号である。

(1) S259遺跡、S273遺跡、T303遺跡、T272遺跡調査報告（整理番号80-2-301）

調査遺跡：S259遺跡 札幌市厚別区上野幌1条5丁目

S273遺跡 札幌市厚別区厚別町上野幌

T303遺跡 札幌市清田区平岡公園東2・3丁目、厚別区上野幌3条3・4丁目

T272遺跡 札幌市清田区平岡公園東1・2丁目

調査期間：昭和55年6月16日～7月19日

調査原因：区画整理

(2) K440遺跡調査報告（整理番号80-2-308）

調査遺跡：K440遺跡 札幌市北区北31条西11丁目

調査期間：昭和56年4月7日～4月25日

調査原因：共同住宅建設

(3) S252遺跡、S254遺跡調査報告（整理番号81-3-302）

調査遺跡：S252遺跡 札幌市厚別区上野幌1・2条1丁目

S254遺跡 札幌市厚別区上野幌2条1丁目

調査期間：昭和56年8月10日～8月20日

調査原因：宅地造成

(4) S229遺跡調査報告（整理番号83-2-303）

調査遺跡：S229遺跡 札幌市白石区北郷4条3丁目

調査期間：昭和58年4月28日～5月12日

調査原因：住宅建設

(5) T310遺跡調査報告（整理番号83-2-307）

調査遺跡：T310遺跡 札幌市豊平区平岸5条10丁目

調査期間：昭和58年10月24日～11月14日

調査原因：住宅建設

(6) T233遺跡調査報告（整理番号84-2-305）

調査遺跡：T233遺跡 札幌市豊平区西岡2条13丁目

調査期間：昭和59年5月28日～6月9日

調査原因：宅地造成

(7) M353遺跡調査報告（整理番号84-2-311）

- 調査遺跡：M353遺跡 札幌市南区石山1条9丁目
調査期間：昭和60年4月16日～4月27日
調査原因：宅地造成
- (8) T472遺跡調査報告（整理番号87-3-303）
調査遺跡：T472遺跡 札幌市清田区平岡公園
調査期間：昭和63年5月30日～6月11日
調査原因：公園造成
- (9) T362遺跡、T485遺跡調査報告（整理番号88-3-302）
調査遺跡：T362遺跡 札幌市清田区真栄
T485遺跡 札幌市清田区真栄
調査期間：昭和63年7月11日～8月6日
調査原因：宅地造成
- (10) M484遺跡調査報告（整理番号88-3-305）
調査遺跡：M484遺跡 札幌市南区芸術の森1丁目他
調査期間：平成元年4月10日～5月17日
調査原因：学校建設
- (11) S214遺跡調査報告（整理番号89-2-304）
調査遺跡：S214遺跡 札幌市白石区栄通14丁目
調査期間：平成元年7月10日～7月29日
調査原因：共同住宅建設
- (12) T486遺跡調査報告（整理番号89-2-309）
調査遺跡：T486遺跡 札幌市清田区真栄6条1丁目
調査期間：平成3年9月30日～10月8日
調査原因：宅地造成
- (13) M351遺跡調査報告（整理番号91-2-302）
調査遺跡：M351遺跡 札幌市南区石山1条7丁目
調査期間：平成3年9月4日～9月21日
調査原因：宅地造成
- (14) T71遺跡調査報告（整理番号92-2-305）
調査遺跡：T71遺跡 札幌市豊平区岸岸1条19丁目
調査期間：平成4年9月21日～9月22日
調査原因：宅地造成
- (15) N107遺跡調査報告（整理番号93-2-308）
調査遺跡：N107遺跡 札幌市手稲区前田12条10丁目
調査期間：平成5年8月25日～9月3日
調査原因：建物建設
- (16) H512遺跡調査報告（整理番号00-3-305）
調査遺跡：H512遺跡 札幌市東区丘珠町
調査期間：平成13年7月23日～9月19日
調査原因：公園造成

- 5 上記の各遺跡のうち、T272遺跡及び T485遺跡については、調査報告書作成時には、それぞれ T463遺跡、T497遺跡として整理されていたが、最終的に周知の埋蔵文化財包蔵地 T272遺跡、T485遺跡として整備されたものである。また、K440遺跡の調査範囲については、調査報告書作成時には周知の埋蔵文化財包蔵地 K439遺跡として整備されていたが、平成元年9月改訂の『札幌市埋蔵文化財台帳（付分布図）』（『札幌市文化財調査報告書Ⅱ』）において、K440遺跡として周知資料の記載内容について変更されたものである。
- 6 調査及び報告書作成業務については、該当年度の埋蔵文化財保護担当部局（現札幌市観光文化局文化財課）の職員が従事した。
- 7 本書の編集は、札幌市観光文化局文化財課が行った。
- 8 調査で発見した資料は、札幌市観光文化局文化財課で保管している。

凡 例

- 1 各調査の報告における本文・挿図・写真図版等は、可能な限り、調査終了後に作成された内容をそのまま掲載した。
- 2 各調査の報告における調査所在地の住所表示は、調査時におけるものであり、現状の住所表示と一致しないものがある。なお、例言及び報告書抄録では、現状の住所表示を記載している。
- 3 遺構名、基本層名、遺構覆土層名等は、各遺跡ごとに呼称方法が異なっており、すべての遺跡を通して統一されたものではない。
- 4 各遺跡の調査位置図は、調査時点に刊行されていた国土地理院発行の1/25000地形図を基図として作成したものである。
- 5 各遺跡の調査区周辺現況図は、調査時点における現況測量図等を基図として作成されたものであり、現在の状況と一致するものではない。
- 6 本報告書で用いた北（N）方位は、すべて真北である。
- 7 挿図の縮尺は、個々にスケール等を入れて示した。
- 8 写真図版の縮尺は、スケールを示したものを除き任意である。

目 次

第1章	S259遺跡、S273遺跡、T303遺跡、T272遺跡調査報告	1
第2章	K440遺跡調査報告	11
第3章	S252遺跡、S254遺跡調査報告	17
第4章	S229遺跡調査報告	23
第5章	T310遺跡調査報告	33
第6章	T233遺跡調査報告	51
第7章	M353遺跡調査報告	61
第8章	T472遺跡調査報告	73
第9章	T362遺跡、T485遺跡調査報告	79
第10章	M484遺跡調査報告	85
第11章	S214遺跡調査報告	91
第12章	T486遺跡調査報告	105
第13章	M351遺跡調査報告	109
第14章	T71遺跡調査報告	119
第15章	N107遺跡調査報告	125
第16章	H512遺跡調査報告	133

挿図目次

第1図	S259遺跡、S273遺跡、 T303遺跡、T463遺跡調査位置	2	第21図	S252遺跡、S254遺跡出土の石器	21
第2図	S259遺跡調査区周辺現況	5	第22図	S229遺跡調査位置	25
第3図	S273遺跡調査区周辺現況	5	第23図	S229遺跡調査区周辺現況及び遺構配置	26
第4図	T303遺跡調査区周辺現況	6	第24図	S229遺跡ピット1実測図及び出土遺物	27
第5図	T272遺跡調査区周辺現況	6	第25図	S229遺跡ピット3・ピット4 ピット7実測図及び出土遺物	28
第6図	S259遺跡出土の土器(1)	7	第26図	S229遺跡ピット5・ピット6実測図	29
第7図	S259遺跡出土の土器(2)	8	第27図	T310遺跡調査位置	35
第8図	S259遺跡出土の石器	9	第28図	T310遺跡調査区周辺現況及び遺構配置	36
第9図	T303遺跡出土の土器	9	第29図	T310遺跡ピット実測図及び出土遺物	37
第10図	T272遺跡出土の土器・石器	9	第30図	T310遺跡発掘区出土の土器(1)	38
第11図	K440遺跡調査位置	12	第31図	T310遺跡発掘区出土の土器(2)	39
第12図	K440遺跡調査区周辺現況	14	第32図	T310遺跡発掘区出土の土器(3)	40
第13図	K440遺跡調査区配置	14	第33図	T310遺跡発掘区出土の土器(2)	41
第14図	K440遺跡土層断面模式図	15	第34図	T310遺跡発掘区出土の土器(3)	42
第15図	K440遺跡出土の土器(1)	15	第35図	T310遺跡発掘区出土の土器(4)	43
第16図	K440遺跡出土の土器(2)	16	第36図	T310遺跡発掘区出土の土器(5)	44
第17図	S252遺跡、S254遺跡調査位置	18	第37図	T233遺跡調査位置	53
第18図	S252遺跡調査区周辺現況	19	第38図	T233遺跡調査区周辺現況及び遺構配置	54
第19図	S254遺跡調査区周辺現況	19	第39図	T233遺跡遺構実測図(1)	55
第20図	S252遺跡、S254遺跡出土の土器	20	第40図	T233遺跡遺構実測図(2)	56

第41図	T233遺跡発掘区出土の石器(1)	57	第64図	S214遺跡第1号Tピット実測図	95
第42図	T233遺跡発掘区出土の石器(2)	58	第65図	S214遺跡発掘区出土の土器(1)	96
第43図	M353遺跡調査位置	62	第66図	S214遺跡発掘区出土の土器(2)	97
第44図	M353遺跡調査区周辺現況及び遺構配置	66	第67図	S214遺跡発掘区出土の土器(3)	98
第45図	M353遺跡第1号竪穴住居跡実測図	67	第68図	S214遺跡発掘区出土の石器(1)	99
第46図	M353遺跡第1号竪穴住居跡カマド実測図	68	第69図	S214遺跡発掘区出土の石器(2)	100
第47図	M353遺跡第1号竪穴住居跡出土の土器	68	第70図	T486遺跡調査位置	105
第48図	M353遺跡第1号ピット実測図及び出土遺物	69	第71図	T486遺跡調査区周辺現況及び調査区配置	106
第49図	M353遺跡発掘区出土の土器	69	第72図	M351遺跡調査位置	110
第50図	M353遺跡発掘区出土の土器・土製品・石器	70	第73図	M351遺跡調査区周辺現況	110
第51図	T472遺跡調査位置	74	第74図	M351遺跡遺構配置	111
第52図	T472遺跡調査区周辺現況	75	第75図	T71遺跡調査位置	120
第53図	T472遺跡発掘区出土の土器	76	第76図	T71遺跡調査区周辺現況及び遺構配置	120
第54図	T472遺跡発掘区出土の石器	76	第77図	T71遺跡土坑実測図	121
第55図	T362遺跡、T485遺跡調査位置	80	第78図	N107遺跡調査位置	126
第56図	T362遺跡、T485遺跡調査区周辺現況	81	第79図	N107遺跡調査区周辺現況	126
第57図	T362遺跡、T485遺跡発掘区出土の土器	82	第80図	N107遺跡遺構配置及び調査区土層断面	127
第58図	M484遺跡調査位置	86	第81図	N107遺跡竪穴住居跡実測図	128
第59図	M484遺跡調査区周辺現況及び発掘区配置	87	第82図	N107遺跡焼土遺構実測図	129
第60図	M484遺跡発掘区出土の土器	88	第83図	H512遺跡調査位置	134
第61図	M484遺跡発掘区出土の石器	89	第84図	H512遺跡調査区配置	135
第62図	S214遺跡調査位置	94	第85図	H512遺跡土層断面模式図	136
第63図	S214遺跡調査区周辺現況及び遺構配置	94			

挿表目次

第1表	T233遺跡遺構属性表	53	報告書抄録	140
第2表	M351遺跡遺構属性表	112		

図版目次

図版1	S29遺跡調査状況	30	図版16	S214遺跡発掘区出土の石器	103
図版2	S29遺跡出土遺物	31	図版17	T486遺跡調査状況及び出土遺物	107
図版3	T310遺跡調査状況及び出土遺物	45	図版18	T486遺跡発掘区出土の遺物	108
図版4	T310遺跡発掘区出土の土器	46	図版19	M351遺跡調査状況(1)	113
図版5	T310遺跡発掘区出土の石器(1)	47	図版20	M351遺跡調査状況(2)	114
図版6	T310遺跡発掘区出土の石器(2)	48	図版21	M351遺跡調査状況(3)	115
図版7	T310遺跡発掘区出土の石器(3)	49	図版22	M351遺跡調査状況(4)	116
図版8	T310遺跡発掘区出土の石器(4)	50	図版23	M351遺跡調査状況(5)	117
図版9	T233遺跡調査状況及び出土遺物	59	図版24	T71遺跡調査状況及び土坑出土遺物	122
図版10	M353遺跡調査状況及び出土遺物	71	図版25	T71遺跡出土遺物	123
図版11	T472遺跡調査状況及び出土遺物	77	図版26	N107遺跡調査状況	130
図版12	T362遺跡、T485遺跡調査状況及び出土遺物	83	図版27	N107遺跡出土遺物	131
図版13	M484遺跡調査状況及び出土遺物	90	図版28	H512遺跡調査状況(1)	137
図版14	S214遺跡調査状況及び出土遺物	101	図版29	H512遺跡調査状況(2)	138
図版15	S214遺跡発掘区出土の土器	102	図版30	H512遺跡出土遺物	139

第1章 S259遺跡、S273遺跡、T303遺跡、T272遺跡調査報告

第1節 遺跡群の位置と環境（第1図）

発掘調査を実施した、S259、S273、T303、T272の4遺跡は、地理的にみると「野幌丘陵」の西端に位置し、「三里川」と、「大曲川」とに挟まれた中にある。標高はいずれも50～55mである。「野幌丘陵」上には、上記4遺跡以外に、約75ヶ所の遺跡が集中し、市内全体の遺跡総数の約16%を占めている。これらの遺跡はいずれも縄文時代早期（約8,000～6,000年前）、同中期（約5,000～3,500年前）、同晩期（約3,000～2,000年前）、統縄文時代（2,000～1,200年前）の遺跡が出土し、遺構としては、竪穴式の住居址、墓塚、「おとし穴」などがみつまっている。

第2節 発掘調査結果

1 S259遺跡（第2・6・7・8図）

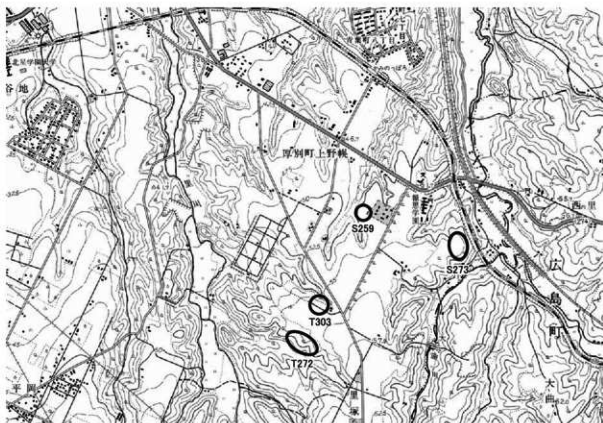
S259遺跡は、札幌市白石区厚別町上野幌にあり、「大曲川」の支流の左岸に立地している。現状は荒野であるが、かつて畑地として耕作されていた。発掘対象総面積は、約6,000m²である。グリッド設定は、基線を予定道路のセンターをほぼ基準にして、10×10mの大グリッドを組み、これをさらに5×5mに分割し、この中を2×2mの小グリッドを平均2個掘る方法で、発掘調査を進め、最終的に約500グリッド、総面積2,000m²を調査した。層準は、以下の如くである。第Ⅰ層：耕作土（平均30～40cm）。第Ⅱ層：黒褐色土層（平均10cm、遺物包含層）。第Ⅲ層：月寒火山灰層（地山）。遺物は、プライマリーの第Ⅱ層と攪乱層の第Ⅰ層から数多く出土したが、遺構は検出されなかった。

【出土遺物】

土器（第6・7図）

第6・7図1～51に示したのは、本遺跡出土の土器群である。

1～6・24は、口縁部の破片、7～23・25～46は胴部破片、47～51は底部の破片である。1は、口唇部直下は低い貼付帯があるのみで、この上は磨消されている。貼付帯の直下には、円形刺突文が巡り、口唇部上にも縄文がある。2～4は、1と同様高い肥厚帯は形成せず、低い貼付帯だけであるが、貼付帯上と口唇部上に、半截竹管による連続刺突文がある。貼付帯直下には、小さな竹管工具による円形刺突文がある。5・6・24は、口唇部を欠損するが、円形刺突文が残る例である。7～23・25～46の胴部片は、LRないしRLの単節斜行縄文の例と結束第一種（9・13・15・16・20・38・45）および同第二種（29・33）の単節羽状縄文の例、結束第一種の無節縄文（Lr Rl）の例（17）などがある。器厚は、7～12mmである。底部片の内、47・49・51の3例は、底部の周辺の張り出しが強いもの、50は全く張り出しのない例である。座を欠損する48例を除く4例の底面には、いずれも地文がつけられている。以上の土器群の色調は、灰褐色～暗茶褐色を呈しているが、明褐色の例が多い。土中には、細砂、小礫そして若干の繊維を含んでいる。本土器群は、常呂郡常呂町朝日トコロ貝塚出土土器群の分類に従えば、第6（「トコロ第6類」）に対比できる資料で、縄文時代中期中葉に位置し、札幌市内の同型式の土器群が伴出した遺構出土木炭によるC14年代測定結果によれば、3,800～4,150年前という結果がでている。



第1図 S259遺跡、S273遺跡、T303遺跡、T272遺跡調査位置 (S=1/25000)

石器 (第8図)

本遺跡からは、第8図1～6に示した石鏃、石銛、ナイフ状石器、削器と数多くの縦長を中心とした剥片が出土している。いずれも黒曜石である。1は、柳葉形の両面調整の石鏃である。本資料の剥片剥離技法で特徴的な点は、両面共に右側縁側から、ほとんど剥離が入られ細部調整も、右エッジに偏っていることである。逆刺の作出は明瞭ではない。3は、有柄の大型石銛である。尖頭部大半を欠損する。素材は部厚い横長剥片と考えられ、腹面に一次剥離面が残る。本資料は、加熱を受けたために破損した例である。2は、半両面調整のつまみ付きのナイフ状石器である。素材は縦長剥片を用い、端部はヒンジ・フラクチャを起こしている。端部先端(尖頭部分)は、欠損する。背面の調整加工は、左側縁はやや背の高い剥離で、刃縁は直線的であり、右側縁は平坦な剥離で、刃縁は、ゆるいカーブを描いている。4～6は、削器で、4はフレーク・コアの残核を利用し、背面左側縁に細かな調整剥離を加えたものである。腹面に認められる最終の剥離生産面で見ると、寸の短いやや幅広の剥片をとっている。5・6は、縦長剥片の背面の両側縁に、細かな調整剥離がある例である。5の上下端は欠損している。

2 T303遺跡 (第4・9図)

本遺跡は、札幌市豊平区里塚にあり、「三里川」の左岸に立地している。現在の地目は、畑地と北西側は牧草地である。発掘対象総面積は、約12,000m²である。発掘区の設定は、遺跡地内を走る私道に基準線を置き10×10mの大グリッドを組んでいる。発掘は大グリッドの中に2×2mの小グリッドを平均2個開ける方法で調査を進めたが、遺物の出土状態を考慮して南東側の畑地部分は平均

4個、北西側の牧草地は約1個平均で掘っている。最終的な発掘総面積は、約1,000㎡（約250小グリッド）である。層準は、厚さ20～30cmの耕作土層の直下に月寒火山灰層が顔を出し、河岸付近は有機物を多く含む黒色系統の土層は流失し、表土に直接火山灰層が出ている所もあった。畑付近を中心に、遺物は検出されているが、遺構はみつからない。

【出土遺物】

土器（第9図）

第9図1～8は、いずれも胴部片である。地文として、LRおよびRLの縄文原体を用いた単節斜行縄文が認められるが、いずれも節は細かいものである。地文の一部には、ある程度乾燥した時点で、整形が加えられ摩滅状態を呈している例もある。色調は、白灰褐色、明褐色の例とがあるが、前者が主体を占め胎土中には細砂を含み、焼成は精緻である。なお、8例は丸底の底部片の可能性もある。本資料は、以上の観察を通してみると、縄文時代晩期末葉から縄文時代初頭にかけて盛行した「タンネトウL式」に代表される土器と共通する特徴を備えている。

石器

黒曜石製の剥片が出土している。

3 T272遺跡（第5・10図）

本遺跡は、T303遺跡と同様、豊平区里塚にあり、「三里川」の左岸に立地する。遺跡の現況は山林で、木を伐採しながら発掘区の設定を行なったため、調査は困難を極めた。発掘対象総面積は、地形を考慮して、第5図に示した約17,700㎡とした。グリッドは、予定されている区画整理の区割り線を基準にして10×10mの大グリッドを組み1×1mの小グリッドを2～3個掘る方法で調査を進めた。除去困難な立木がある場合には、調査可能な部分を中心に、任意に開ける方法をとった。最終的な発掘面積は約500㎡で、約50個の小グリッドを全面にわたり掘っている。層準は、平坦面と傾斜面とでは、若干異なるが、表土から平均50～70cmまでは有機物（有機リン酸）を多く含む黒褐色の火山灰質土層、その下は平均厚20cm程の茶褐色火山灰質土層があり、月寒火山灰層の地山に至っている。遺物は、上部の黒褐色、茶褐色火山灰質土層中から出土しているが、遺構は、個々の試掘坑が立木の関係で限定されたため、検出することはできなかった。

【出土遺物】

土器（第10図）

第10図1～4は本遺跡から出土した土器片の代表的な例を図示したものである。1は、口縁部片で、輪積みないし巻き上げで成形した上に、さらにための粘土紐を積み上げ貼付することによって、口唇部に低い肥厚帯を形成させたもので、断面形は三角形を呈している。肥厚帯上には幅6mm程の平らな寛ないし径の大きい竹管を載した棒状の工具で、連続して横に刺突、押捺した文様がつけられている。肥厚帯直下には、竹管状工具による円形の刺突文が巡る。地文は、単節縄文である。色調は明るい灰褐色で焼成は堅い。2・3は、胴部片で、RLおよびLRの単節斜行縄文がつけられている。色は白灰褐色で、器厚は約8mmである。焼成は堅い。4は、底部片の破片で、こころもち張り出しの傾向を認める。色は明褐色。以上の土器群は、縄文時代中期中葉に位置する「トコロ第6類」に対比できる。

石器（第10図）

本遺跡からは、石斧が2点出ている。第10図に示した例は、刃先部分の破片である。両刃で素材は板状に節理する片岩の剥片を用い、側縁を剥離調整した後、入念に研磨した例である。厚味はない所

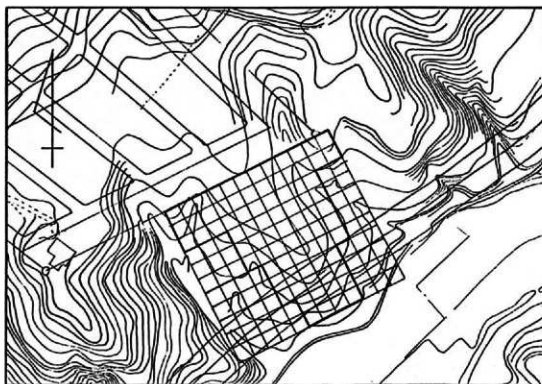
から、平のみの用途に用いられた可能性もある。

4 S273遺跡 (第3図)

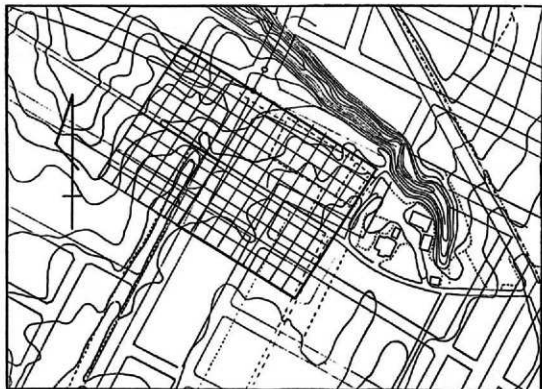
S273遺跡は、白石区厚別町上野幌に位置し、「大曲川」の右岸に立地している。地形は、川に向かってゆるくレベルを下げる緩傾斜面で、現状は山林である。発掘対象総面積は、地形からみて浅い沢と沢とに挟まれた約8,000㎡であった。発掘区は、工事計画線を基準にして、10×10mの大グリッドを組んだが、立木の関係でこの中に1×1mの小グリッドを任意に入れる方法で調査を進めた。結局、約20小グリッド(約200㎡)を調査した。層準は、緩傾斜面であったためか、黒色系統の土層はほとんど失われ、若干有機物を含む土層を混じえる地山の月寒火山灰層が直接顔を出している部分が多かった。恐らく、自然の営力によって上部層は流出した結果と考えられる。遺物は縄文式土器片が若干検出されたのみで、本来の包含層は既に失われている可能性が大きいと判断された。



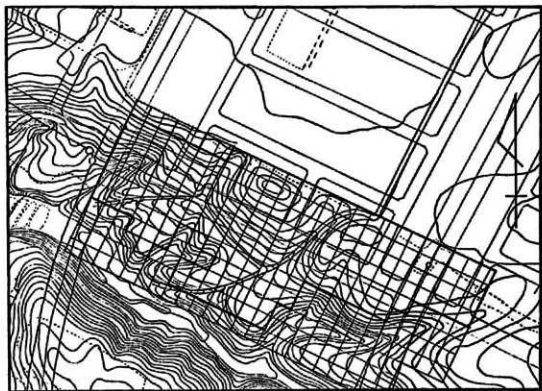
第2図 S259遺跡調査区周辺現況



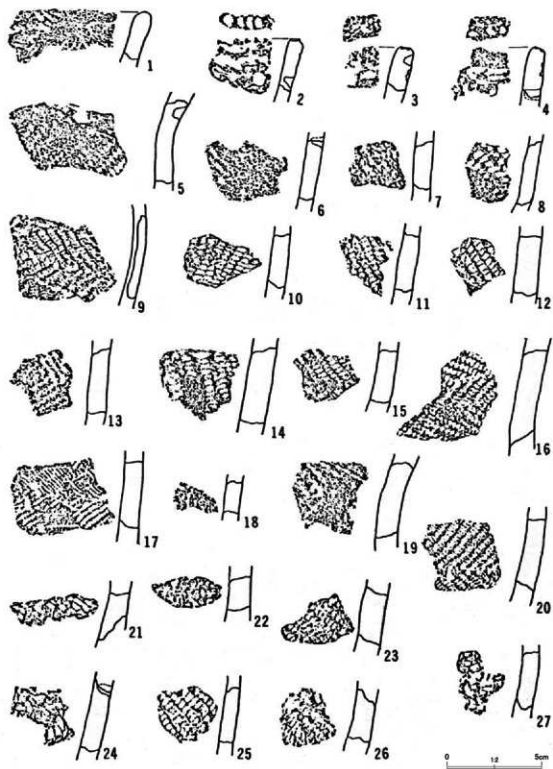
第3図 S273遺跡調査区周辺現況



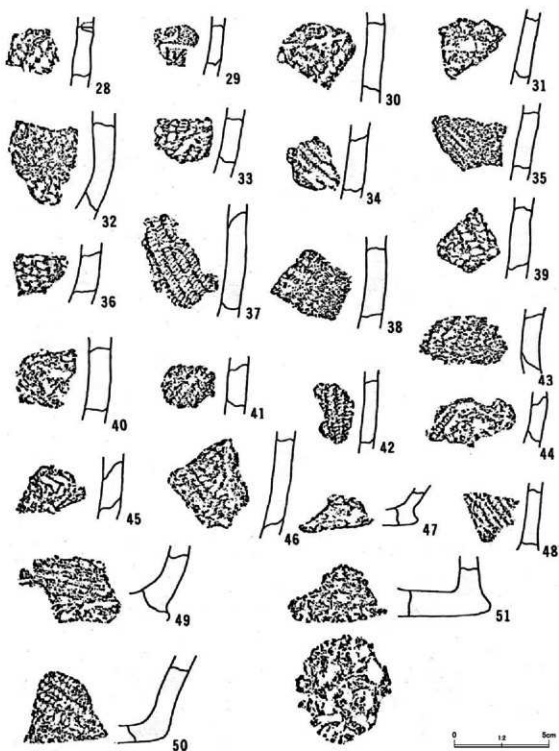
第4図 T303遺跡調査区周辺現況



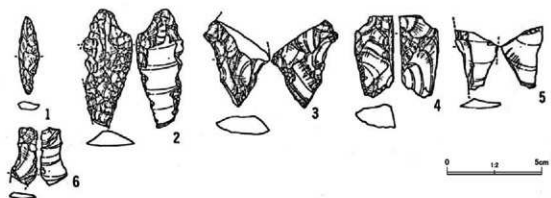
第5図 T272遺跡調査区周辺現況



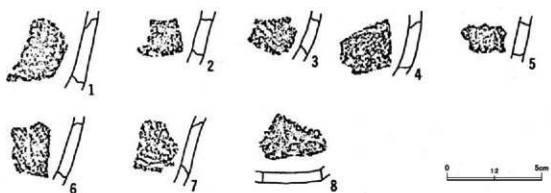
第6図 S259遺跡出土の土器(1)



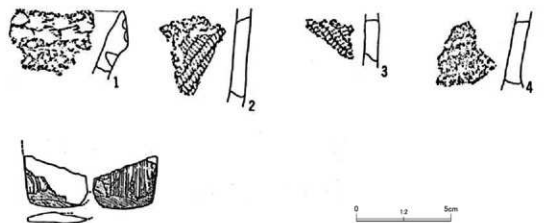
第7図 S259遺跡出土の土器(2)



第8図 S259遺跡出土の石器



第9図 T303遺跡出土の土器



第10図 T272遺跡出土の土器・石器

第2章 K440遺跡調査報告

第1節 遺跡の位置と環境 (第11・12図)

今回調査した、札幌市北区北30条西10丁目にあるカネシメ総合グラウンド内の遺跡は K440遺跡の一部で、旧琴似川水系沿いに綿々と分布する縄文時代の遺跡群の1つである(第11図)。本遺跡が立地する旧琴似川水系一帯の表層地質は、「河川運搬堆積物」に由来する一般に腐植に富む植土(「北部札幌植土」)で、下層部には所々泥炭土をはさんでいる。第12図は、明治27・28年調査の遺跡分布図と札幌市現況図から復元した旧河川と遺跡の関係図である。これで見ると、昭和54年度に調査した K460遺跡(「札幌市文化財調査報告書」XXII)と本遺跡は、旧琴似川(別称「シノロ川」)をはさんで、向かいあって立地していることがわかる。ところで、K460遺跡から竪穴住居址17軒と土坑が3基みつかっているが、今次調査地点では遺構は全く検出されなかった。この理由としては、K460遺跡の調査の結果、遺構群は旧河川から75~90m離れた標高9.3~9.5mの微高地(自然堤防)上に立地している事実からみて、今次調査地区がいずれも標高9.3m以下で低く、増水による水害が及びやすい範囲であったことに起因すると考えられる。従って、遺構は、標高9.3m以上の北30条通りから南西側に分布していた可能性が高い。

第2節 発掘調査の方法と層準 (第13・14図)

今回の調査地区は、試掘調査の結果では、グラウンドの北東部側は、旧地表面の標高は低く、数メートルにわたって埋め立てられていることが判明していたため、グラウンドの南西側を中心に調査を進めた。グリッドは、南西側の北30条通りを基準線にして、10×10mで組んでいる。各呼称は、第13図のとおりである。I列及びII列の一部は、手堀りで調査したが、それ以外の区域は盛土が厚いため重機で上部を排土後、清掃するという方法をとった。また、深いレベルに埋没している竪穴住居址と層準を確認するために、幅1m程の深掘りトレンチを10本入れている。その結果、遺構としては浅い皿状のピットが2基みつかっただけであるが、I・II列を中心に数多くの縄文時代およびそれ以降の遺物群を検出することができた。本地点の層準は、第14図に示したが、これは発掘区中央にほぼ北東-南西方向に入れたトレンチの3ヵ所(A-C)でとったものである。層名は、以下のごとくである。第I層：盛土(攪乱層)、第II層：暗灰褐色泥炭層、第III a層：灰褐色シルト層(泥炭を点々と含む)、第III b層：灰褐色シルト層、第III c層：灰黄褐色シルト層(砂質的)、第III d層：灰褐色シルト層(第III b層に比べ黄色強い)、第IV a層：黄褐色砂層、第IV b層：灰黄褐色砂層、第IV c層：黄褐色砂層(リモノイト多い)、第V層：青色砂層。なお、この層準は、K460遺跡の層と比べて、泥炭層の出現レベルが相対的に高く、また泥炭質の含有率が低い事実からみて、K460遺跡のHL地区よりも低湿で、より河川に近い位置の堆積物の性格を帯びている。

第3節 発掘区出土遺物 (第15・16図)

第15・16図に示したのは、本遺跡出土資料の一部である。第15図の1~3は、須恵器ないし須恵系



第11図 K440遺跡調査位置 (S=1/25000)

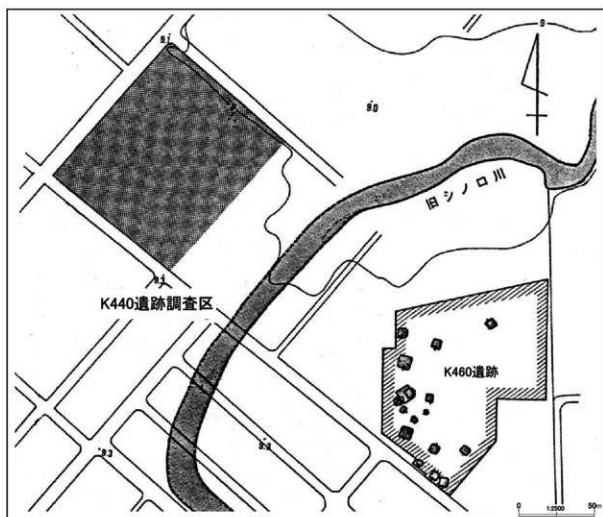
の甕形土器の破片で、3点共に同一個体と考えられる。推定底径は、11.6cmで、かなり大型である。成形は輪積み法で、底部と胴部、胴部間の接合面が、破片断面から観察できる。整形は、回転台なしロクロを用いており、内面と外面の下半には水挽きのあとが残っている。また、外面上部には平行脈状の叩き目が施されているが、原体は、縄目のものではない。底面は平坦で、葉脈痕がついている。器厚は9~20mmを数え、色調は表面および胎土内部共に暗灰色で、焼成温度はかなり高かったと推定される。第16図4~6は、坏の破片である。4・5は、ロクロ水挽きの痕が残る薄手の資料で、共に内黒である。4は推定口径5.6cmあり器高はかなり高い。「土師器」と考えられる。6は、捺文式の坏で、口唇部と外面にはヘラミガキの跡が明瞭に残る。内黒。7・8は、立上がりがつつく、推定口径が小さいところから、壺の口頸部の破片の可能性が高い。胎土中には、比較的多くの砂粒を含み、色調は白っぽい。口唇部は、めくれ状にやや外に出ている。9~21は、すべて甕形土器の破片である。9~11は、口縁部文様帯と胴部はやや強い段で区画され、文様帯部分には平行沈線文が段状に展開している。12~19は、口縁部文様帯と胴部の段差がなくなり、沈線文も細いものが横方向に加えて、縦および鋸歯状に展開するものである。12・13は口唇部があるもので、その直下には3本の隆起線があり、全体に内彎している。16~19は、口縁部文様帯と胴部の境の破片で、16・18・19には斜めの浅い刻目が、17には厚い貼付帯が横に巡る。20・21は底部片である。

第4節 考察

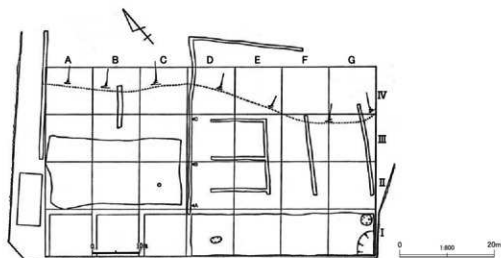
第15・16図の資料についてまとめる以下のごとくである。4・5の土師器の坏は、体部が長いも

ので、宮城県多賀城周辺の資料を基準にした編年大綱によれば、第9類 **b**に對比でき、その年代は、10世紀から終末が1,000年前後におく時期とされているものである。7・8の壺形土器、そして9～11の横走沈線文が段状に展開する甕は、宇田川編年に従えば擦文時代前期の初頭の所産である。すなわち、8（ないし9）世紀の年代が与えられる。12～19の細い沈線文が縦横に展開する例は、宇田川編年でいう擦文時代中期に属し、年代は9（ないし10）世紀前後の時期のものである。

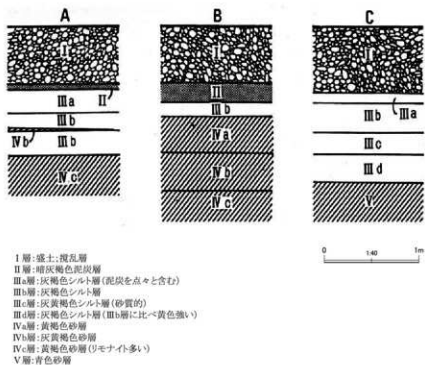
1～3の須恵系の土器は、類例はなく現段階では明確な結論を出すことはできないが、外面の印き目が一段の撚糸の印き目ではなく、しかも製作技法は須恵器の伝統を踏襲したものである点から、所謂「珠洲焼」とか常潜在的な「越前焼」に近いものの可能性がある。これらは、通常「中世陶器」と称され、その年代幅は現在のところ明確ではない。ただ中世的な性格をもつ窯場から生産されたものといわれている。すなわち、1～3の不明確な資料を除くと、あとの土器群は、宇田川編年の擦文時代前・中期の所産で、この結果は、今まで旧琴似川水系で調査した北区 K446、同区 K460、西区 NI62 遺跡などの年代と全く一致し、擦文時代後期および終末期の資料を含まないといえるであろう。



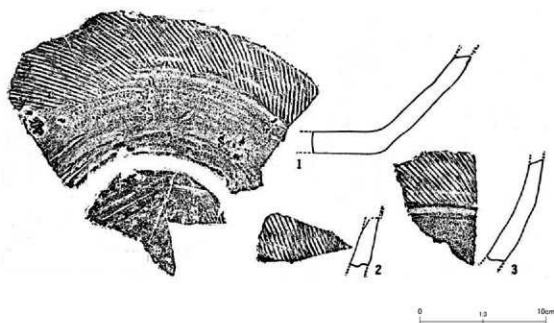
第12図 K440遺跡調査区周辺現況



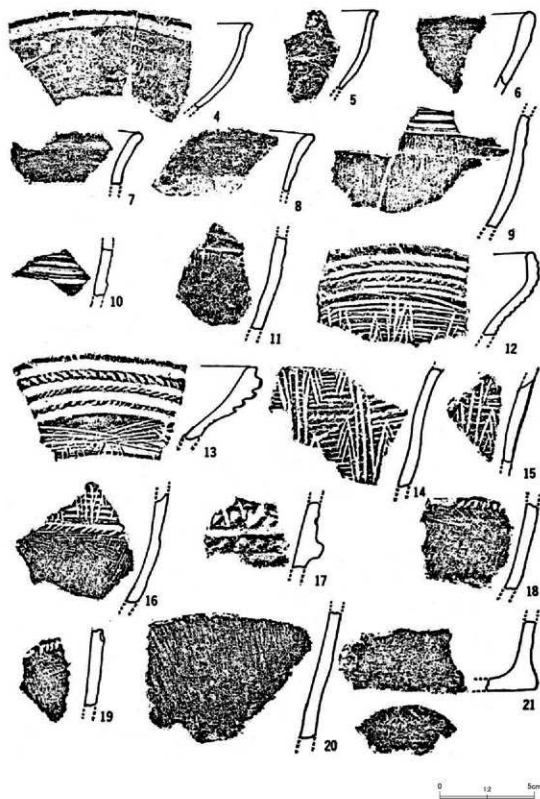
第13図 K440遺跡調査区配置



第14図 K440遺跡土層断面模式図



第15図 K440遺跡出土の土器 (1)



第16図 K440遺跡出土の土器（2）

第3章 S252遺跡、S254遺跡調査報告

第1節 遺跡の位置と環境

今回、住宅造成に先だち事前調査した S252、S254遺跡は、白石区厚別町上野幌の国際地所株式会社所有地内にある。地形的にみると、「野幌丘陵」の西端の三里川と大曲川によって開析された台地上にのる。本台地には、数多くの遺跡があるが、時期は縄文早・中・晩期が主体である。厚別町上野幌地区の埋蔵文化財包蔵地については、昭和48・49年度に分布調査を実施したが、その際の調査所見では、両遺跡は標高40m~41mに立地し、黒色腐植土は概して薄く、基盤の火山灰層が所々露出し、縄文式土器片と黒曜石製の剥片、削片が採集されたとある。調査は、対象地全面に10×10mを基本としたグリッドを組み、その中に2×2mの小グリッドを設定して調査を進めている（第18・19図参照）。

基本層準は、30~40cmの耕作土層の下は直接黄褐色火山灰層（「月寒火山灰層」）が顔を出している。遺物は、ほとんど耕作土層中から検出したが、一部火山灰層上部にくい込んでみつけた資料もある。

第2節 発掘調査結果

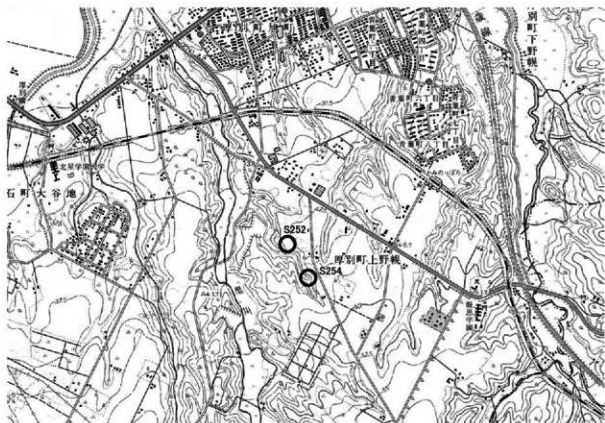
（1）S252遺跡（第18図、第20図1~9、第21図1・2）

本遺跡は、三里川の左岸に立地する。現状は荒野であった。

出土遺物

第20図の1~9は、本遺跡出土の土器群の代表的な例を示したものである。一般的特徴は、1~6の口唇部が遺存する資料においては、口唇部は平坦に整形され、その直下には貼付による肥厚部がある。肥厚部の断面は三角形である。口唇部と肥厚部の上には、平なへらとか半割した竹管による連続した刺突文が横に巡っている。径10mm前後の円形刺突文がつけられている。7~9は、肥厚帯より下部の破片であるが、7と9では、3段、平なへらによる連続刺突文が横に巡っている。8は、縦位に刺突文がある例である。地文は、すべて単節縄文で、6は羽状に展開している。また、2には内面も縄文が施されている。これらの土器群は、常呂郡常呂町朝日トコロ貝塚出土の第6類に対比できるもので、年代は縄文中期中葉（4,000年前）の所産と考えられる。なお、最近遺央部で出土するトコロ第6類に対応する資料が、道東部の例に比べて連続刺突文とか貼付文が多用されているという差が指摘され、遺央部のこれらの資料に対して、新たに「小島ノ沢I式」という名称が設定されている。

第21図の1・2に示したのは、黒曜石製の石器である。1は、小型の石鏃で、裏面には素材の一次剥離面が幅広く残っている。形態としては、尖頭部、莖部共に短いところから北海道の縄文中期後半から後期に一般的な型式と考えられる。しかし、尖頭部が非対称形で、莖部が太いところから未完成の可能性もあろう。2は黒曜石の小角礫の表皮を剥がした剥片を利用して、図示面下部に背の高い剥離を入れ刃部とした短形搔器である。搔器は、一般的には動物の皮をなめすときの脂肪をかき道具とされている。



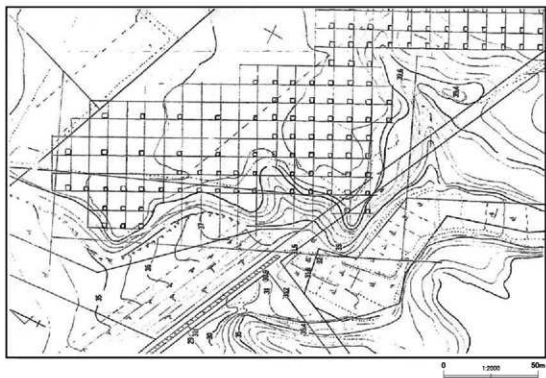
第17図 S252遺跡、S254遺跡調査位置 (S=1/25000)

(2) S254遺跡 (第19図、第20図10~15、第21図3~8)

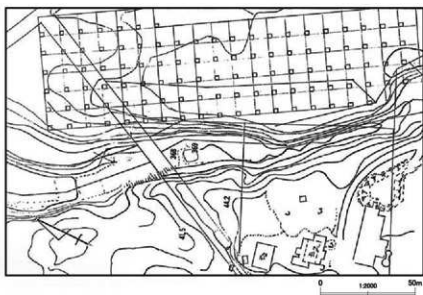
本遺跡も、三里川の左岸の台地上にあり、一部耕地として利用されているが、あとは荒地と山林である。

出土遺物

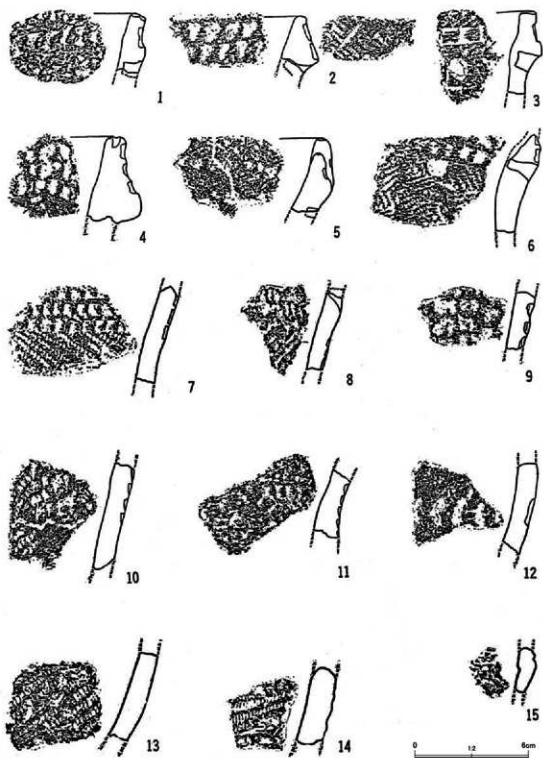
第20図の10~15に示したものは、本遺跡出土土器の一部である。いずれも、口唇部は欠失している。しかし、10~12・15においては、平らなへらとか半割した竹管を工具にした連続刺突文が破片内に観察される資料である。10では、横と縦に、11・12・15は横方向に刺突文がある。器厚は平均値1cm前後で厚く、胎土中には細砂と微量の繊維を含んでいる。色調は、暗灰褐色から赤褐色までである。地文は単節斜行縄文を基本とするが、14例のごとく3と比べられるものもある。上記の土器群は、前述した S252と同種類の縄文中期中葉の「トコロ第6類」に対比される資料である。第21図の3~8に示した石器群は、本遺跡の出土品のすべてである。3は黒曜石製の短形剥片を利用し、打面以外の側縁に、やや背の高い剥離を入れた円形の搔器の仲間である。4~6はいずれも黒曜石を原材とし、比較的整った石核から連続的に剥取された粗製石刃(縦長剥片)を用い、長軸縁部にそってラフな二次加工を施した資料である。通常、サイド・スクレイパー(削器)に分類されているものに相当する。なお、5の上部はヒンジ・フラクチャを起こした部分である。7は、粗製の石刃核(剥片石核)の残骸である。黒曜石製。小型角礫を素材にし、打面は、石刃剥取両面からの一回の加撃で形成されている。石刃は、図示した左面のみから生産されているようである。8は、片岩の薄片を用いた小型の石斧である。両面に幅広く素材面(節理面)が残り、側縁にのみ調整剥離が認められる。研磨は、刃部縁だけしか施されていない。



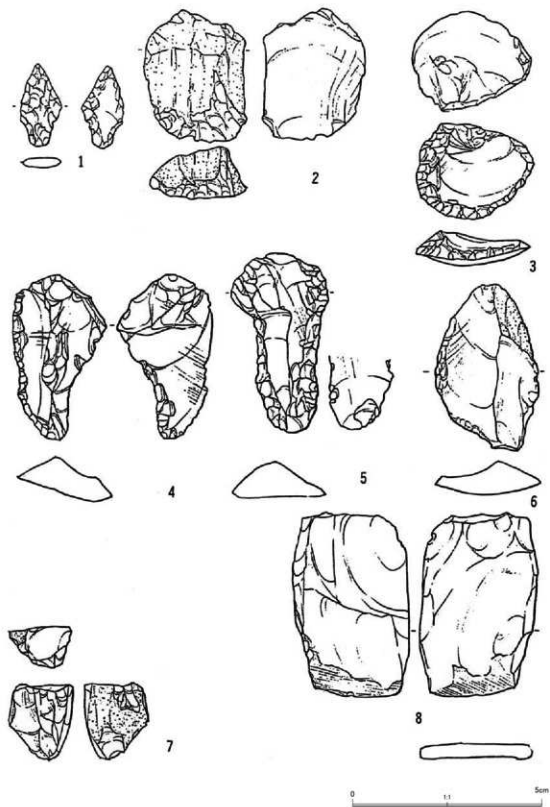
第18図 S252遺跡調査区周辺現況



第19図 S254遺跡調査区周辺現況



第20図 S252遺跡、S254遺跡出土の土器



第21図 S252遺跡、S254遺跡出土の石器

第4章 S29遺跡調査報告

第1節 遺跡の概要

S29遺跡は、昭和48・49年度に行われた埋蔵文化財包蔵地分布調査によって発見されたもので、白石区北郷4条3丁目に所在する。遺跡は、月寒川の右岸段丘にあたる北東向きの標高11～14mの台地上にある。台地の中央には北東方向に向けて延びる幅10m程の小支谷（台地との比高差5m前後）があり、この小支谷の源には最近まで豊富で良質な湧水が残っていた。遺跡は、この小支谷をとりかこむように広がっていたものである。昭和53年には、第23図で示した13mの等高線より北東部一帯について、ゴルフ練習場造成工事に先立ち試掘調査が行われ、大半の部分がすでに耕作・各種の整地作業により破壊されていることが判明したが、小支谷の北部に溝状を呈し深い、いわゆるTピットと称する遺構が1基と縄文時代中期に属する遺物が若干出土した。今回の開発申請地は、小支谷の南西部の約2,000㎡で、申請者は西岡建設株式会社である。試掘および詳細試掘調査は、昭和58年4月28日～5月12日まで実施した。

第2節 調査の方法

今回の調査は、開発申請地が、遺跡（埋蔵文化財包蔵地）内にあたることより、申請地全域に、任意の基線を設定し、これに直交する基線を10mおきに設け、最小が10m×10m単位の網目をかぶせた。網目の交点に2m×2mの試掘坑を基盤の黄褐色ロームまで掘り込むという試掘方法をとった。さらに遺物の出土状況、地層の状況より試掘坑を追加調査する事とした。その結果、開発申請地の市道に近い北西部にのみ、住宅の下となり遺物包含層及び遺構が残り、他は全て整地・耕作により破壊されている事が判明した。遺構・遺物包含層が残っていた部位は、住宅撤去後に整地されており、さらに砂利等が積まれており、日程・経費の制限より人力は用いず、重機を使用し基盤のローム層上面まで剥土した。

第3節 遺構及び出土遺物

今回の調査の結果、住宅の真下となり耕作・整地等の遺跡破壊よりかろうじてまぬがれた約250㎡という狭い範囲より円形プランのピット4個と、Tピットと通称している溝状を呈する深い陥し穴と考えられるピットが2個検出された。

ピット1

開口直径1.2m、壙底直径70cm、深さ60cmの規模で、平面プランは円形を呈する。壁は開口より中位付近までは漏斗状となり以下は直立し、平坦な壙底面へと続く。壁、壙底面とも堅くしまっている。埋土上位より1・2の土器片、3・4の剥片が検出されている。層序は、以下の通りである。I層：黒色土。II層：真黒色土。III層：暗褐色土。IV層：黒色土。V・VI・VII層：暗黄褐色土。VIII層：暗褐色土。IX層：褐色土。X層：暗茶褐色土。XI層：黄褐色粘質土。XII層：黒色土。

ビット1出土の遺物

第24図1は、現在高23 cm、口径30 cm、口縁に5個の山形突起を有し、波状口縁となる。口縁は若干外反、頸がくびれ肩が若干張り出す。いわゆる朝顔形の口縁を有した深鉢形土器で、底部を欠失している。地文は、右下りの斜縄文、頸と胴下半は、平行沈線により区画されたヘラにより研磨された磨消帯となる。内面もヘラにより入念に研磨されている。縄文時代後期、手掘式土器に相当する。

第24図2は、器高23.2 cm、口径22.9 cm、底径8 cm、平縁で口縁はやや外反、肩部がやや張り出す深鉢形土器である。地文は左下りの斜縄文、口縁には6本の平行沈線文がめぐり、肩以下には、弧状沈線、垂下する短い沈線により区画された磨消帯が作り出される。やはり縄文時代後期、手掘式土器に相当しよう。

第24図3・4は、埋土中より出土した黒曜石の薄片、いずれも表皮を多く残している。

ビット3

壙口直径1.4m、壙底直径60 cm、深さ60 cm、の規模でプランは円形を呈する。壁は傾斜し、壙底面は平坦、いずれも堅くしまっている。壙底の北西・南東の2ヶ所に黄色粘土の塊が置かれていた。埋土は以下の通りである。I層：黒色土。II層：真黒色土。III層：茶褐色土（焼土）。IV層：茶褐色土。V層：黄色ローム。VI層：褐色土。VII層：黒色土に黄褐色土がまじる。VIII層：暗褐色土。IX層：黄褐色土。X層：黒色土。XI層：黄褐色土。XII層：粘土塊。

ビット4

壙口直径75 cm、壙底直径42 cm、深さ35 cmの規模で、プランは円形を呈する。壁は若干傾斜し、壙底は平坦、いずれも堅くしまっている。埋土の状況は以下の通りである。I層：耕作土。II層：茶褐色土（焼土）。III層：黒色土。IV層：褐色土。V層：黒色土。VI層：暗褐色土。

ビット5

壙口長径3.4m、短径70 cm、壙底長径3.5m、短径10 cm、深さ1.4mの規模で、プランは狭長の楕円形である。長軸方向は、北々西一南々東である。壙底面は平坦、北々西壁はオーバーハングしている。埋土の状況は以下の通りである。I層：黒色土。II・II'層：暗褐色土。III層：茶褐色土。IV層：真黒色粘質土。V層：黄褐色土。VI層：真黒色粘質土。VII層：黄褐色火山灰混り土。VIII層：真黒色粘質土。IX層：淡黄色火山灰まじり粘質土。

ビット6

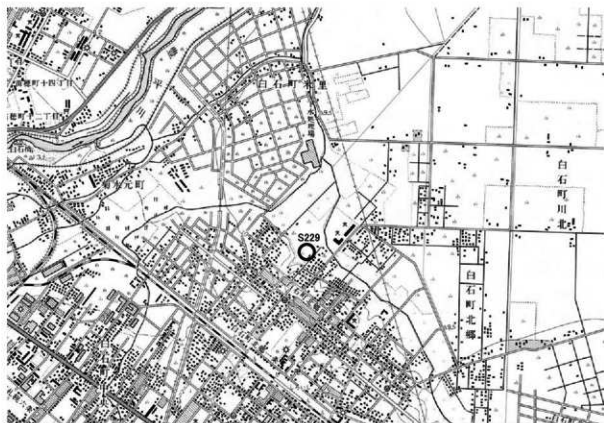
壙口長径1.7m、短径1.1m、壙底長径1.2m、短径40 cm、深さ1.2mの規模で、プランは楕円形、長軸方向は、東一西である。壙底面中央に柱穴状の小ビット（直径10 cm、深さ20 cm）が1個検出されている。埋土の状況は以下の通りである。I層：黒色土。II層：暗褐色土。III層：暗黒褐色土。IV層：暗褐色土。V層：黄褐色土。VI層：黒色粘質土。VII層：黄褐色土。VIII層：火山灰まじりの灰褐色土。

ビット7

壙口直径70 cm、壙底直径45 cm、深さ20 cmの規模で、プランはほぼ円形である。壁はやや傾斜し、壙底面は平坦、いずれも堅くしまっている。埋土の状況は以下の通りである。I層：焼土混入の黒色土。II層：黒色土。

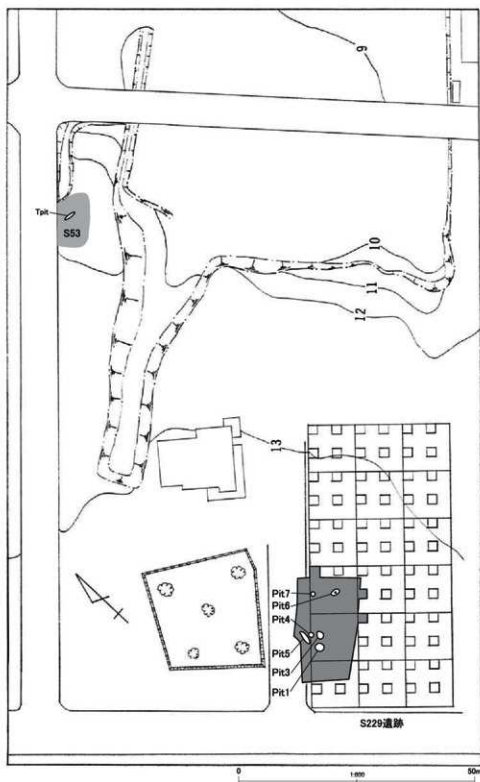
出土遺物

第25図1～12の土器は、ビット1とビット3の周囲に散乱し発見されたものである。2・3は平行沈線を弧状に区画する文様をもつ鉢形土器、他は深鉢形土器、1は口縁で平行沈線のみみられ、4・5は平行沈線に区画された部位に斜行する沈線を並列して描く、6・9～12は、平行沈線、縦の短い沈

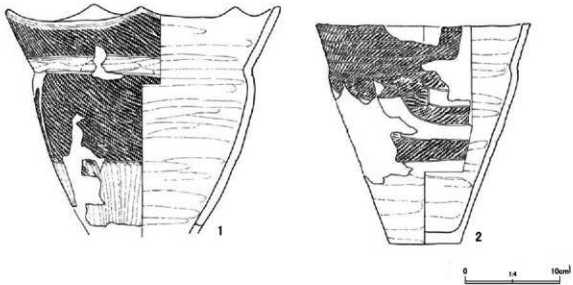
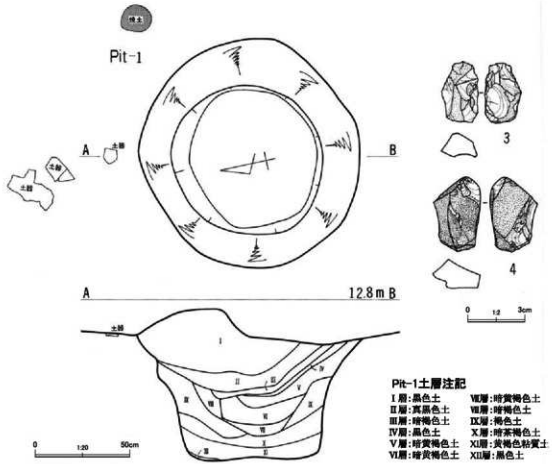


第22図 S229遺跡調査位置 (S=1/25000)

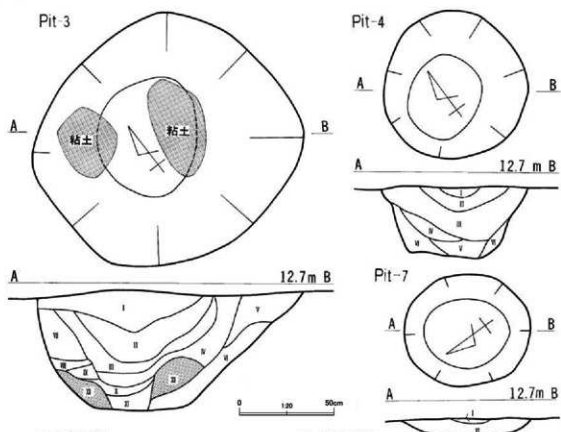
線にて区画された磨消帯をもつもの、7・8は器面を入念に研磨された胴部片、いずれも縄文時代後期中葉の土器群に相当する。13~18の石器もやはりピット1とピット3の周囲に散乱していたものである。13は、幅広のかえしを有する有茎石鏃、14は、太い柄を有する入念に両面加工の施される銚先、15・16は縦長剥片、17は、剥片の一端を刃部とした鏃、18は、幅広剥片を取った石核、いずれも黒曜石製である。



第23図 S229遺跡調査区周辺現況及び遺構配置



第24図 S229遺跡ピット1 実測図及び出土遺物



Pit-3土層注記

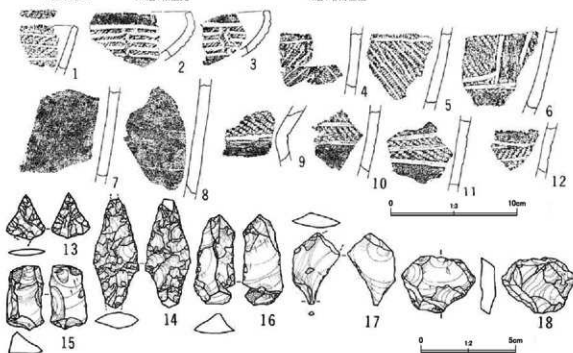
- | | |
|----------------|------------------|
| I層: 黒色土 | V層: 黒色土に黄褐色土が混じる |
| II層: 高黒色土 | VI層: 暗褐色土 |
| III層: 茶褐色土(焼土) | IX層: 黄褐色土 |
| IV層: 茶褐色土 | X層: 黒色土 |
| V層: 黄色ローム | XI層: 黄褐色土 |
| VI層: 褐色土 | XII層: 粘土塊 |

Pit-4土層注記

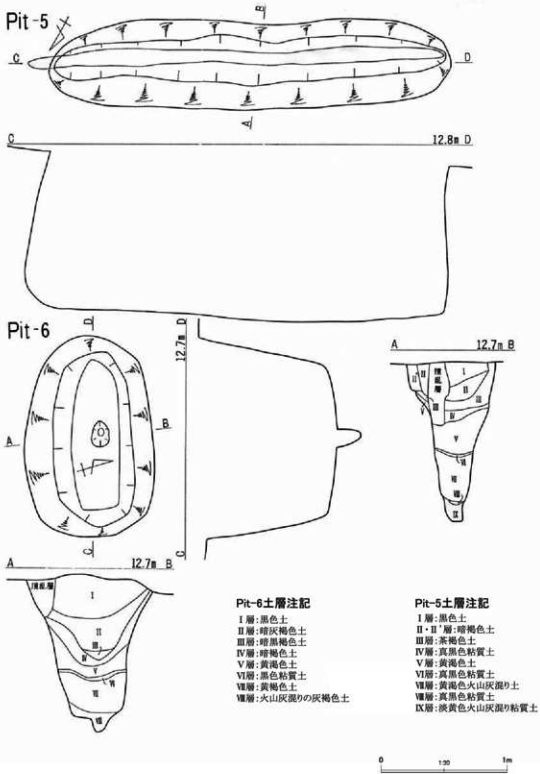
- | |
|---------------|
| I層: 緑作土 |
| II層: 茶褐色土(焼土) |
| III層: 黒色土 |
| IV層: 褐色土 |
| V層: 黒色土 |
| VI層: 暗褐色土 |

Pit-7土層注記

- | |
|--------------|
| I層: 焼土混入の黒色土 |
| II層: 黒色土 |



第25図 S229遺跡ピット3・ピット4・ピット7実測図及び出土遺物



第26図 S229遺跡ピット5・ピット6実測図

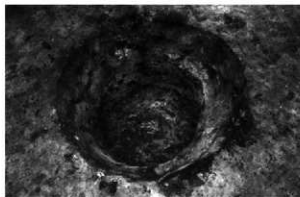
図版1 S229遺跡調査状況



A 遺跡発掘区全景



B 遺構群近景



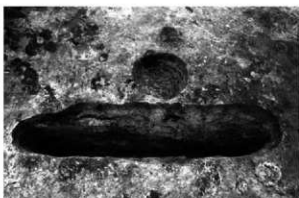
C ビット1



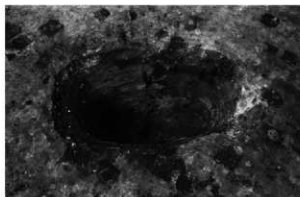
D ビット3



E ビット4



F ビット5



G ビット6



H ビット1～3付近遺物出土状況

図版2 S29遺跡出土遺物



第5章 T310遺跡調査報告

第1節 業務概要

遺跡の所在地：札幌市豊平区平岸5条10丁目26番地
 開発申請者：太平洋興発株式会社札幌支店
 開発面積：1.69ha
 試掘調査期間：昭和58年9月10～13日、10月17～22日
 確認調査期間：（発掘業務）昭和58年10月24日～11月14日
 （整理業務）昭和58年11月15日～昭和59年2月25日

第2節 遺跡概要

T310遺跡は、札幌市の都心より見て南東方向にあり、地元では通称平岸坊主山と呼んでいる北北東に向け舌状に突出した台地上に位置する。住所は、豊平区平岸5条10丁目である。本遺跡の存在は、昭和10年代に後藤寿一によって発見され（後藤寿一1937「札幌市及び其付近の遺跡・遺物の二、三に就て」『考古学雑誌』27-4）、以後平岸坊主山遺跡として多くの研究者に知られていた。昭和39年には、宅地造成に先立ち、台地の北西部の裾の一部が大場利夫博士によって発掘調査が行われており（畑宏明1966「札幌市付近の遺跡—資料篇—Ⅱ、札幌市平岸坊主山遺跡」"Aynu Moshirī Ⅱ）、昭和48年には平岸南部地区地区画整理事業に伴い市道新設部分にあたるやはり北西部の裾の一部約820㎡を札幌市教育委員会が発掘調査を行っている（札幌市教育委員会1974「T310遺跡」札幌市文化財調査報告書Ⅳ）。さらに昭和49年には、公園造成計画に伴い、坊主山丘陵の南西部一帯の試掘調査も行われている。遺跡地の現在の景観は、舌状に張り出した台地の周囲は全て宅地によってとりかまわれ孤立丘のような状態で一部は畑地として耕作され残存している状況にある。今回の調査では、土器、石器、破片等の遺物は、台地の山頂より裾野にかけほぼ全域にわたり点々と散乱しているが、永年の耕作及び火山灰採集によりほぼ上半分程度の高さの地域は削り取られ地表に支笏火山灰が露出した状況となっている。裾野部分は、上部より流れおちた黒色土が厚く堆積し、特に北側と北西側斜面からは数多くの遺物が出土した。また、北西斜面の一部では遺構等も見つかっている。

第3節 調査の方法

今回の調査は、開発申請地域が遺跡と考えられている台地全体にわたるため、耕作及び火山灰採集の種々の破壊からまぬがれている埋蔵文化財埋蔵地が、どの程度残されているかを確認する事より始められた。舌状台地の北斜面、南東斜面、北西斜面について、それぞれ任意の基線を設定し、これを10mごとに分割し基線に直交する線を重ね、斜面全体に10m×10mを単位とする網目をかぶせ、この交点内側に2m×2mの試掘坑を、基盤である月寒火山灰層まで掘り下げ確認するといった方法をとった。また遺物の出土状況、地層の変化に応じ、2m×2mの試掘坑をさらに追加するといった方法とした。その結果、北斜面では47.5m等高線より下の地域から遺物が出土するが、遺構等はない

と結論された。南東斜面では、55m等高線より下の地域に遺物が若干出土するものの、幅20m程度の小支谷が東に向け伸びており、その状態より良好な包含層は遺存しないと結論された。北西斜面は、畑地として耕作中であり、地表面にも多くの土器、石器が散乱している状態で、特に50mの等高線より下の地域には良好な遺物包含層が残っていると判断された。とりわけ47.5mの等高線にかこまれる地域には、遺物が集中して出土し焼土（炉跡）が2ヶ所、堅穴状の遺構が一基検出されている。

第4節 遺構及び出土遺物

今回の確認調査では、北西斜面で1基の堅穴住居跡状の遺構が検出された。平面プランは、隅丸長方形を呈し、規模は長軸2.4m、短軸1.3m、現存する壁高約20cmを算する。長軸方向は、北北東—南南西である。覆土中に、ほぼ1個体分の土器が土圧により潰れた状態で出土した。掘り込みは、a層：黒色土層の下面、b層：暗黒褐色土層の上面より行われ、c層：黒褐色土層（粘土粒含）を切って基盤の黄褐色火山灰層にまでおよんでいる。埋土は、I層：暗黒褐色土層、II層：暗黒褐色土層（ややしまる）、III層：黒褐色土層となっている。

遺構出土の土器（第29図）

遺構覆土中から土圧により潰れた状態で出土した土器で、器高30.2cm、口径28.2cm、器厚1.5cm内外の、深鉢形を呈する丸底の土器である。口縁は、若干外反し平縁となり、口唇上は丸味を帯びている。全体のプロポーションは砲弾形に近い。器面全体には左下りの単筋縄文が施文され一部にはあやくり文も見られる。内面は横位主体の整形痕が残る。色調は、上半が炭化物が付着し黒く、下半は黄褐色を呈する。胎土中には多量の繊維と小石を含み、もろい。縄文時代前期（約5,000年前）、静内中野式土器に代表される土器である。

第5節 発掘区出土の遺物

多時期にわたる多量の土器と石器が出土している。代表的なものを、図に従って説明する。

土器

縄文時代早期（約7,000～6,000年前）（第30図4～9）

4は、比較的薄手で横位の貝塚条痕文を特徴とし内面にも横位の貝塚条痕文がある。

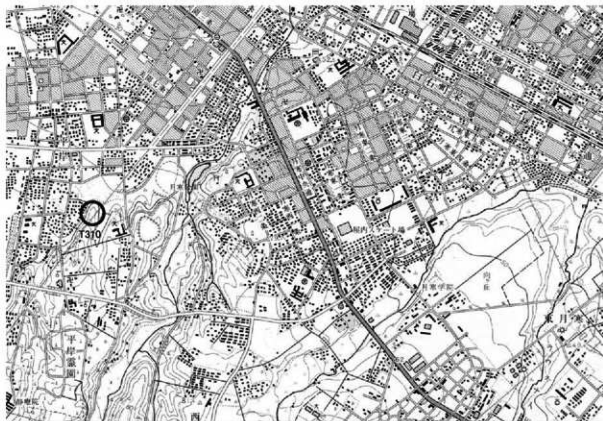
5は、無文、沼尻式土器に相当する。6～9は、撚りの方向の異なる2本の撚糸を1単位とする撚糸圧痕文、絡糸体圧痕文等を特徴とする土器群である。6のみ撚糸圧痕文に魚骨の背骨を押圧する魚骨文が2段みられる。東鋼路IV式土器に相当する。

縄文時代前期（約6,000～5,000年前）（第30図10～17）

器厚が1～1.5cmと厚く、胎土に多量の繊維を含む土器群で砲弾形を呈し、丸底である。静内中野式土器に相当する。

縄文時代中期（約5,000～4,000年前）（第30図1、第30図18・19、第31図20～45）

a（18～22）比較的厚手で粗雑な作りであり、口縁は若干外反、円筒式に近い深鉢形を呈する。口縁に太い円形刺突文をめぐらすことを特徴とする。胎土中には若干の繊維と多量の砂粒を含む。18、19のように口縁内面に縄文を施文する例もある。トコロ6類土器に相当する。b（23～42）やはり円筒形の深鉢形を呈する。半截竹管による沈線文、爪形文、突引文、粘土紐による貼付文を特徴とする土器群である。サイベ沢Ⅷ式土器の地方化したタイプと称される平岸天神山式土器に類似する。



第27図 T310遺跡調査位置 (S=1/25000)

縄文時代後期(約4,000~3,000年前)(第30図2、3)

2点とも遺構の周囲から土圧により潰れて出土したもので、2は底部のみを欠き、3は、全体の4分の3程が現存している。2は、やや外反気味の口縁で4個の大形の山形突起を有する波状口縁をなし、頸がくびれ、肩が若干張る、いわゆる朝顔形の口縁を有した深鉢形土器である。現存高32cmと大形である。突起部と頸のくびれ部分は入念に研磨され、口縁、肩~胴中段の2部位には、左下りの斜行縄文を地文にやや幅広の横走沈線文を数段めぐらし、6~7分割するように弧線文にて区切る。手稲式土器に相当する。3は、8個の山形突起を有する波状口縁で、口縁は若干外反、頸はかすかにくびれ、以下徐々に底部へ向けすはまる深鉢形を呈する。現存高31cm、口径33.2cmを算し、大型である。口縁及び肩~胴下半に細い沈線による鋸歯状及び凸レンズ状に構成される文様が施文される。頸は帯状に軽く研磨されている。やはり手稲式土器に相当しよう。

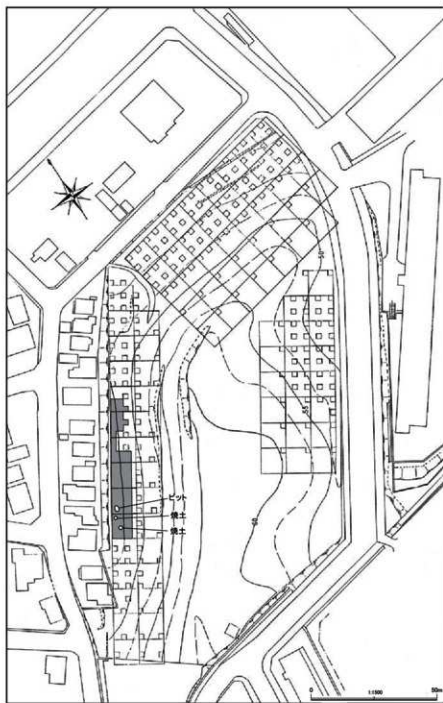
統縄文時代後期(約1,500年前)(第31図46~51)

46、48、49は三角形の列点文がめぐる。47は、撚糸文により帯縄文風の文様が施文される。後北C2式土器に相当する。

石器(第32~36図)

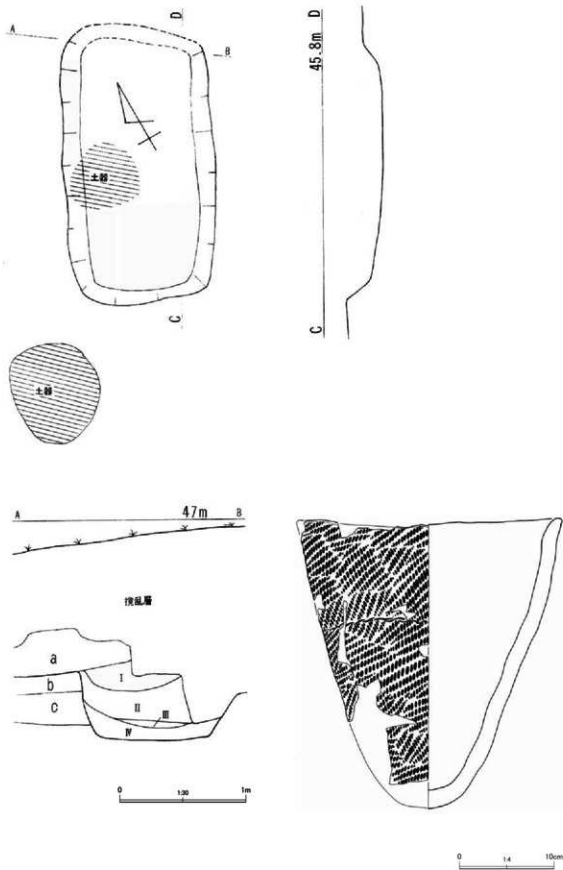
1・2は、入念に両面加工が施された石鏃。有茎である。3・4は、ナイフもしくは、鋸先と考えられるもので入念に両面加工が施されている。5・6・8は、ナイフ状石器。5・6は入念な両面加工が施され、8は、素材面を大きく残す。7は、搔器。背の高い剥離が第1次剥離面よりなされている。9・10は、剥片のエッジの一部に細かな剥離痕のある剥片。11~17は、石斧及び石斧の破損品である。11は、打撃による大きな整形痕が残る。入念な研磨加工が施されている。刃の断面は両刃。12

・13は、刃部が未研磨の状態の未成品。14～17は、頭部のみの破片である。18～20は、砂岩を使用した砥石である。18は、大型で、断面は四角形4面を使用面とする。使用面は内がへこみ、大きくコンケーブしている。19は、18と同種だが小型。20は、一面のみ使用、中央が大きくへこむ。21は長楕円形の石の長軸両端に打ち欠き繩をかける部分を作り出した石錘。22～28は、擦石。22・23は、全面を叩打により冠形に作り出したもので下面を擦面とする。いわゆる北海道式石冠である。24は、丸石の一部を擦面としたもの、25～27は、やや、へん平の石の長い一辺を擦面としたもの、28は、台形に近く整形した石の長く狭い部分を擦面としたものである。25～28は、へん平打製石器と称されるものである。29～40は、丸石、棒状石をたたき

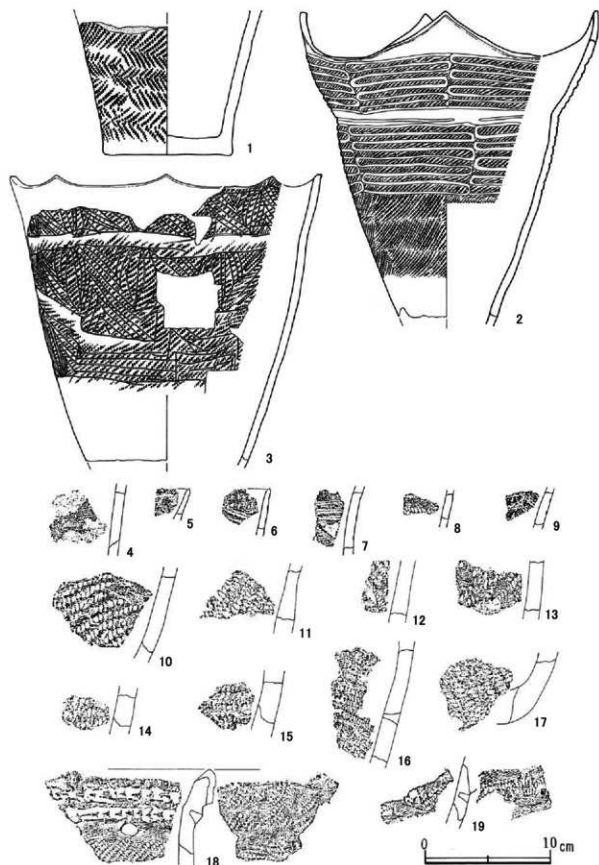


第28図 T310遺跡調査区周辺現況及び遺構配置

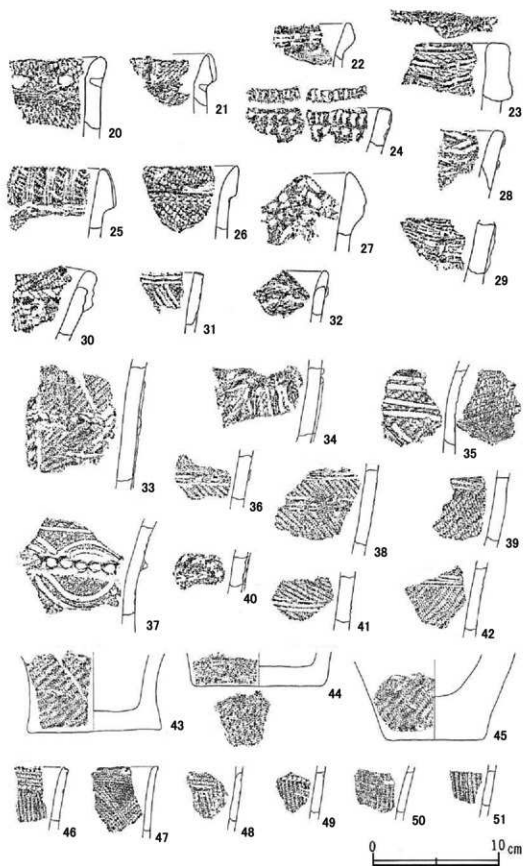
石として使用したもので、使用部は叩打によりボロボロの状態になっている。41・42は、石皿。大型、へん平石の一面ないしは表裏の2面を使用面としている。図示していないが他に10点程同種の大型のものが出土している。



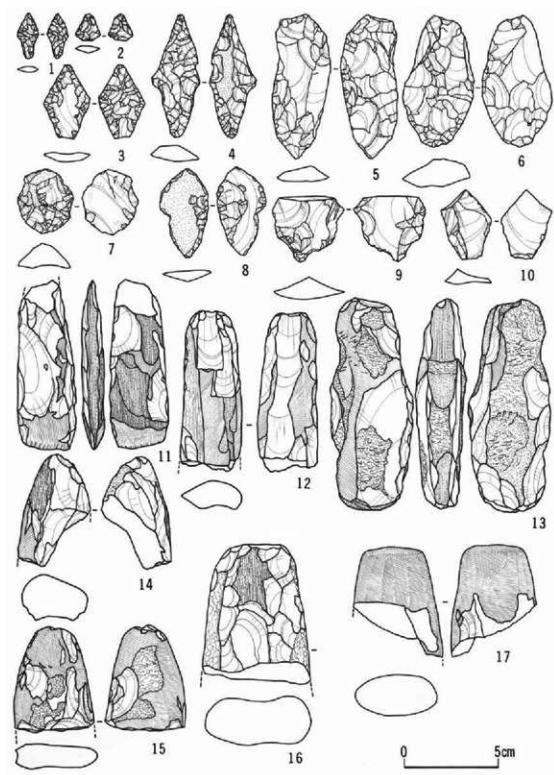
第29図 T310遺跡ピット実測図及び出土遺物



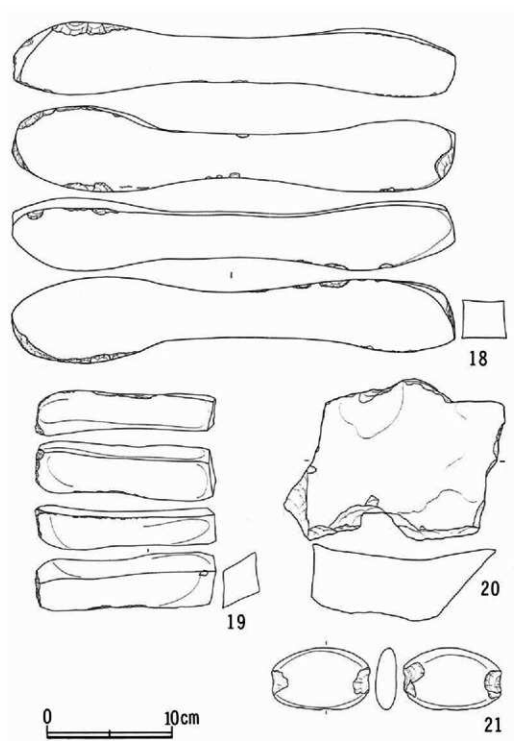
第30図 T310遺跡発掘区出土の土器(1)



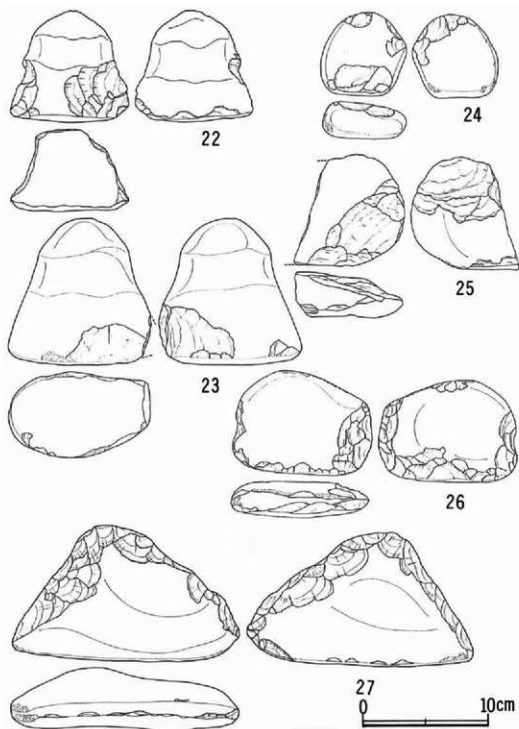
第31図 T310遺跡発掘区出土の土器（2）



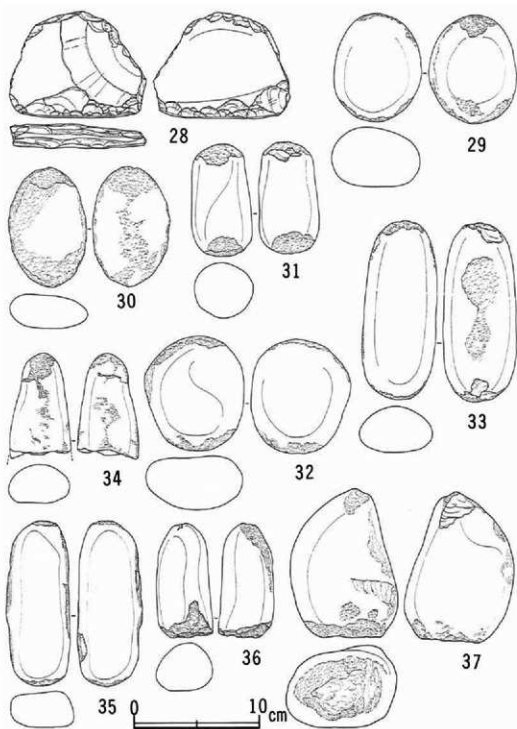
第32図 T310遺跡発掘区出土の石器(1)



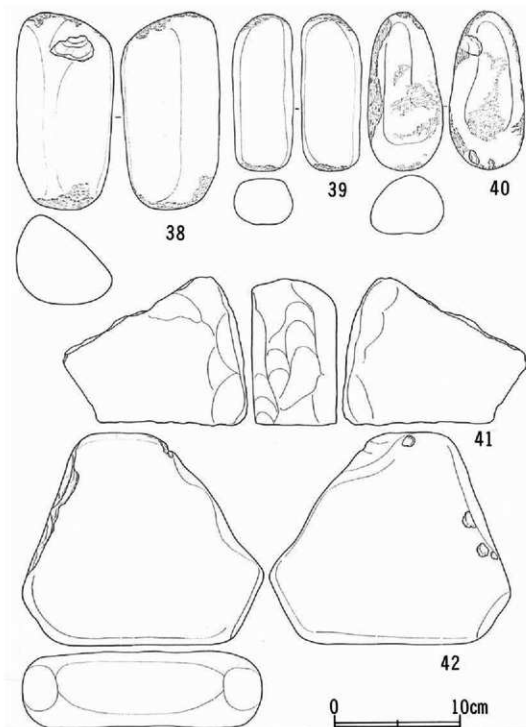
第33図 T310遺跡発掘区出土の石器（2）



第34図 T310遺跡発掘区出土の石器（3）



第35図 T310遺跡発掘区出土の石器(4)



第36図 T310遺跡発掘区出土の石器（5）

図版3 T310遺跡調査状況及び出土遺物



A 竪穴住居跡状遺構（北西から）

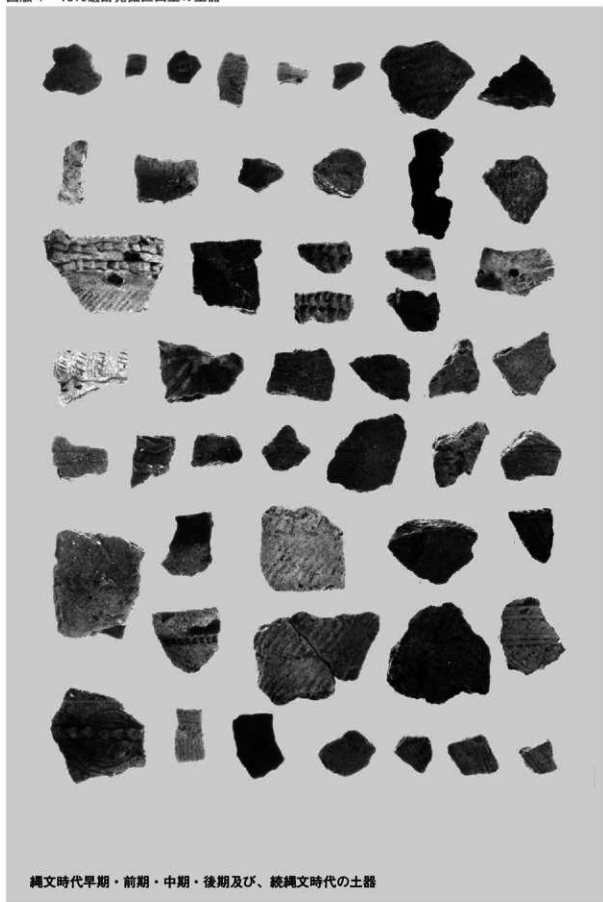


B 竪穴住居跡状遺構（北東から）



C 竪穴住居跡状遺構及び発掘区出土土器

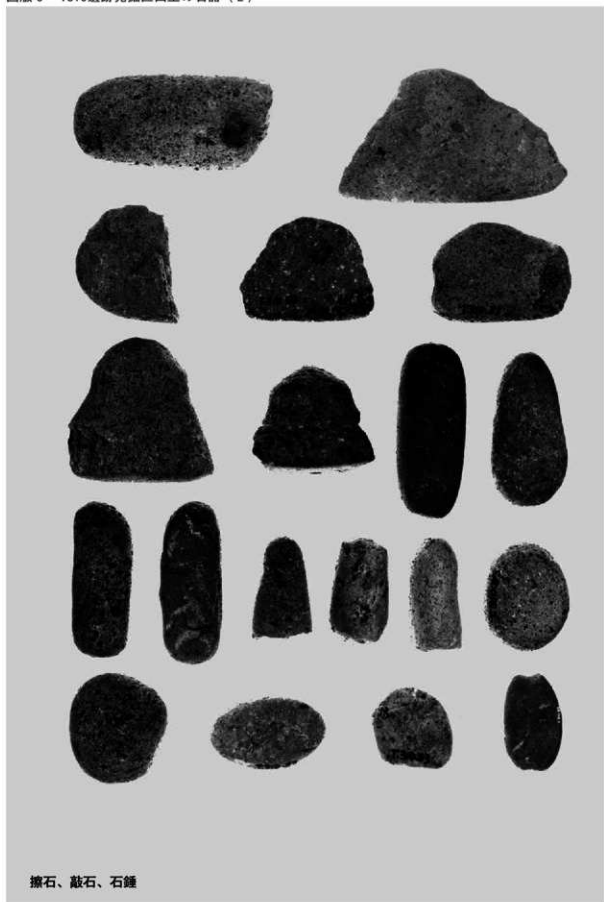
図版 4 T310遺跡発掘区出土の土器



図版5 T310遺跡発掘区出土の石器(1)



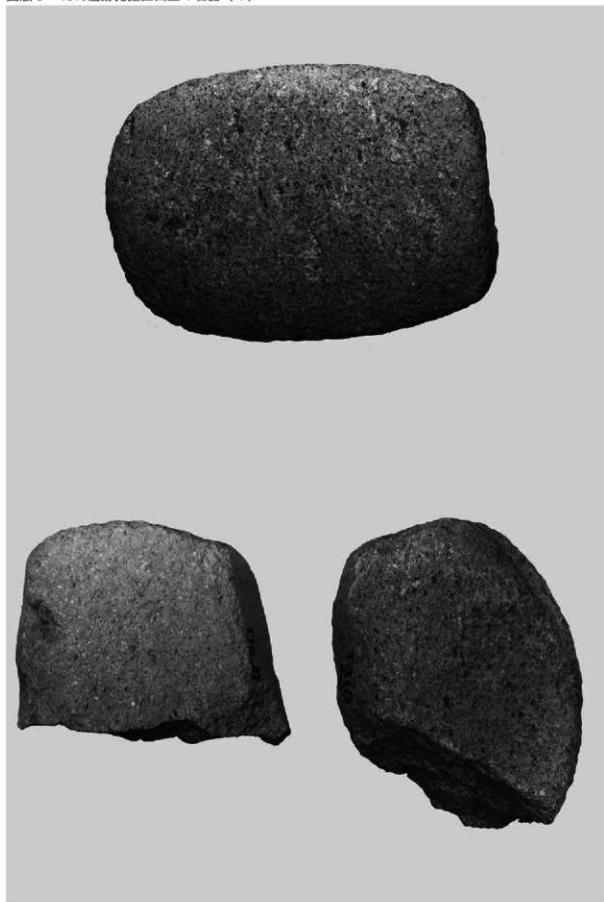
図版 6 T310遺跡発掘区出土の石器(2)



図版7 T310遺跡発掘区出土の石器(3)



図版 8 T310遺跡発掘区出土の石器(4)



第6章 T233遺跡調査報告

第1節 遺跡の概要

本遺跡は、札幌市豊平区西岡2条12・13丁目に所在する。本遺跡は札幌市教育委員会が昭和48・49年度に全市に実施した埋蔵文化財包蔵地分布調査によって発見したものである。本遺跡をのせる台地一帯は、いわゆる野幌丘陵と称される台地の西端にある。遺跡は、月寒川と望月寒川によって開析された台地上にあり、望月寒川の右岸、南西向きの傾斜地上に立地している。遺跡の標高は、最大で112m、最小で102mあり、東部の高い部分は過去において大規模に削平されている。分布調査時の記録では、斜面全域（約1.5万㎡）にわたり遺物の散乱がみられると記されている。今回の調査でも同様であり、縄文時代早期・中期の土器片及び石器が地表に散乱していた。月寒川、望月寒川の流域には多くの遺跡が存在している。時期も旧石器時代、縄文時代全般、続縄文時代にかけてと多時期にわたっている。野幌、月寒の丘陵地とそこを流れる大小の河川は、先史時代の人々にとって格好の生活の場を提供していたことが判る。

第2節 調査方法

今回の調査は、遺跡全域が（株）日本共同信販により宅地造成が行われる事となったため行われたものである。試掘調査では、開発申請地全体に10mメッシュの網をかけ、その交点部分に2m角の試掘坑を掘り、遺物、遺構の存在の確認を行った。その結果、斜面の南側部分に土器等の遺物が多数出土し、開発申請地のほぼ中央の中段の農道付近に陥し穴と考えられる遺構が存在することがわかった。しかし、試掘では遺跡の概要がしぼり切れず、遺跡の概要を明らかとするため確認調査を行うこととした。確認調査は、遺物が集中して出土する南部区域では、試掘時よりの試掘坑をさらに拡張し、遺物の採集をはかり遺構の存在をさぐった。試掘時に陥し穴等の存在が確認された部分については1m幅のトレンチを掘り、その後比重機を使用し、表土を剥ぎ遺構を確認した。結果、試掘坑を拡張した区域については多量の遺物が得られたが、遺構の存在は確認されなかった。比重機を使用し表土を剥した部分では、陥し穴と考えられるピットが並列し7個発見され、さらに円形の土壇墓と考えられるピットが1個検出された。

第3節 遺構

比重機を使用して剥した地区より、7個のTピットと称している陥し穴と考えられる溝状の深いピットが7個、傾斜面に沿って併列し発見された。さらに、これらのTピット群より若干はなれ、円形の浅い土壇墓状のピットが1個発見されている。

第4節 出土遺物

遺跡の南区域より主に得られている。土器は縄文時代早期、中期に属するもので、石器、石片等も

多く出土している。

土器

多量の縄文時代中期に属する土器と、縄文時代早期の貝殻文平底土器が若干出土した。

縄文時代早期

総量としては少ないが、2個体に復元された。いずれも貝殻文を特徴とする平底土器で、沼尻式土器といわれる土器群に近いものである。

1：口径12 cm、器高18 cm、器厚8 mm 円筒形で平底である。口縁は4～5個の山形突起を有し波状口縁となっている。口唇上は平らに整形されている。口縁に2段瓜形文がめぐり、胴部全体は縦位のヘラ研磨が入念に行われている。内面には貝殻条痕がみられる。胎土中には砂粒、火山灰粒が多く含まれ、焼成は良いが器面は風化し、ザラザラしている。

2：口径11 cm、現存16 cm、器厚8 mm 内外、円筒形で、底を欠損しているが、器形より平底をなすと思われる。平縁で、口唇上は外側が若干傾斜するように削られている。器面及び内面は、貝殻条痕文が一面につけられている。胎土中には、砂粒、火山灰粒を多く含む。焼成は良好で、暗茶褐色を呈する。

縄文時代中期

復元できた個体は、図版に示す底部のみであるが多量の破片が得られている。胴部に太い貼付帯が数段めぐらされているグループ。口縁付近を主に貼付紐及び半截竹管文による文様が特徴となるグループ等がある。底径約9 cm、現存高8 cm、器厚1.2 cm、底面が若干外に張り出す。胎土中には火山灰粒と大粒の砂粒を含む。右下がりの斜行縄文が施文されている。

石器

多数の石器が得られているが、ほとんどが耕作土中よりの出土であり、どの土器に伴うものか不明である。

ナイフ状石器（第41図1～3）

1は、黒曜石製。厚くレンズ状の断面をしている。入念な両面加工が施されている。形状より、石槍等の柄部の可能性が強い。2は、比較的厚手の縦長剥片の側縁に剥離が集中してある。黒曜石製。3は、頁岩の縦長剥片の一面に剥離加工が入念に施され、つまみ部が作り出されたもので一般に石匙と称されているものである。

石斧（第41図4・5）

いずれも蛇紋岩製で全面を入念に研磨している。5は、擦り切り痕が残る。

石錘（第41図6）

安山岩の扁平楕円形の河原石の長軸両端を打ち欠き作り出したもので、80 g程の重量である。

たたき石（第41図7・8）

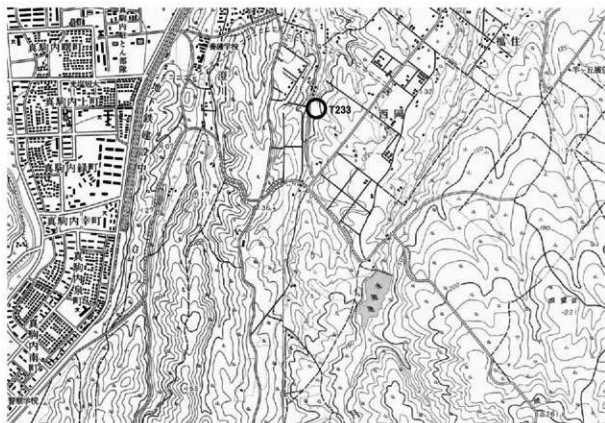
安山岩の一面ないしは2面にわたり、たたき痕が残るものである。

擦石（第42図9）

三角柱状の安山岩製で稜線が使用部面であり、擦り痕が残る。

石皿（第42図10）

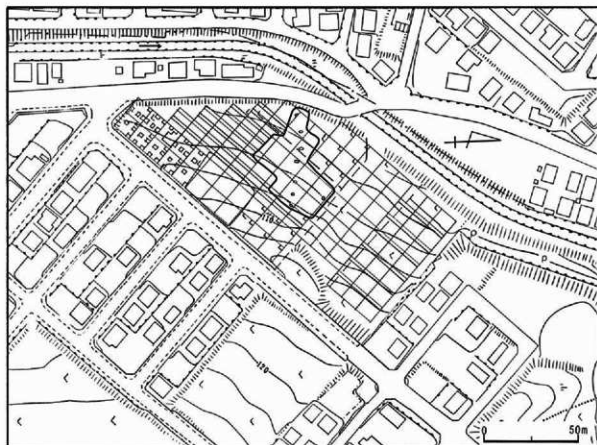
扁平、大型の安山岩の一面に擦り痕、若干のたたき痕が残る。



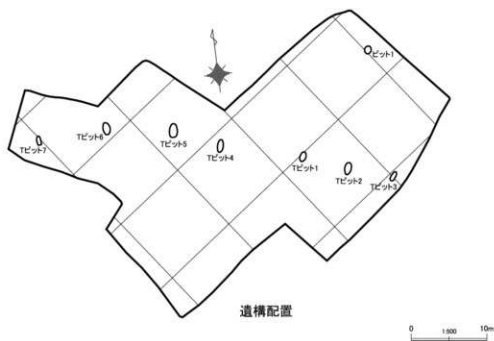
第37図 T233遺跡調査位置 (S=1/25000)

第1表 T233遺跡遺構属性表

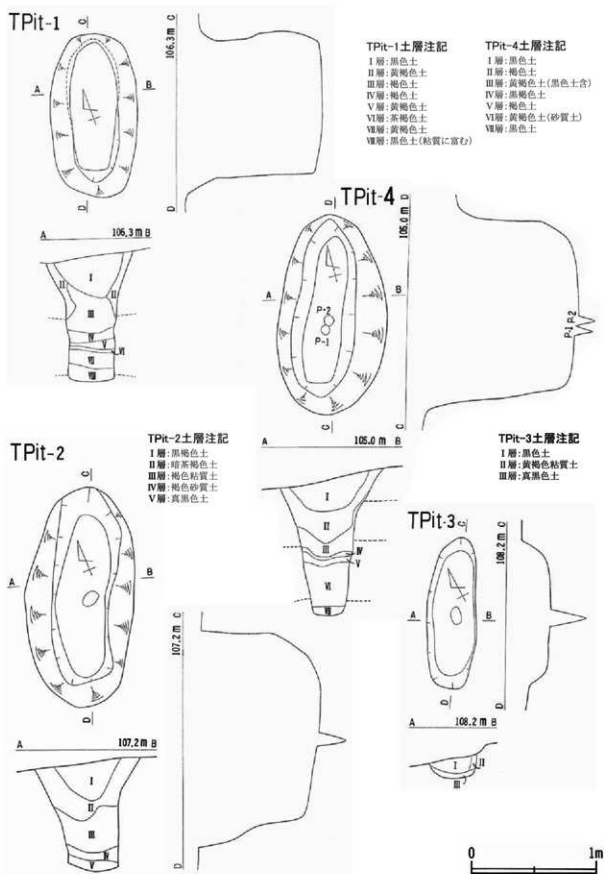
遺構名	規模 (cm) 検出面	規模 (cm) 底面	深さ (cm)	長軸方向	備	考
ピット1	100×94	86×78	26	北東-南西		
Tピット1	128×70	120×38	100	北々西-南々東		
Tピット2	174×86	128×40	88	北々西-南々東	底面中央に小ピット1個 (径8 cm×深さ24 cm)	
Tピット3	120×40	100×32	16	北西-南東	底面中央に小ピット1個 (径6 cm×深さ30 cm)	
Tピット4	158×84	116×28	108	北々西-南々東	底面中央に小ピット2個 (P-1:径7 cm×深さ16 cm、P-2:径6 cm×深さ17 cm)	
Tピット5	174×114	130×34	114	北々西-南々東	底面中央に小ピット1個 (径7 cm×深さ18 cm)	
Tピット6	132×96	86×32	124	北-南	底面中央に小ピット1個 (深さ34 cm)	
Tピット7	108×48	100×28	58	北々西-南々西	底面中央に小ピット1個 (径7 cm×深さ23 cm)	



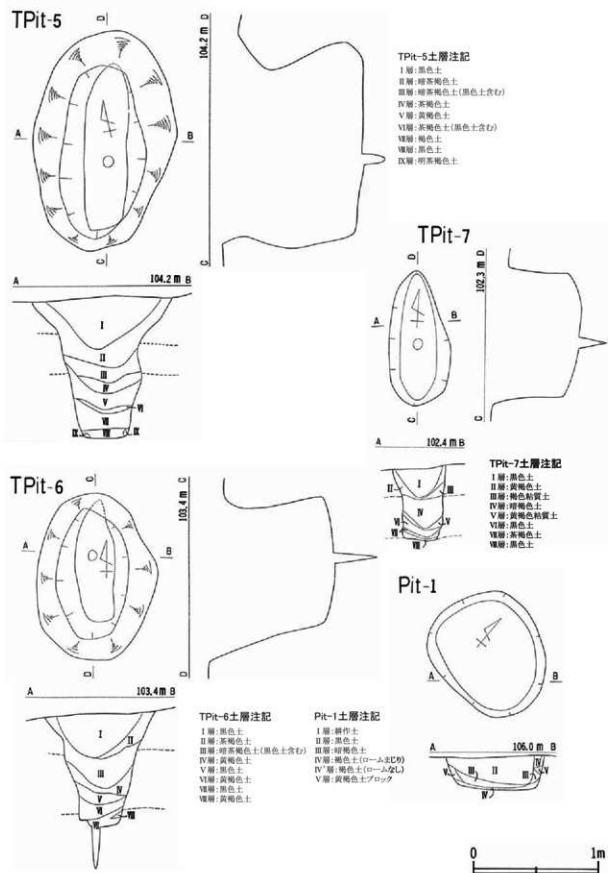
調査区周辺現況



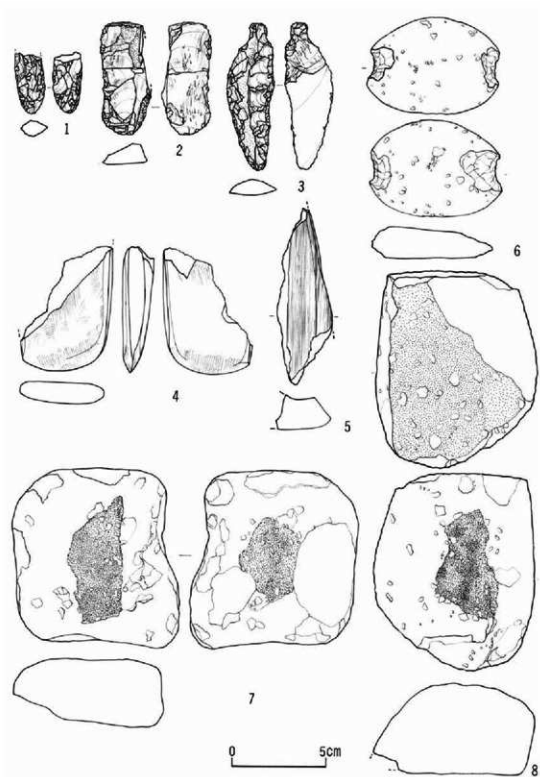
第38図 T233遺跡調査区周辺現況及び遺構配置



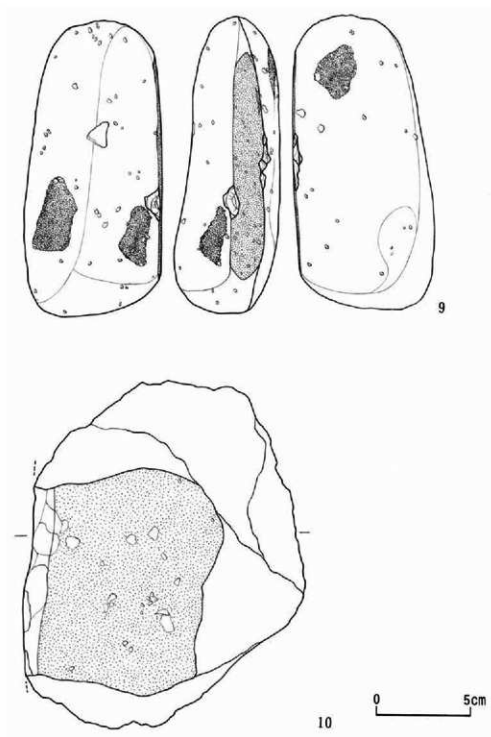
第39図 T233遺跡遺構実測図(1)



第40図 T233遺跡遺構実測図(2)



第41図 T233遺跡発掘区出土の石器(1)



第42図 T233遺跡発掘区出土の石器（2）

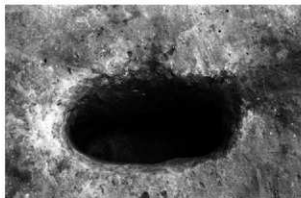
図版9 T233遺跡調査状況及び出土遺物



A 遺跡遠景



B 発掘風景



C Tピット1



D Tピット2



E Tピット4



F Tピットの配列状況



G 出土土器（縄文早期）



H 出土土器（縄文中期）

第7章 M353遺跡調査報告

第1節 遺跡の概要

M353遺跡は、札幌市教育委員会が昭和48、49年度に実施した埋蔵文化財包蔵地分布調査によって発見したもので、都心部より国道230号線（通称石山通）を定山溪方向に進み、豊平川にかかる石山大橋より1 km程進んだ豊平川の右岸段丘上にある。遺跡の地番は、札幌市南区石山1条9丁目である。本遺跡をのせる段丘は、豊平川の右岸にあたり、基本的には豊平川の浸蝕をうけ台地状となった河岸段丘であり、穴の沢川、オカバルシ川といった中小河川がさらに深い沢を刻み複雑な地形を作り出している。本遺跡の標高は、132m程であり、遺跡地の前面（北側）にはオカバルシ川が北東方向に向け流れ、500m程で豊平川に合流している。オカバルシ川と遺跡の比高差は、10m内外である。遺跡の背後（南側）は、序々に高まり標高200m～500mの山岳地へと連なっている。遺跡の周囲は、かつては水田として耕作され、昭和30年代前半期に大規模造田工事のため広い範囲にわたり削平、盛土がなされている。ために、遺跡の大部分は削平されており、今回の調査では若干の遺構が発見されるにとどまった。

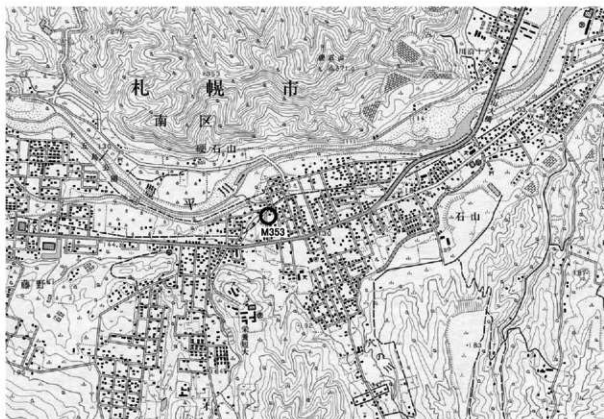
第2節 発掘調査の方法

昭和48年、49年度に実施した埋蔵文化財包蔵地分布調査時には、畑地上に若干の土器片、黒曜石片等が散乱した状態であった。試掘調査は、対象地約2,000㎡に対し全域の約4%程度を発掘調査する方法で昭和59年12月に実施した。その結果約2,000㎡の範囲に土器片、黒曜石片等が多く検出された。しかし造田工事による削平がかなり広い範囲にわたり行われている事、また削平がおよんでいない部分が若干残り、その部分には遺構の存在が予想される事より、詳細な確認調査を実施する必要があると判断された。確認調査は、調査対象地2,000㎡に対し、全体の25%程度の面積を発掘調査し、遺物の採取、遺構の検出を行うこととした。結果、全体の約30%である670㎡を発掘し、縄文時代の竪穴住居跡1軒、縄文時代のピット1基を検出し、多量の土器片、石器、石片等の遺物類を採取した。

第3節 遺構及び出土遺物

（1）第1号竪穴住居跡

発掘区の西側、市道沿いに検出したもので、耕作土である黒色土を剥いだ階段でその存在を確認した。尚、西側の壁部分及び柱穴の一部は、市道を敷設した時点で削り取られており検出していない。プランは、一方の壁が検出されていないが、隅丸方形を呈する。規模は、一辺の長さが6.2mであり、壁高は、東壁で30 cm、南壁で35 cm、北壁で30 cmを数える。主軸の方向は、ほぼ南一北を指し、カマドは、南壁にあり中心線より西側にずれて位置している。床面は、ほぼ平坦で堅緻に踏み固められているが、中央部付近及びカマドの周囲は特にその傾向がいちじるしい。床面直上の数センチメートル上の覆土中には、炭化した太い木材が数本単位でかたまり出土している。東壁中央付近、北壁中央付近には、焼土の分布が炭化木材と同一層中にみられた。壁は、いずれの部分もしっかりしており、



第43図 M353遺跡調査位置 (S=1/25000)

直立に近く立ちあがる。柱穴は、各コーナーの部分に1個ずつの合計3個検出しているが、南西コーナーの部分は市道にかかるため検出していない。いずれも一辺が25 cm程の隅丸方形を呈し、深さは、P: 30 cm, P: 35 cm, P: 40 cm程を算し、底に向け若干先細りとなっている。床面の土に比し色調は暗く、非常に軟弱であり、検出は容易であった。住居跡の埋没の状況は、以下のとおりである。I層：耕作土（黒色土＋若干の火山灰）。II層：黒色土（火山灰を多量に含む）。III層：乳白色火山灰。IV層：黒褐色土（土粒が粗い）。V層：暗褐色土（若干粘性がある）。VI層：黄褐色粘質土（焼土粒、炭粒、黒色土粒を多量に含む）。VII層：暗黄褐色土（炭粒、焼土粒を含む、粘性に富む）。VIII層：黒褐色土。IX層：黄褐色土。

カマド

本住居跡には、南壁のかなり西側に偏在した位置にカマドが構築されている。煙道は、カマド本体の中央より南に向け掘り込まれ、その方位は、ほぼ南で住居跡の長軸と一致している。焚口の左右には、通常みられる粘土・ロームのマウンド（袖）は認められず、ほぼ円形のプランを呈する焼土、その上の灰層上に10個の大型の河原石が散らばっていた。河原石を取り上げその下面を削平すると、煙道の延長線より延びたように左右両側に3本ずつ計6本の直径10 cm内外で深さ10 cm程の柱穴状小ピットが検出された。この柱穴状小ピットの配列よりみると、カマドの外壁をなす左右の壁部分に杭を打ち込み、これを芯とし粘土、大型の河原石を積みカマドの外壁を作りあげたものと考えられる。煙道は、カマド本体より南壁に1.5m程の長さで真南に向けU字状に掘られており、南に向け徐々に高く傾斜して行く、端では住居跡の床面のレベルと同等の高さまでピット状に掘り窪めている。雨天時の場合、煙道より雨水等が流れ込まない工夫であろうか。尚、カマド内の灰層中には、多量の骨片

が含まれていた。現在種類等について分析中である。カマド本体及び煙道の埋没状況は、以下のとおりである。Ⅰ層：暗褐色土（黒色土が小ブロックで混る）。Ⅱ層：黒色土（炭化物を多量に含む）。Ⅲ層：黄褐色粘質土（炭化物を若干含む）。Ⅳ層：灰褐色土（いわゆる灰層であり、焼土粒、炭粒、骨片を多量に含んでいる）。Ⅴ層：焼土（赤褐色で、地山のロームが焼けている、表面にのみ炭粒、骨片等を若干含んでいる）。

第1号竪穴住居跡出土の遺物

本竪穴住居跡内からは、多くの土器片及び2点の鉄器が出土している。いずれも床面からではなく、床面より数センチメートル浮いた状態で出土したが、本住居跡に伴ったものと考えてさしつかえない資料である。

土器

第47図1～11は、甕型土器の破片で、1は口縁部である。口縁は大きく外へくびれて、口唇が上向きに直立する。長い頸に横走綾杉文が数段連結してめぐり、これを縦位の沈線にて区画し、縦走綾杉文が数段連結して施文される。内面は入念に研磨され、内黒となっている。2・3は、頸部で、横走綾杉文(2)、沈線文(3)が施文されている。4～9は、胴部で、いずれも器面上に刷毛目がみられる。10・11は、甕型土器の底部で、いずれも底面が若干張り出している。10の底面には、笹の葉の圧痕がみられる。第47図12～15は、坏型土器の破片である。12は口縁で、口唇付近は薄く、削ぐように整形され、鋭角的な三角形の断面となっている。内面は、横位主体の入念なへら磨きが施され、内黒となっている。13は、体部片。14・15は、器面に明らかなロクロの水引き痕が残り、底面には糸切痕がみられる土師器の坏である。胎土には細かな砂粒を含み、色調も明るい茶褐色と、埴土土器に比し堅くちみつな感がある。これらの土器群を概観すれば、糸切痕のある土師器の存在、甕型土器の文様にある横走綾杉文とこれを沈線にて区画し、縦走綾杉文を複合施文する文様構成より、宇田川編年によれば掇文時代後期中葉の年代観が考えられよう。

鉄器

住居跡の北西コーナー部分、床面より若干浮いた状態で、錆で固まった一塊の鉄片を検出した。錆を削りおとすと、5 cm×2 cmの刀子状の鉄片と、7 cm×3 cm、背の部分のV字状に割れた、鋸先と考えられる鉄片が2個錆で接着したものと解された。錆の進行が奥深くまで入っており、保存状態は非常に悪く、現在保存のための作業を実施中である。

(2) 第1号ピット

竪穴住居跡の東側2 m程の所にて検出したもので、耕作土である黒色土を除去した段階でその存在が確認された。長径1.3m、短径0.95m、深さ15 cmの楕円形プランを呈する。長軸の方向は、ほぼ東一西である。壁は、底面に向け徐々に傾斜し、底面は中央部が若干窪み丸味を帯びている。底面には、遺物は一切みられなかったが、覆土中より石鏃が1点出土している。本ピットの埋没状況は、以下のとおりである。Ⅰ層：硬くしまった黒褐色土。Ⅱ層：暗褐色土（黄褐色土粒が点々と混る）。

第1号ピット出土の遺物

石器

長さ3.8 cm、最大幅1.5 cm、厚さ4.5 mmの黒曜石製石鏃である。入念な両面加工が施されており、尖頭部の一部を欠損している。

第4節 発掘区出土の遺物

発掘調査対象地全域にわたり、多量の土器、石器、石片等が得られた。いずれも、層的に出土したのではなく、土器は、発掘対象地を中央で分断するように北東方向に向けあった沢地の埋土、堅穴住居跡の周辺よりも多く出土した。

土器

A 縄文時代中期の土器（第49図1～8）

いずれも小片で、比較的厚手である。円筒形に近い深鉢型を呈するものである。1は、口縁部で口唇の断面形は丸く、口唇直下に太い貼付紐がある。2・3は、一段の半截竹管状工具による横走沈線文がめぐる。4～8は、胴部片でいずれも単節の斜行縄文が地文として施文されている。これらの土器群は、縄文時代中期末葉の「平岸天神山」出土の土器群に共通するものと考えられる。

B 続縄文時代の土器（第49図9～20）

いずれも口縁部で、若干外側に外反、口唇真下に縦位の長い刻み目が連続してめぐらされる。さらに内面より外へ突いた刺突文（突瘤文）がある。13～19は胴部片、20は、底部で底面が若干揚るいわゆる揚底となっている。これらの土器群は、続縄文時代中期いわゆる恵山式土器の終末期に属する土器群に相当する。

C 擦文時代の土器（第49図21～38、第50図39～55）

最も多量に得られた土器群であり、唯一検出した堅穴住居跡の周辺から主に得られたものである。21～46は、甕型土器の破片である。口縁は、大きく外反し口唇近くにて直立に近く立つ、頸は比較的長く直立に近く立ち、胴以下は丸味を帯びつつ序々にすぼまり底部へと至っている。21・29・30は、横走沈線文帯がめぐる。24～27は、比較的小型の土器で、口縁の外反は少く、器形的には深鉢に近くなるものがある。43～46は、底部で、いずれも底面が若干外へ張り出す特徴を有している。47・50～55は、坏である。47は口縁で体部中段に2条の横走沈線文がめぐる。口唇付近は薄く削られ、口唇の断面形は丸味を帯び、器面全体に横位主体の刷毛目がみられ、沈線より上部は入念にへら磨きが施されている。内面も入念に磨かれ、内黒となっている。48・49は、やや外反気味の口縁で、器形は小型の浅鉢であろうか。これらの土器群は、堅穴住居跡内より出土した土器群とほぼ同様の文様構成、器形であり、堅穴住居跡の年代とほぼ一致する資料と考えられる。

土製品及び石器

土器と同様に、発掘調査対象地全域より出土したもので、層的な出土結果は不明である。

紡錘車（第50図）

擦文時代の土製紡錘車で、全体形の約半分が欠失し、裏面が剥落している。直径6 cm、高さ2 cm強の円盤状を呈し、裏面が表面より径が大きく、断面形は台形を呈する。表面は周囲が若干高まり中央に向け窪む、中心には径8 mm程の軸穴がある。重量は現存で40 gで、復元時の推定では80 g～100 g程あると考えられる。色調は、明るい褐色を呈し、胎土、焼成とも本遺跡出土の擦文土器に似る。

石器

いずれの資料も、縄文時代中期及び続縄文時代の土器群に伴出したと考えられる。以下器種ごとに、説明して行く。

石鏃（第50図1・2）

1は、二等辺三角形の刃部で、長い頸部を作出している。2は刃部のみで他を欠損した資料であ

る。いずれも入念な両面加工が施されている、黒曜石製。

石槍；ナイフ（第50図3・4）

3は、入念な両面加工が施され、木の葉状をなす。4は、石槍もしくは両面加工の施されるナイフ状石器の柄部と思われるもので厚く、舌状を呈する。2点とも黒曜石製である。

削器（第50図5～10）

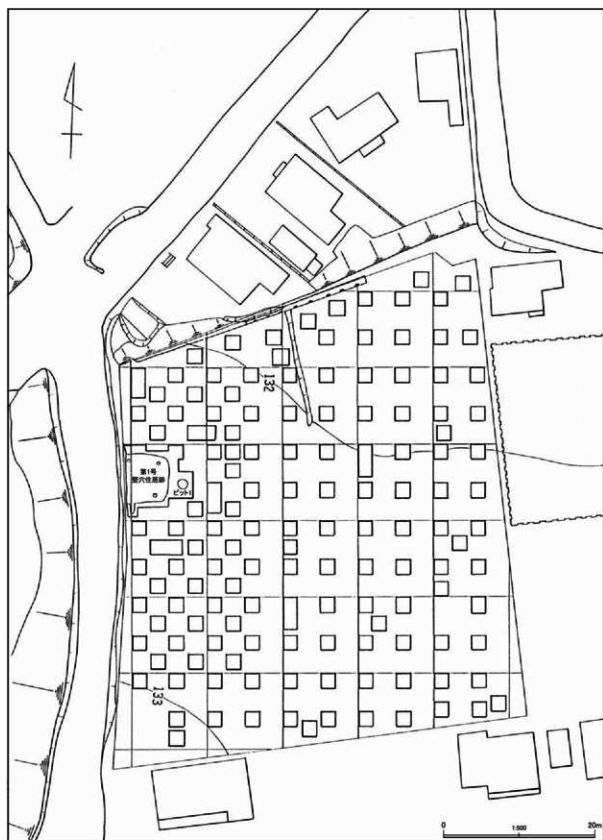
縦長剥片・幅広剥片を素材とし、剥片の側縁部に剥離加工を施し刃部としている。6・9は黒曜石、他は頁岩である。

石核（第50図11・12）

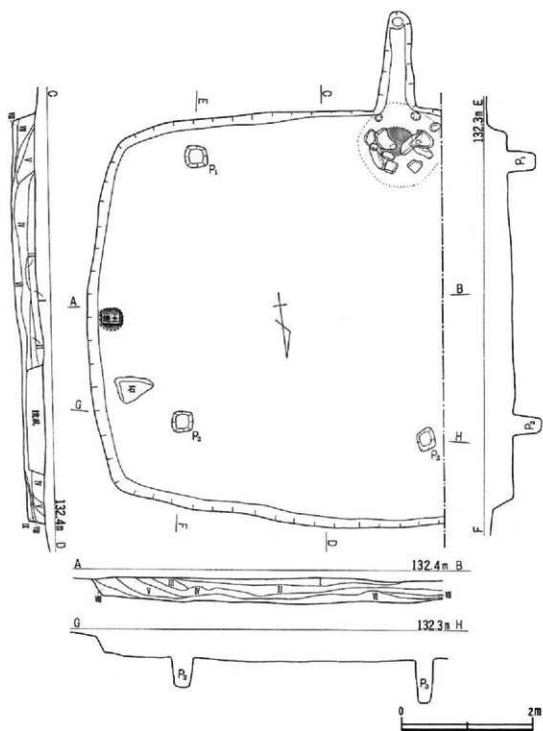
連続的に石器の素材とする各種の剥片を生産した母岩で、11は黒曜石を主に作出したものである。12は、部厚い剥片の側縁に表裏より大きな剥離加工を交互に加え、断面がくさび状となる刃部を作り出している、礫核削器と称するものの類である。

石斧（第50図13）

緑色片岩を素材とし、短冊状に敲打整形し入念に研磨加工している。刃部の一部を残し、大きく破損している。



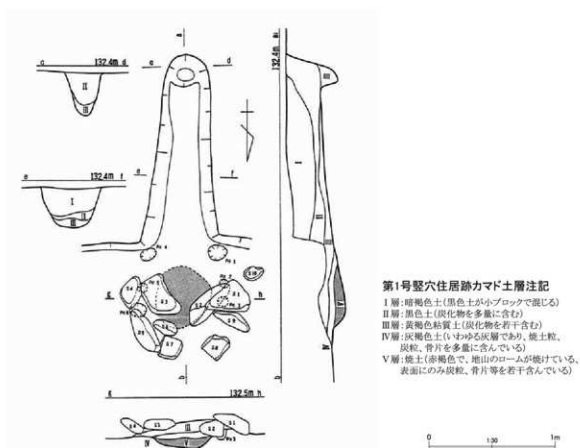
第44図 M353遺跡調査区周辺現況及び遺構配置



第1号竪穴住居跡土層注記

- | | |
|---------------------|--------------------------------|
| I層: 耕作土(黒色土+若干の火山灰) | VI層: 黄褐色粘質土(焼土粒、炭粒、黒色土粒を多量に含む) |
| II層: 黒色土(火山灰を多量に含む) | VII層: 暗黄褐色土(炭粒、焼土粒を含む、粘性に富む) |
| III層: 乳白色火山灰 | VIII層: 黒褐色土 |
| IV層: 黒褐色土(土粒が粗い) | IX層: 黄褐色土 |
| V層: 暗褐色土(若干粘性がある) | |

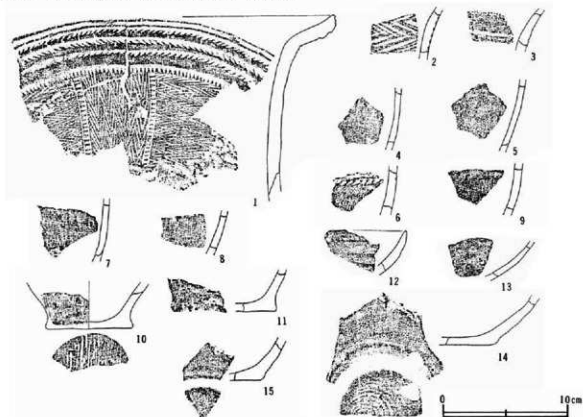
第45図 M353遺跡第1号竪穴住居跡実測図



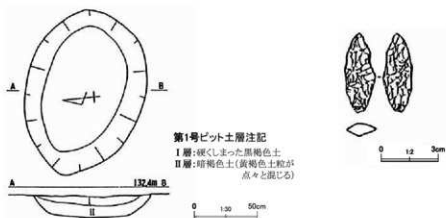
第1号竪穴住居跡カマド土層注記

- I 層: 暗褐色土(黒色土が小ブロックで混じる)
- II 層: 黒色土(炭化物を多量に含む)
- III 層: 黄褐色粘質土(炭化物を若干含む)
- IV 層: 灰褐色土(いわゆる灰層であり、焼土粒、炭粒、骨片を多量に含んでいる)
- V 層: 焼土(赤褐色で、地山のロームが焼けている。表面にのみ炭粒、骨片等を若干含んでいる)

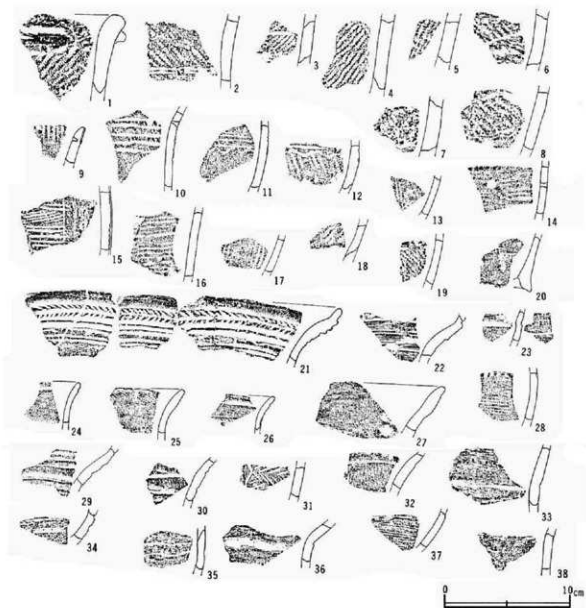
第46図 M353遺跡第1号竪穴住居跡カマド実測図



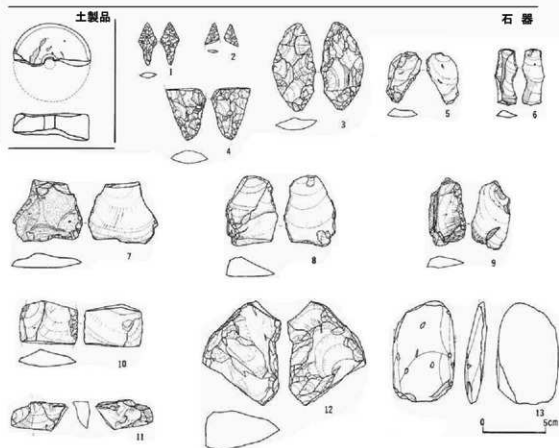
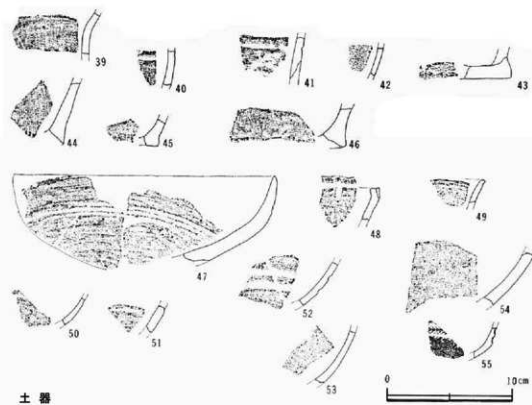
第47図 M353遺跡第1号竪穴住居跡出土の土器



第48図 M353遺跡第1号ピット実測図及び出土遺物



第49図 M353遺跡発掘区出土の土器



第50図 M353遺跡発掘区出土の土器・土製品・石器

図版10 M353遺跡調査状況及び出土遺物



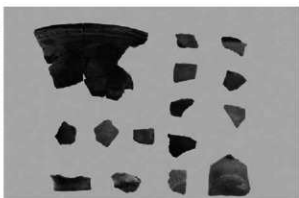
A 遺跡全景



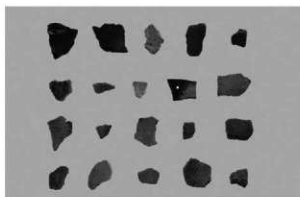
B 第1号竪穴住居跡



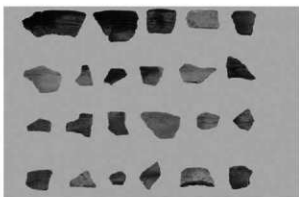
C 第1号竪穴住居跡カマド



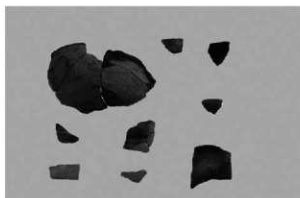
D 第1号竪穴住居跡出土土器



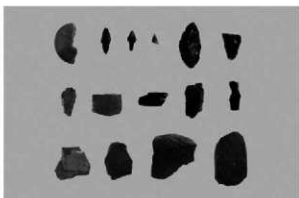
E 発掘区出土土器



F 発掘区出土土器 (擦文・甕)



G 発掘区出土土器 (擦文・坏)



H 発掘区出土土製品 (紡錘車)・石器

第8章 T472遺跡調査報告

第1節 業務概要

- (1) 遺跡の所在地 札幌市豊平区里塚431-2他
- (2) 確認調査対象面積 約5,000㎡
- (3) 調査の目的 平岡公園造成に伴う事前調査
- (4) 業務委託者 札幌市環境局緑化推進部造園課
- (5) 業務受託者 札幌市教育委員会社会教育部文化課
- (6) 調査担当 同上
- (7) 受託業務期間 自：昭和63年5月30日 至：平成元年3月31日
- (8) 確認調査実施工程
 - ア 現場作業 自：昭和63年5月30日
至：昭和63年6月11日
 - イ 整理作業 自：昭和63年6月11日
至：平成元年3月31日

第2節 発掘調査の概要

(1) 遺跡の概要

本遺跡は、札幌市豊平区里塚431-2に位置する。遺跡地を含む周囲一帯は荒蕪地であり、かつては畑として耕作されている。また火山灰の採取が大規模に行われており、今回の調査対象地の北西側は大きく削りとられている。遺跡の存在する台地の標高は50m内外である。高、昭和58年度に実施した埋蔵文化財分布調査において、本地点から若干の土器等が発見されたことから、T472遺跡として札幌市埋蔵文化財包蔵地台帳に登録されたものである。

(2) 調査の方法

昭和58年度に実施した分布調査時に遺物を検出した部分を中心として、約10,000㎡にわたり最小単位が10×10mの発掘区を設定、調査対象地区全体を覆った。各交点を2×2m、約4㎡の範囲を発掘調査することとした。さらに10×10m中心にも2×2m、約4㎡の範囲を発掘調査した。結果、2×2m、4㎡の調査坑を総計227個、面積で約908㎡を発掘調査したことになる。

(3) 出土遺物 (第53・54図)

縄文時代中期(約4,000年前)に属する土器片20点余と石器2点、黒曜石剥片を若干検出した。

土器

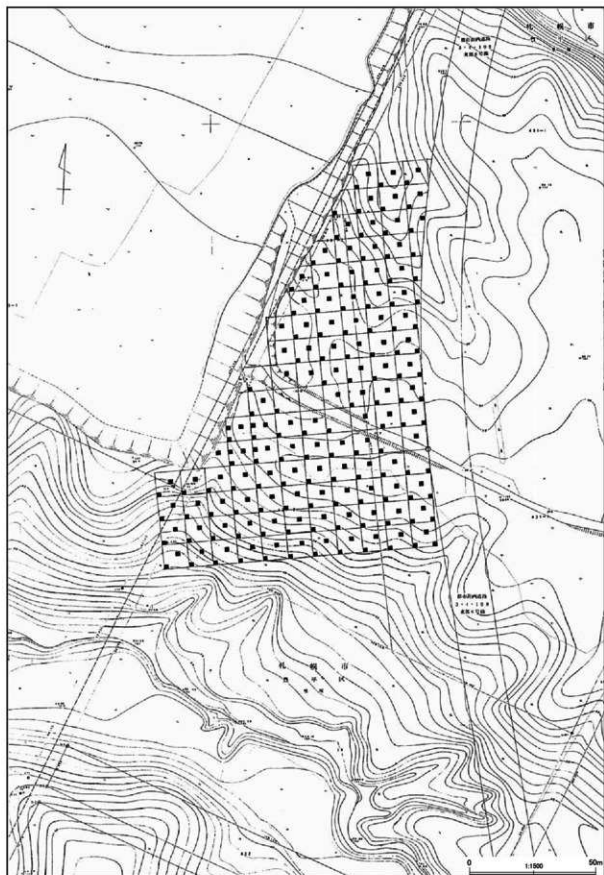
7～9は、口縁部で、8には縄線文が、9は沈線文がそれぞれ横位にめぐらされている。1～5・10～17はいずれも胴部の破片であり、地文の縄文が施されている。RL斜縄文(1・3・5・10・12～15)、LR斜縄文(4・11・16・17)が用いられている。6は、底部の破片である。



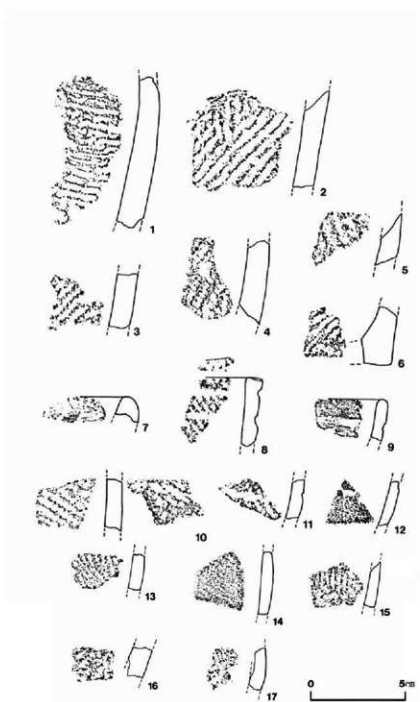
第51図 T472遺跡調査位置 (S=1/25000)

石器

2点検出している、1は比較的厚手の黒曜石剥片を素材とし、周囲に細かい剥離を施し刃部としている。いわゆる搔器である。2は縦長剥片を素材とし、一側縁部に細かな剥離加工を施したもので、いわゆる削器である、下部を欠損している。2点とも、黒曜石を素材としている。



第52図 T472遺跡調査区周辺現況



第53図 T472遺跡発掘区出土の土器



第54図 T472遺跡発掘区出土の石器

図版11 T472遺跡調査状況及び出土遺物



A 発掘調査状況 (1)



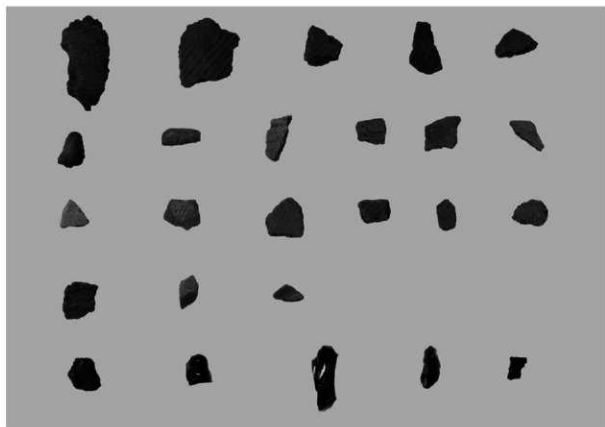
B 発掘調査状況 (2)



C 発掘調査状況 (3)



D 発掘調査状況 (4)



E 発掘区出土遺物 (縄文土器・石器・黒曜石片)

第9章 T362遺跡、T485遺跡調査報告

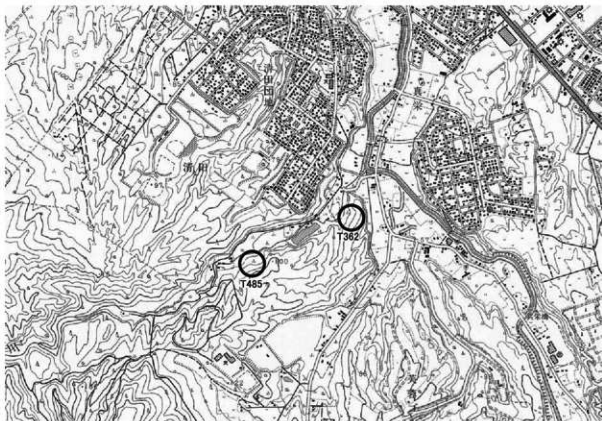
第1節 業務概要

- (1) 遺跡の所在地 札幌市豊平区真栄328他
- (2) 開発予定面積 約43.8ha
- (3) 確認調査対象面積 約141,900㎡
- (4) 調査の目的 第3エレクトロニクスセンター造成に伴う事前調査
- (5) 業務委託者 札幌市企画調整局開発部団地課
- (6) 業務受託者 札幌市教育委員会社会教育部文化課
- (7) 調査担当 同上
- (8) 受託業務期間 自：昭和63年7月11日 至：平成元年3月31日
- (9) 確認調査実施工程
 - ア 現場作業 自：昭和63年7月11日
至：昭和63年8月6日
 - イ 整理作業 自：昭和63年8月8日
至：平成元年3月31日

第2節 発掘調査の概要

発掘調査対象地域は、豊平区真栄に所在し山部川、真栄川にはさまれた、狭い尾根が幾重にも連なる山林地である。開発区域が43.8haと広大であり、5月に実施した分布調査、試掘調査の結果から、黒色土の残る尾根上、平坦面に限定して発掘調査を実地した。発掘調査は、以下のA～E地区に分け実施した。

A地区：T362遺跡が記載されている地区一帯で標高70～80mの等高線で囲まれる約25,400㎡を対象としている。B地区：標高90mの等高線により囲まれる約15,000㎡の区域を発掘調査対象とした。C地区：標高95mの等高線で囲まれる区域で、約38,000㎡を発掘調査対象とした。D地区：最も平坦面の多い区域であり、標高85mの等高線で囲まれる約39,000㎡が発掘調査対象である。E地区：D地区の続きの部分であり、民有地によって分断され、約2,500㎡の範囲を調査対象とした。E地区：開発区域の最西部にあり、標高75mの等高線より徐々に下がる緩やかな斜面であり、山部川に面した約22,000㎡が調査対象区である。発掘調査の対象区全体を最小が10×10m単位の区画割を行い、各交点に1×1m(1㎡)の発掘を実施する方法をとっている。しかし密集した樹林、笹等より正確な区画割は行っておらず、また、立木、根等の存在からずれて発掘している部分もおおくある。調査対象総面積141,900㎡に対して、約1%強の約1,500㎡を発掘調査したことになる。結果、A地区・E地区の2地区において若干の遺物を採集したにとどまった。A地区は、当初T362遺跡が埋蔵文化財包蔵地台帳に記載されていたが今回の調査結果では、遺物包含層はほとんど残っていないこと、E地区では、山部川に沿った段丘上に新規に遺跡が発見されたことになる(T485遺跡)が、調査の結果では遺跡の主体部は開発対象区域外の民有地にあることが判断されたため、遺物の発見された両



第55図 T362遺跡、T485遺跡調査位置 (S=1/25000)

地点とも本発掘調査は必要無いものと結論された。

第3節 出土遺物

T362遺跡 (第57図1～7)

縄文時代中期 (4,000年前)、後期 (3,500年前) の土器片、黒曜石剥片を検出した。

縄文時代中期の土器 (1～4・6・7)

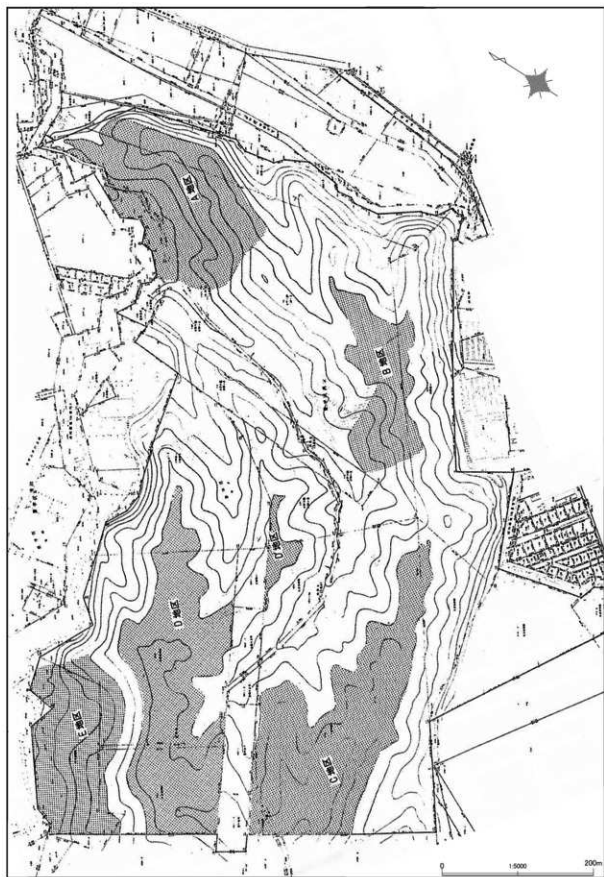
1は爪型文がめぐらされており、4・6は厚手で地文の縄文のみが施文されている。7は底部で底面にも縄文がみられる。

縄文時代後期の土器 (5)

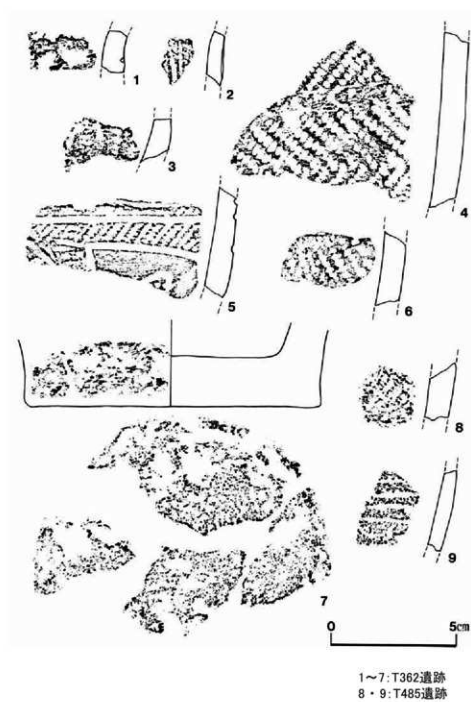
すり消し縄文が特徴となる、沈線文によって区画した内側の縄文を丁寧にすり消している。

T485遺跡 (第57図8・9)

2点の土器と、黒曜石剥片若干を検出した。8の土器は、比較的厚手で縄文が地文として施文されている。縄文時代中期に属する深鉢型土器の胴部である。9は、貝殻の腹縁部を横位に数段連続して押し付けた文様、貝殻腹縁文土器である。縄文時代早期 (約7,000年前) に属するものと考えられる。



第56図 T362遺跡、T485遺跡調査区周辺現況



第57図 T362遺跡、T485遺跡発掘区出土の土器

図版12 T362遺跡、T485遺跡調査状況及び出土遺物



A 発掘調査状況 (1)



B 発掘調査状況 (2)



C 発掘調査状況 (3)



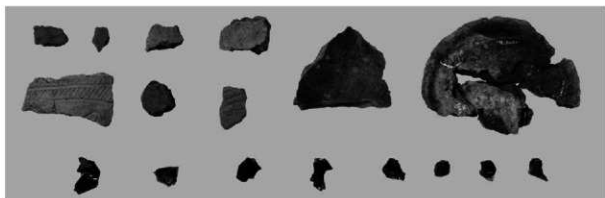
D 発掘調査状況 (4)



E 発掘調査状況 (5)



F 発掘調査状況 (6)



G 出土遺物 (縄文土器・黒曜石片)

第10章 M484遺跡調査報告

第1節 業務概要

- (1) 遺跡の所在地 札幌市南区常盤60-1ほか
- (2) 確認調査対象面積 約3,500㎡
- (3) 調査の目的 仮称市立高等専門学校（デザイン系）建設に伴う事前調査
- (4) 業務委託者 札幌市企画調整局大学設置準備室
- (5) 業務受託者 札幌市市民局生活文化部文化財課
- (6) 調査担当 同上
- (7) 受託業務期間 自：平成元年4月10日 至：平成2年3月31日
- (8) 確認調査実施工程
 - ア 現場作業
 - 自：平成元年4月10日
 - 至：平成元年5月17日
 - イ 整理作業
 - 自：平成元年5月18日
 - 至：平成2年3月31日

第2節 発掘調査の概要

(1) 遺跡

本遺跡は、札幌市南区常盤60-1に所在する。真駒内川左岸上にあり、標高は170mほどの比較的平な畑地上に立地している。開拓以来の耕作により、基盤のローム層まで攪乱を受けており、遺物もほとんどが耕作による攪乱層に含まれたものであった。尚、本遺跡の発見は昭和63年度に実施した埋蔵文化財包蔵地の所在確認調査及び試掘調査の結果確認したものであり、札幌市埋蔵文化財包蔵地台帳に登録されたものである。

(2) 発掘調査の方法

昭和63年度に実施した試掘調査の結果、遺物が最も多く検出された部分約3,500㎡の範囲を発掘調査対象面積とした。発掘調査対象地には、市道の境界線を基本とした最少単位が10×10mの方眼をかけ発掘区を設定した。実際の発掘調査に当たっては、各発掘区の南東部と南西部に1m幅を地層観察用及び排土搬出用として畦状に残し内9×9m(81㎡)を発掘調査した。結果、作物の移転が終わっていない地区などがあり、最終的には発掘調査終了面積は3,050㎡であった。

(3) 出土遺物

縄文時代晩期(約2,500年前)に属する土器数点と石器24点、黒曜石、頁岩等の剥片多数を検出した。



第58図 M484遺跡調査位置 (S=1/25000)

土器 (第60図)

1は、口縁部で平行沈線文が数段めぐり、口唇部は鋭角的に尖る。2・3は縄文のある、胴部片で2は鉢形土器、3は深鉢形土器である。4～6は、無文土器の胴部片で、器面に調整痕がみられる。いずれも胎土中に砂粒を多く含み、焼成は良好である。色調は茶褐色(1・3・4)、灰褐色(2・5・6)を呈する。

石器 (第61図)

総計24点の石器と、黒曜石剥片、頁岩片多数を検出した。

石鏃 (1～5)

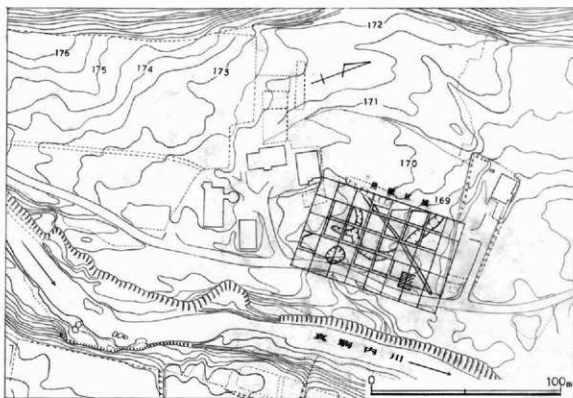
1～4は有茎で、両面に入念な加工が施されている。幅広剥片を素材としている。5は無茎鏃で底辺は湾曲している。先端部は欠失しており入念な両面加工が施される。全例黒曜石製である。

石槍 (6)

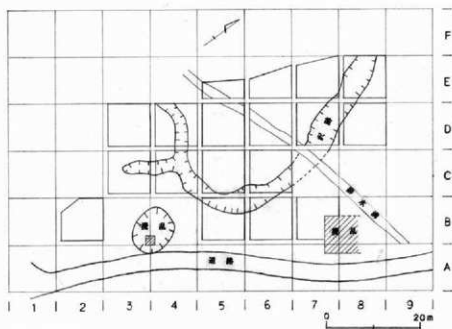
細長く比較的厚みのある両面加工の施された石器で尖頭部を欠失している。基部には素材面が残る、頁岩製である。

削器 (7～24)

剥片の側縁部に加工痕、使用痕のあるもので、定形化していない。縦長剥片を素材としたもの、幅広剥片を素材としたものの二種の形態がある。24のみ頁岩製で他は全て黒曜石である。

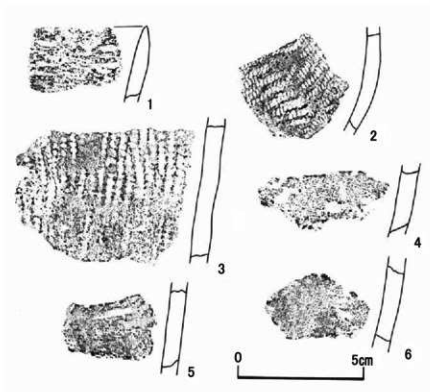


調査区周辺現況

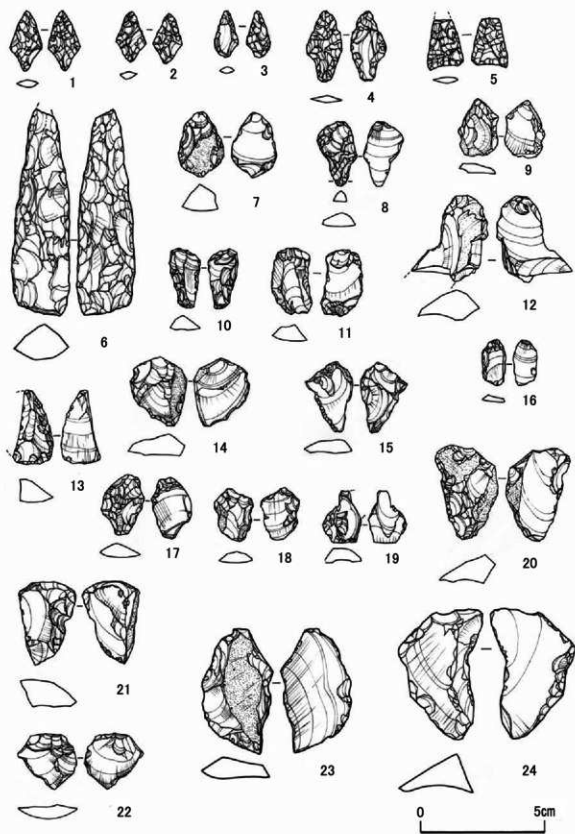


調査区配置

第59図 M484遺跡調査区周辺現況及び調査区配置



第60図 M484遺跡発掘区出土の土器



第61図 M484遺跡発掘区出土の石器

図版13 M484遺跡調査状況及び出土遺物



A 遺跡全景 (1)



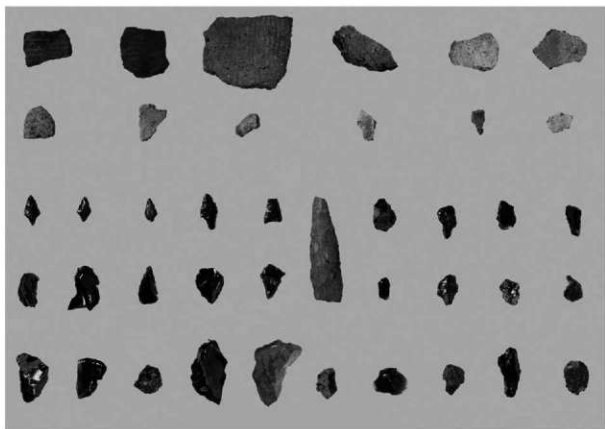
B 遺跡全景 (2)



C 発掘風景 (1)



D 発掘風景 (2)



E 発掘区出土遺物

第11章 S14遺跡調査報告

第1節 業務概要

- (1) 遺跡の所在地 札幌市白石区栄通14丁目803-11ほか
- (2) 確認調査対象面積 約500㎡
- (3) 調査の目的 共同住宅建設に伴う事前調査
- (4) 業務委託者 野村不動産株式会社 札幌支店
- (5) 業務受託者 札幌市
- (6) 発掘調査主体者 札幌市教育委員会 教育長
- (7) 発掘調査担当者 札幌市市民局生活文化部文化財課
- (8) 受託業務期間 自：平成元年7月10日 至：平成2年3月31日
- (9) 確認調査実施工程
 - ア 現場作業 自：平成元年7月10日
至：平成元年7月29日
 - イ 整理作業 自：平成元年7月31日
至：平成2年3月31日

第2節 発掘調査の概要

(1) 遺跡

本遺跡は、札幌市白石区栄通14丁目803-11ほかに所在する。今回の発掘対象地区は、道々西野-白石線沿いの月寒川に面する南向き緩斜面にあり、標高は30mある。本遺跡を含む月寒川流域には多くの遺跡の存在が知られており、札幌市内でも有数の遺跡密集地帯となっている。本遺跡は、道々西野-白石線を含む北西一帯に広がりをもつと考えられるが、この部分についてはすでに宅地化されその存在を確認することはできない状況になっている。尚、本遺跡の存在は、昭和48年度に全市的に実施した埋蔵文化財包蔵地の所在確認調査（分布調査）によって発見され、札幌市埋蔵文化財包蔵地台帳に登録されたものである。

(2) 発掘調査の方法

試掘調査の結果遺物が多く検出され、遺物包含層が残っている、道々西野-白石線沿いの幅10m、長さ50mの範囲を今回の確認調査対象地区とした。発掘区の設定は、道々西野-白石線の道路敷のラインを基線とし、これを10mごとに区切り、最小単位が10×10mのメッシュで調査対象地全体をおおい発掘区とした。調査対象地区は、かつては畑として耕作されており現在は荒地となり部分的に各種工事の排土等が盛られていた。結果、最終的には約450㎡を人力にて発掘したことになる。遺物は、耕作土中と耕作土（黒色土）直下のローム層上面に検出している。ほとんどが耕作土による攪乱のため層位的な確認は得られていない。

(3) 遺構 (第64図)

E発掘区にて、陥し穴(Tピット)を1個検出した。開口部は直径1.3m、短径0.8m、深さ0.7mの楕円形を呈するピットである。長軸方向は、ほぼ南―北で斜面の傾きとはほぼ一致した方向をとる。北側の壁は途中に段が付く。本ピットの埋没状況は、以下のとおりである。第1層：真黒色土、第2層：暗茶褐色土、第3層：黄褐色土のブロック、第4層：暗褐色土、第5層：黄褐色土、第6層：暗褐色土、第7層：褐色粘質土、第8層：黒褐色土、第9層：黄褐色土、第10層：粘質を帯びた黒色土、第11層：淡黄色粘質土、第12層：粘質に富む黒色土。

(4) 遺物

発掘対象面積が500㎡とせまいにもかかわらず、縄文時代早期～中期、晩期の遺物が多く検出された。土器は、縄文時代早期に属する貝殻文・沈線文平底土器が最も多く、石器もこれに伴うものが主体をなす。

縄文時代早期の土器 (第65図1～22、第66図23～44、第67図45～60)

第I群土器 (1～51)

貝殻腹縁文、同条痕文、沈線文、列点文が単独にあるいは数種が複合して施文された土器、無文土器である。いずれも底部形状は、平底である。

A (1・3～17)：貝殻腹縁圧痕文が横位に多数めぐられるものに、横位に数段めぐる沈線文が組み合わされるものである。中には山形を呈する口縁の頂部より垂下するよう一段列点文を配する例もある。口唇の断面形は鋭角的となる、口唇直下に連続した刻み目を施す(3)。口唇の断面形は丸みを帯びる、ゆるやかな波状口縁となり突起頂部より垂下するように列点文が付けられる(4・7)。貝殻腹縁文・沈線文を使用して器面に大きな三角形・菱形を構成する(8・11～13)等がある。3は、器面内に横位の貝殻条痕文がみられる。胎土中には、白色火山灰粒と若干の砂粒を含む。色調は茶褐色・暗茶褐色を呈する。

B (18～39・41)：口縁から胴中段に至る部位に、横走沈線文を数段めぐらしたものである。21～24・26は、やや丸みをもつ口唇で、ほぼ平縁となる。口唇直下より胴中段にかけての部位には20本程度の横走沈線がめぐられる。27～32も同種の土器である。25・34は器面内に貝殻条痕文が施された例である。33・35・38は横位、斜位の沈線文が組み合わされたものである。胎土中には、白色火山灰・砂粒を比較的多く含み、器面はややザラついた感じがする。色調は、茶褐色を呈するものが多い。

C (40・42～47)：貝殻条痕文・無文土器である。40は、横位の貝殻条痕文のみ器面に施文されたもので、平縁・口唇部断面は丸みを帯びる。44は、波状縁で口唇直下に細かな刻み目がめぐる。器面には貝殻条痕文が施される。42・43・45は、無文で大きな波状口縁である。42・43には補修孔がある。46・47は、無文土器の胴部片。胎土には、白色火山灰・砂粒を若干含む。色調は明茶褐色を呈する。

底部(1・2・48～51)：1は、貝殻腹縁文・沈線文が横位に複合施文された土器底部で平底である。2・48～51は、条痕文あるいは無文の平底土器底部である。

第II群土器 (52～60)

燃糸文、羽状縄文の施文された土器群で、薄手である。縄文時代早期末葉の「東銅路Ⅲ式土器」に対比される。52は、平縁で口唇は丸みを帯びる。左下がりの燃糸文が地文として施文される。55も同種である。53・60は横位に燃糸文が数段めぐる。54・56～59は、細かい原体を用いた羽状縄文が地文として施文される例である。胎土には、いずれも少量の砂粒が混じる。色調は明茶褐色を呈する。

縄文時代中期の土器 (第67図61～66)

2 型式の土器が得られている。61・62は、口縁部に肥厚帯を有し、肥厚帯直下には大型の円形刺突文が数 cm 間隔にめぐらされるといった特徴がある。口唇上は平らに整形され、肥厚帯上には縄文を施文 (62)、さらにヘラ状工具による連続刺突文が2段めぐらされる (61)。62は、口縁内面にも縄文が施文される。これらの特徴は、「北筒式土器」に類似する。63は、幅広の貼付帯が胴を横環し、貼付帯上には縄文が施文される。「余市式土器」と考えられる。64～66は、中期に属する厚手の胴部片で器面上には斜行縄文が施される。66は、内面にも縄文が施されている。いずれも厚手で、61・62・66には少量の繊維を胎土に含み、色調は、暗茶褐色 (61・62・66)、明褐色 (63～65) を呈する。

縄文時代晩期の土器 (第67図67)

1点のみ検出した、平行する横走沈線文を特徴とする土器である。

石器 (第68・69図)

土器に比較して石器の数量は少ないが、ほとんど縄文時代早期の貝殻文・沈線文平底土器群に伴うものと考えられる。

両面加工ナイフ状石器 (1～5)

入念に両面加工の施されたもので柳葉形もしくは木の葉様を呈すると考えられるが全て破損品であり原形は不明である。1は、尖頭部片で、2～4は、柄部であり基底部は平らである。5は、やや幅広で基底部には素材面が残る、尖頭部を欠失している。全例黒曜石を素材としている。

つまみ付きナイフ (6)

片面加工の施されたもので、一端につまみ部を作出している。黒色の頁岩を素材としている。

削器 (7・8)

剥片の一個縁ないしは左右側縁に剥離加工を施し刃部を作り出したものである。いずれも黒曜石製である。

石錘 (9～11)

扁平な河原石の長軸方向の両端に打ち欠きを施したものである。重量は、9:40g、10:100g、11:190gである。9・11は、安山岩、10は砂岩を用いている。

石鐮 (12)

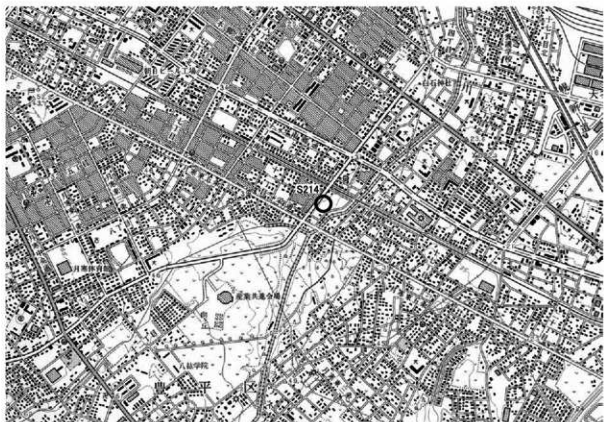
砂岩の扁平で薄い河原石であり、三角形を呈する。底辺部分が使用部分であり擦り切りの砥石として用いたものである。

砥石 (13)

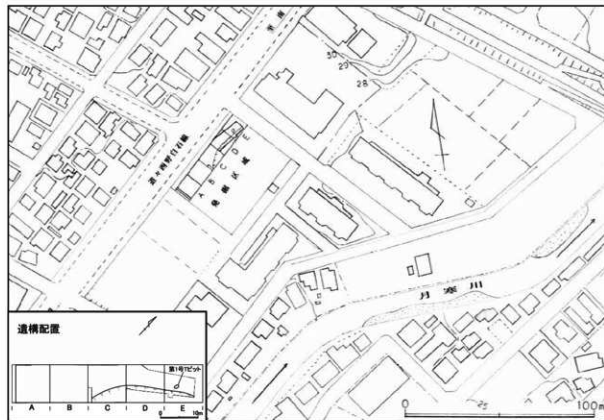
砂岩で断面が方形に近く、長方体となる。4面が砥石として使用され長軸方向に大きくコンケーブしている。

擦石 (14)

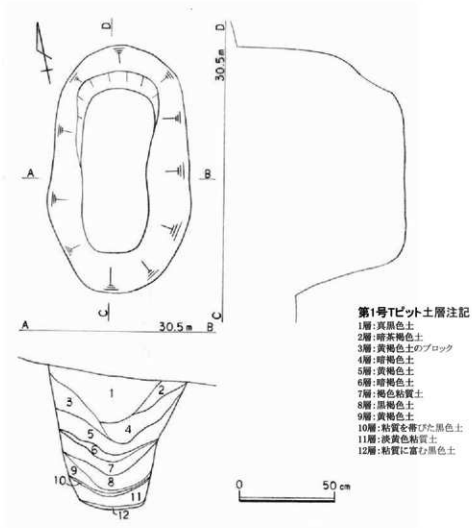
断面が三角形を呈する楕円形状の河原石 (安山岩) であり、一番狭い稜を擦面として使用している。



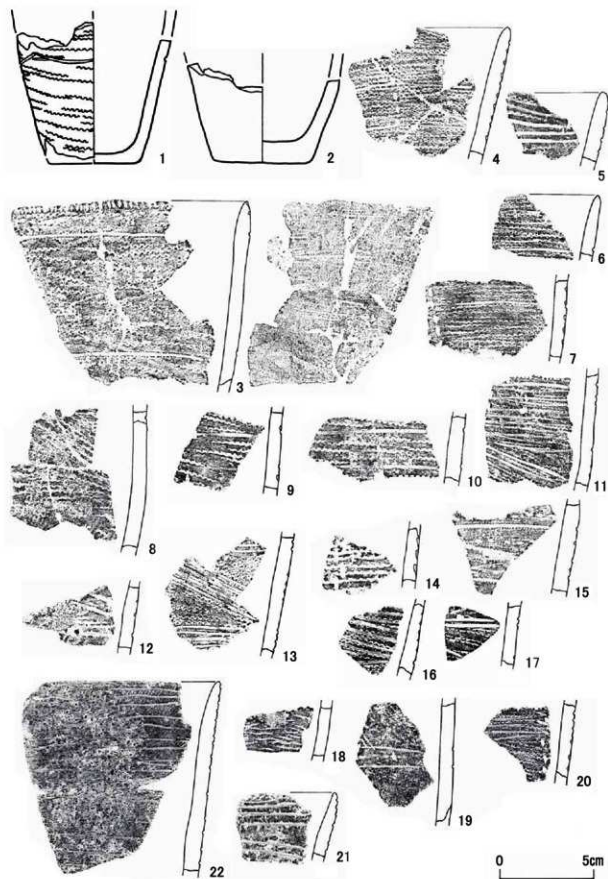
第62図 S214遺跡調査位置 (S=1/25000)



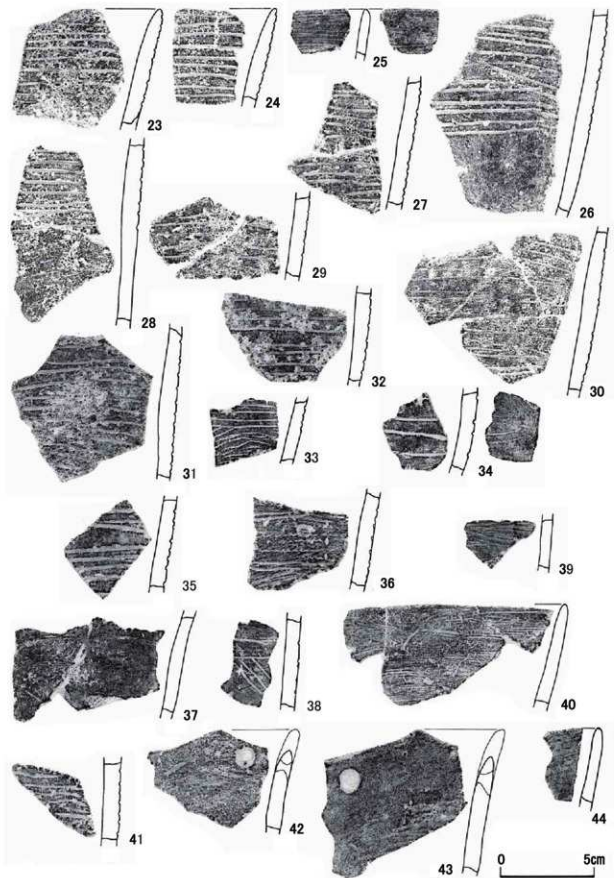
第63図 S214遺跡調査区周辺現況及び遺構配置



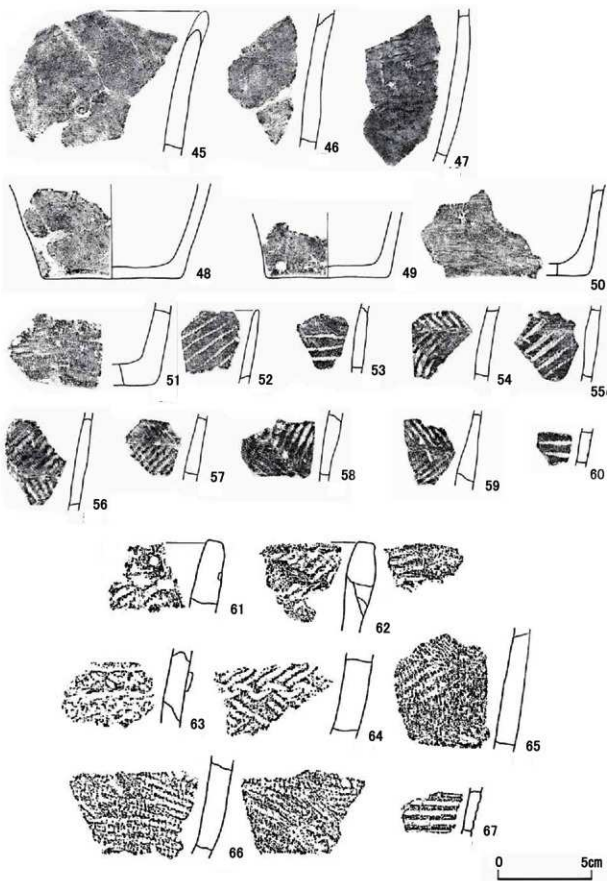
第64図 S214遺跡第1号Tビット実測図



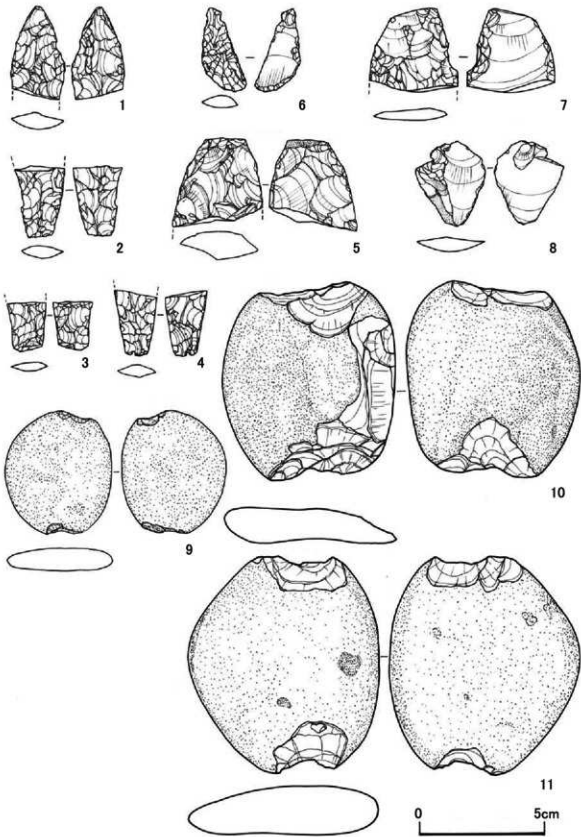
第65図 S214遺跡発掘区出土の土器(1)



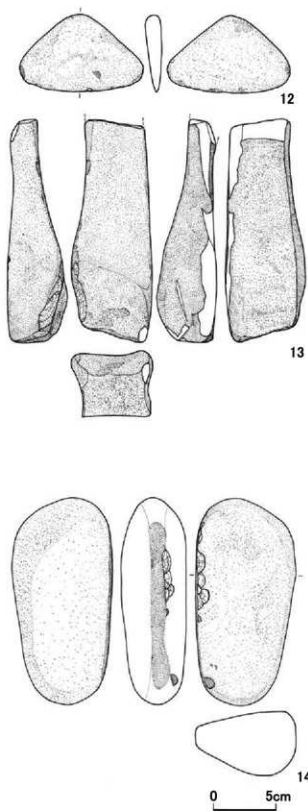
第66図 S214遺跡発掘区出土の土器(2)



第67図 S214遺跡発掘区出土の土器(3)



第68図 S214遺跡発掘区出土の石器(1)



第69図 S214遺跡発掘区出土の石器(2)

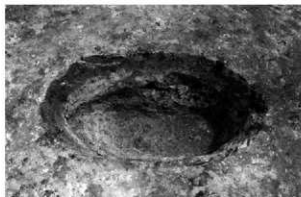
図版14 S214遺跡調査状況および出土遺物



A 遺跡全景 (1)



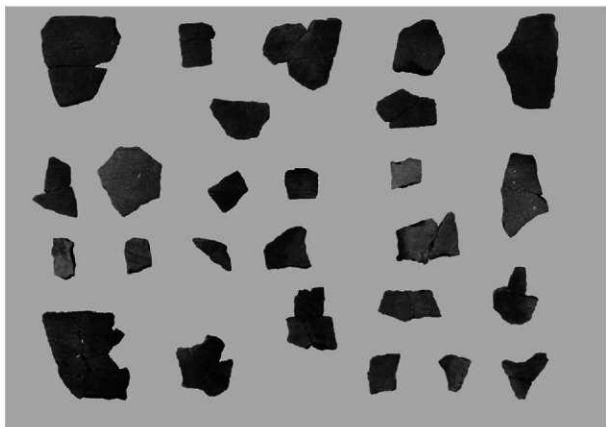
B 遺跡全景 (2)



C Tピット

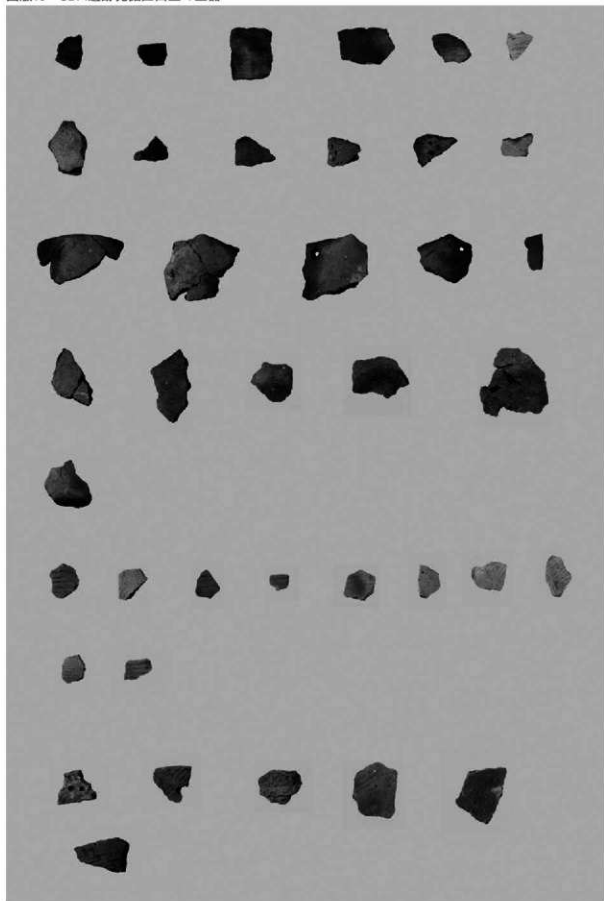


D 発掘風景

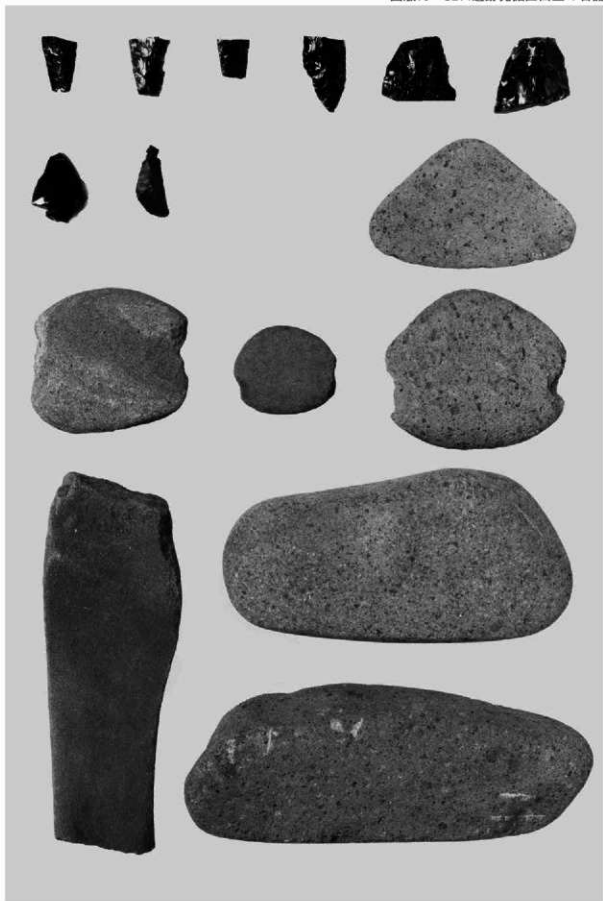


E 発掘区出土土器

図版15 S214遺跡発掘区出土の土器



図版16 S214遺跡発掘区出土の石器



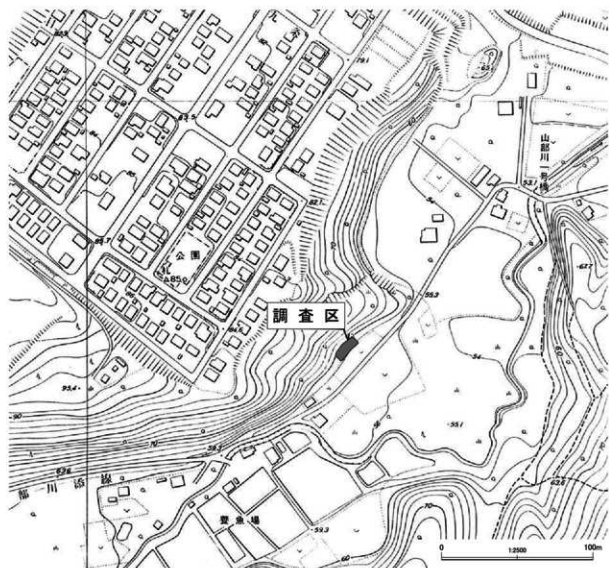
第12章 T486遺跡調査報告

第1節 業務概要

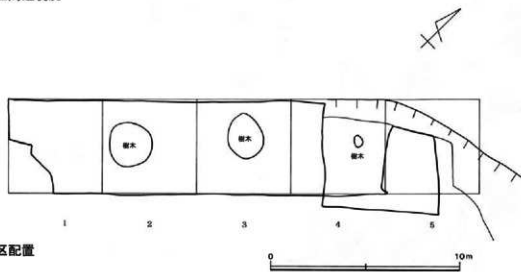
- (1) 遺跡の所在地 札幌市豊平区真栄374
- (2) 発掘調査対象面積 約100㎡
- (3) 調査の目的 宅地造成工事に伴う事前調査
- (4) 業務委託者 日特建設株式会社 札幌支店
- (5) 業務受託者 札幌市
- (6) 発掘調査主体者 札幌市教育委員会 教育長
- (7) 発掘調査担当者 札幌市市民局文化部文化財課
- (8) 受託業務期間 自：平成3年9月30日 至：平成4年3月31日
- (9) 発掘調査実施工程
 - A 現場作業 自：平成3年9月30日
至：平成3年10月8日
 - B 整理作業 自：平成3年10月9日
至：平成4年3月31日



第70図 T486遺跡調査位置 (S=1/25000)



調査区周辺現況



調査区配置

第71図 T486遺跡調査区周辺現況及び調査区配置

図版17 T486遺跡調査状況及び出土遺物



A 発掘状況 (1)



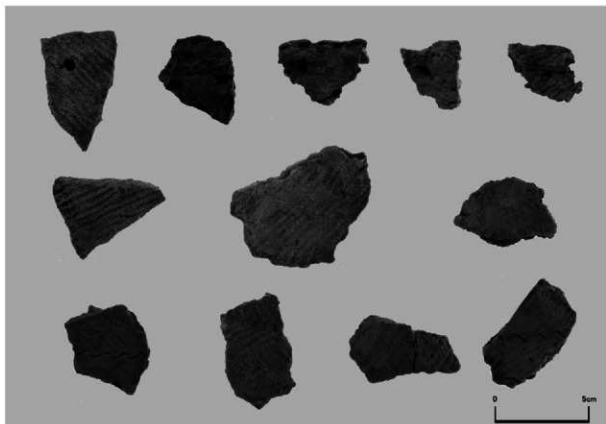
B 発掘状況 (2)



C 発掘状況 (3)

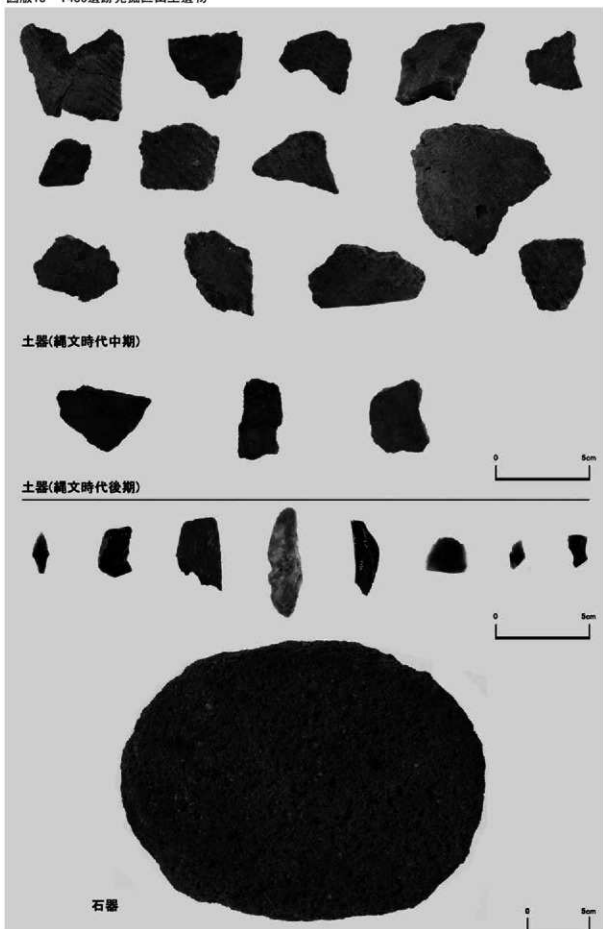


D 発掘状況 (4)



E 発掘区出土土器 (縄文時代中期)

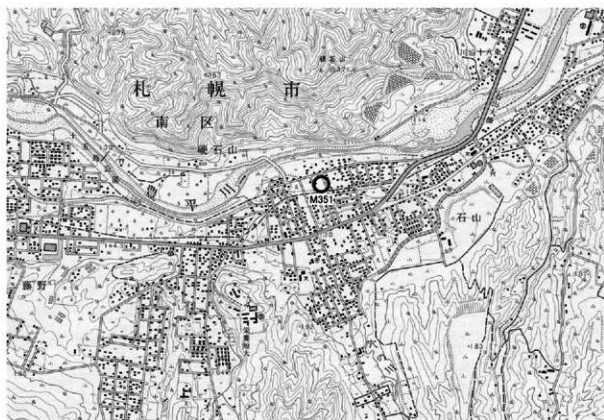
図版18 T486遺跡発掘区出土遺物



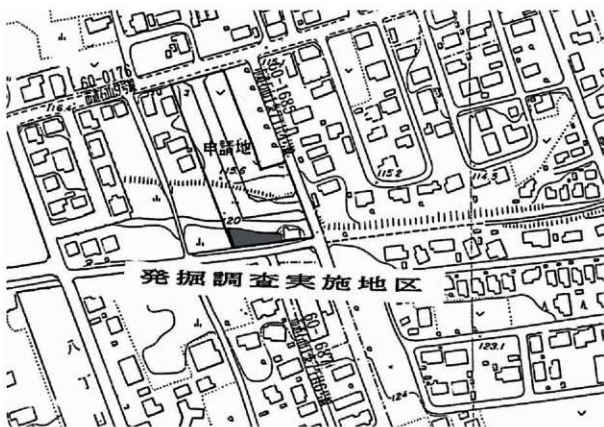
第13章 M351遺跡調査報告

第1節 業務概要

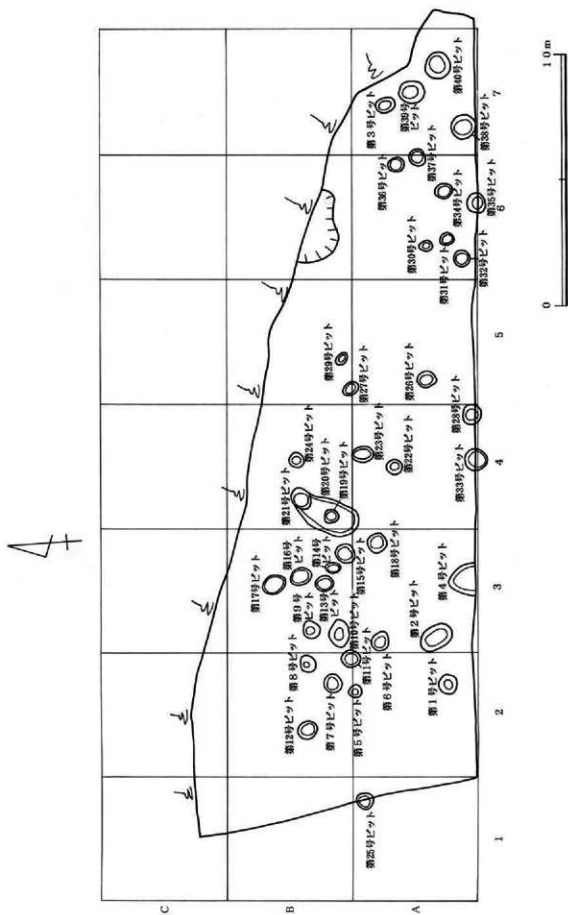
- (1) 遺跡所在地 札幌市南区石山1条7丁目408-1の内
- (2) 確認調査対象面積 約270㎡
- (3) 調査目的 宅地造成工事に伴う事前調査
- (4) 業務委託者 東栄土地株式会社
- (5) 業務受託者 札幌市
- (6) 調査主体者 札幌市教育委員会 教育長
- (7) 調査担当者 札幌市市民局文化部文化財課
- (8) 受託業務期間 自：平成3年9月2日 至：平成4年3月31日
- (9) 確認調査実施工程
 - A 現場作業 自：平成3年9月4日
至：平成3年9月21日
 - B 整理作業 自：平成3年9月24日
至：平成4年3月31日



第72図 M351遺跡調査位置 (S=1/25000)



第73図 M351遺跡調査区周辺現況



第74図 M351道路遺構配置

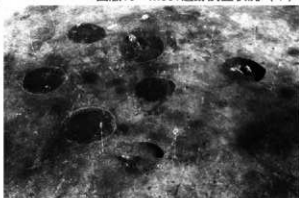
第2表 M351遺跡遺構属性表

遺構名	発掘区	規模 長径×短径 (cm)	高さ (cm)	平面形	長軸方向	出土遺物 (点数)				備考
						土器	石器	銅片	礎	
第1号ピット	A-2	79×74	25	円形		3	1	4		
第2号ピット	A-3	136×100	21	楕円形	北西-南東	1	1			
第3号ピット	A-7	72×65	17	円形		7		1		
第4号ピット	A-3	(124)×152	21	不整円形		15	1	11	1	
第5号ピット	A・B-2	65×60	15	円形		7			5	
第6号ピット	A-3	75×75	18	円形		7	1		4	
第7号ピット	B-2	82×77	12	円形				1		
第8号ピット	B-2	79×78	26	円形		10		1	1	
第9号ピット	B-3	80×79	23	不整円形		7			1	
第10号ピット	B-3	104×85	28	楕円形	西-東	28		7	3	
第11号ピット	A-2・3、B-2・3	71×68	17	不整円形		8		2		
第12号ピット	B-2	82×73	30	不整円形		12		2	2	
第13号ピット	B-3	72×64	16	円形		1		1	1	
第14号ピット	B-3	62×55	7	円形		1			1	
第15号ピット	A・B-3	80×74	18	円形		12		3		
第16号ピット	B-3	91×80	17	楕円形	北西-南東	1			3	
第17号ピット	B-3	97×85	31	楕円形	北西-南東	5	1	1	8	
第18号ピット	A-3	79×72	14	円形		21				
第19号ピット	B-4	70×59	15	楕円形	北東-南西			2	1	
第20号ピット	A-4、B-3・4	(210)×131	19	長楕円形	北東-南西	14		8		
第21号ピット	B-4	92×78.5	25	楕円形	北東-南西					
第22号ピット	A-4	62×59	26	円形			1	1	1	
第23号ピット	A-4	78×72	14	円形		1			1	
第24号ピット	B-4	57×53	15	不整円形					3	
第25号ピット	A-1	72×70	33	円形		19		3		
第26号ピット	A-5	71×69	22	円形		11				
第27号ピット	A・B-5	65×61	16	円形		1				
第28号ピット	A-4	76×71	31	円形		1		2		
第29号ピット	B-5	56.5×8	22	不整円形		1			1	
第30号ピット	A-6	58×56.5	17	円形		2			1	
第31号ピット	A-6	55×55	13	円形		1			1	
第32号ピット	A-6	66×62	15	円形		4			1	
第33号ピット	A-4	85×84	32	円形		13	1	2		
第34号ピット	A-6	71×68	19	円形		6		4	2	
第35号ピット	A-6	79×76	25	円形		17		12	7	
第36号ピット	A-6	62×61.5	20	円形		2		1		
第37号ピット	A-6・7	73×60	13	楕円形	北東-南西				2	
第38号ピット	A-7	94×90	25	不整円形		17	1	1	1	
第39号ピット	A-7	92×90	29	円形		5		4	1	
第40号ピット	A-7	96×94	24	円形		14		2	1	

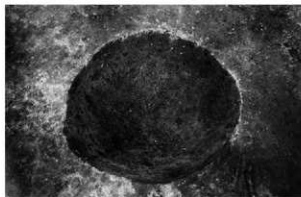
図版19 M351遺跡調査状況(1)



A 遺跡全景



B 第5～11号ピット(西より)



C 第1号ピット(東より)



D 第2号ピット(北東より)



E 第3号ピット(南より)



F 第4号ピット(北より)



G 第5号ピット(東より)



H 第6号ピット(東より)

図版20 M351遺跡調査状況(2)



A 第7号ピット(東より)



B 第8号ピット(東より)



C 第9号ピット(東より)



D 第10号ピット(南東より)



E 第11号ピット(東より)



F 第12号ピット(東より)



G 第13号ピット(北東より)



H 第14号ピット(北東より)

図版21 M351遺跡調査状況(3)



A 第15号ピット(北東より)



B 第16号ピット(南より)



C 第17号ピット(北より)



D 第18号ピット(東より)



E 第19・20・21号ピット(東より)



F 第22号ピット(東より)



G 第23号ピット(東より)



H 第24号ピット(東より)

図版22 M351遺跡調査状況(4)



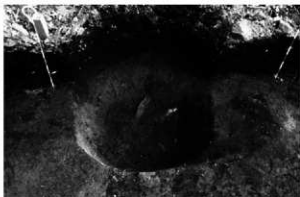
A 第25号ピット(東より)



B 第26号ピット(東より)



C 第27号ピット(東より)



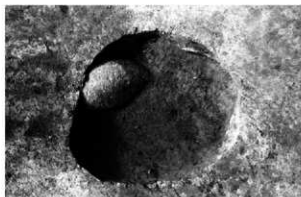
D 第28号ピット(北より)



E 第29号ピット(東より)



F 第30号ピット(東より)

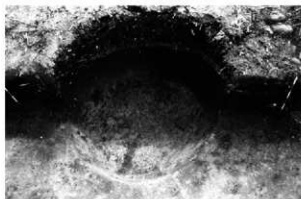


G 第31号ピット(東より)



H 第32号ピット(東より)

図版23 M351遺跡調査状況(5)



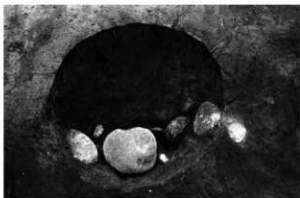
A 第33号ピット(北より)



B 第34号ピット(東より)



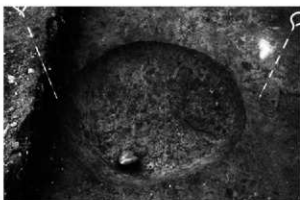
C 第35号ピット(北より)



D 第36号ピット(東より)



E 第37号ピット(東より)



F 第38号ピット(東より)



G 第39号ピット(東より)

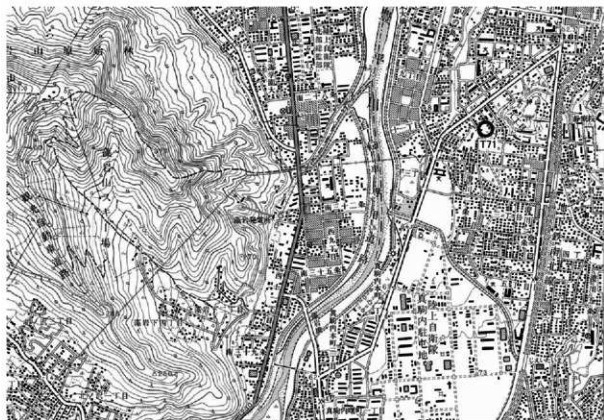


H 第40号ピット(東より)

第14章 T71遺跡調査報告

第1節 業務概要

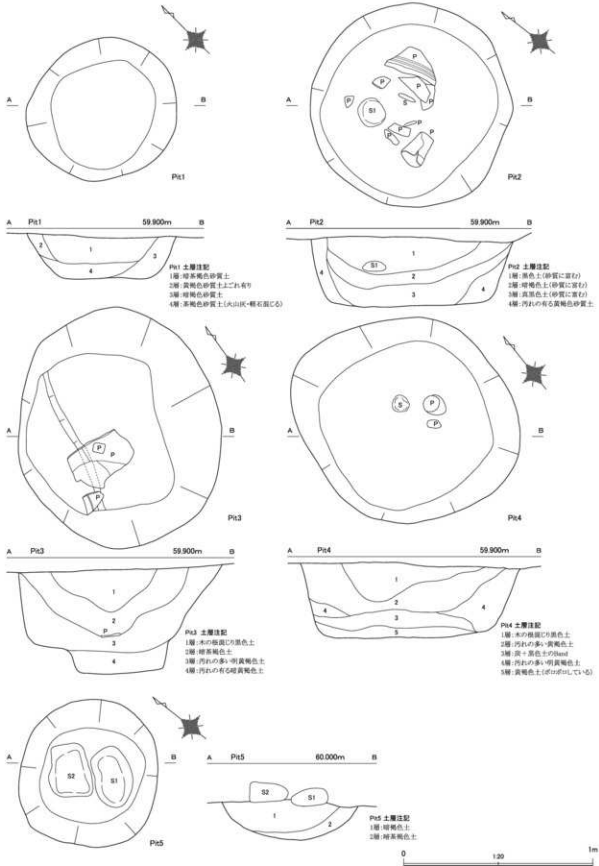
- (1) 所在地 札幌市豊平区平岸1条19丁目
- (2) 調査目的 宅地造成工事に伴う調査
- (3) 調査期間 平成4年9月21日～9月22日
- (4) 検出遺構 土坑5基
- (5) 検出遺物 縄文土器、石器



第75図 T71遺跡調査位置 (S=1/25000)



第76図 T71遺跡調査区周辺現況及び遺構配置



第77図 T71遺跡土坑実測図

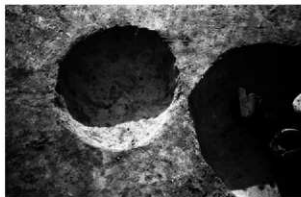
図版24 T71遺跡調査状況及び土坑出土遺物



A 調査状況（南から）



B Pit 2 調査状況（西から）



C Pit 1 完掘状況（東から）



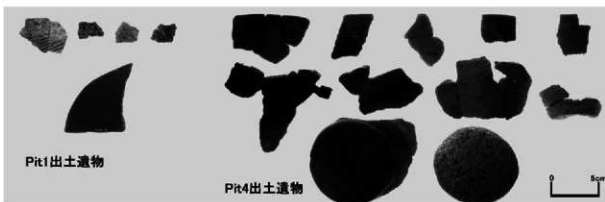
D Pit 2 完掘状況（北東から）



E Pit 3（手前）・Pit 4（奥）完掘状況（北東から）

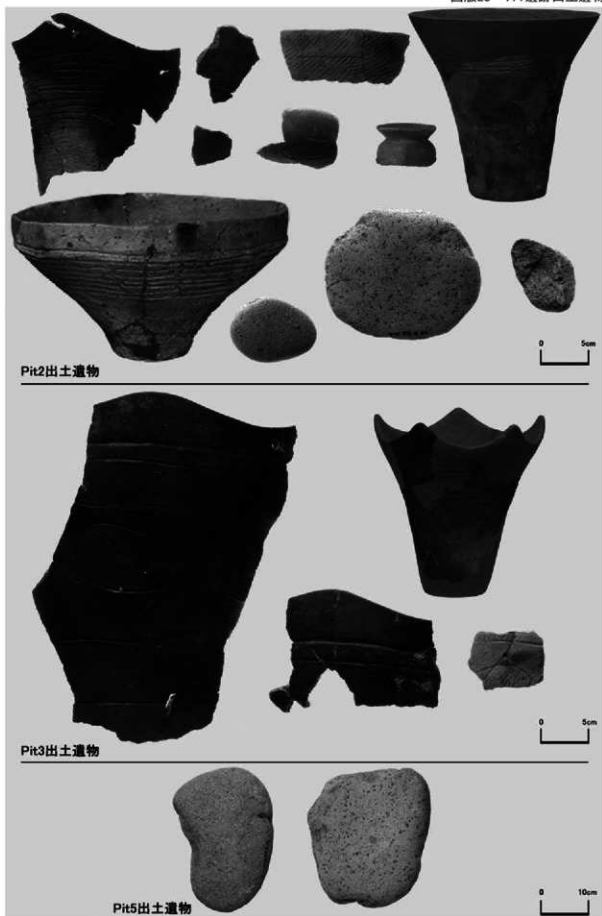


F Pit 5 完掘状況（北東から）



G Pit 1・Pit 4 出土遺物

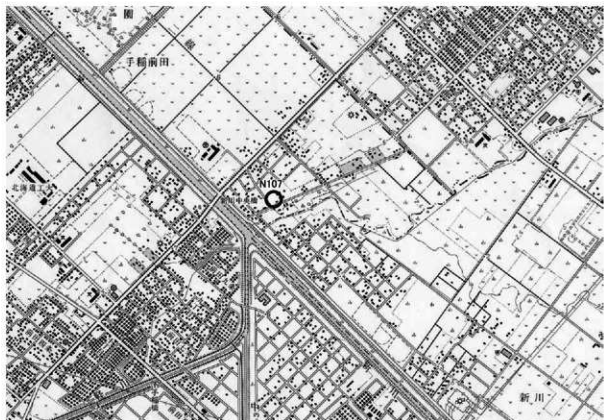
図版25 T71遺跡出土遺物



第15章 N107遺跡調査報告

第1節 業務概要

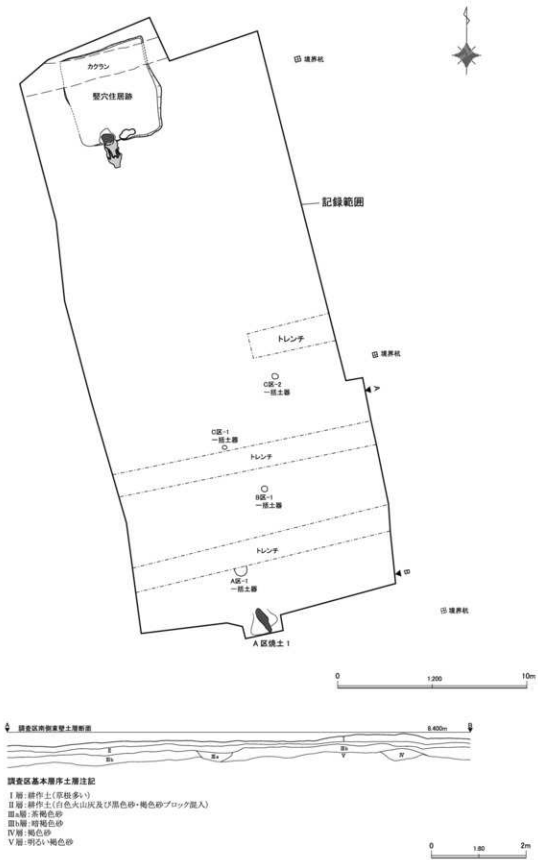
- (1) 所在地 札幌市手稲区前田12条10丁目
- (2) 調査目的 建物建設工事に伴う調査
- (3) 調査期間 平成5年8月25日～9月3日
- (4) 検出遺構 竪穴住居跡1軒、焼土1箇所等
- (5) 検出遺物 擦文土器、石器



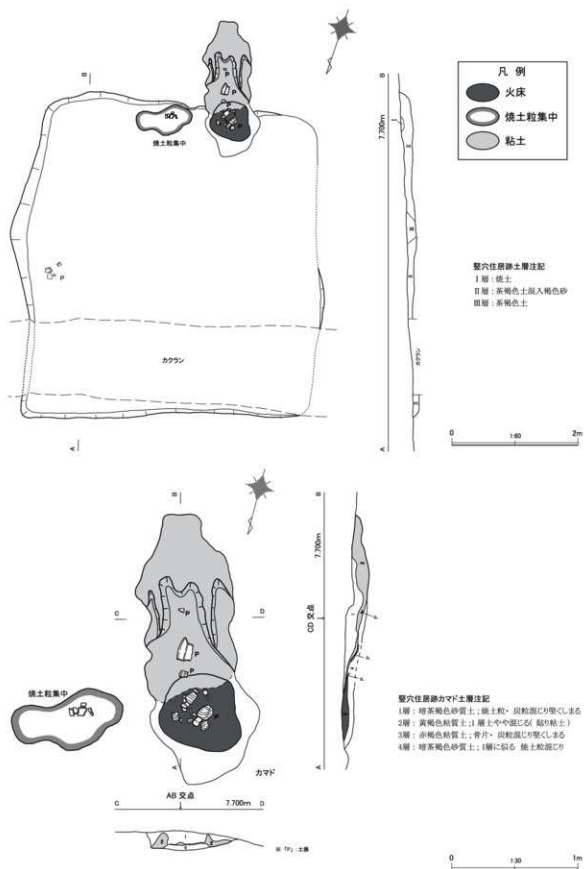
第78図 N107遺跡調査位置 (S=1/25000)



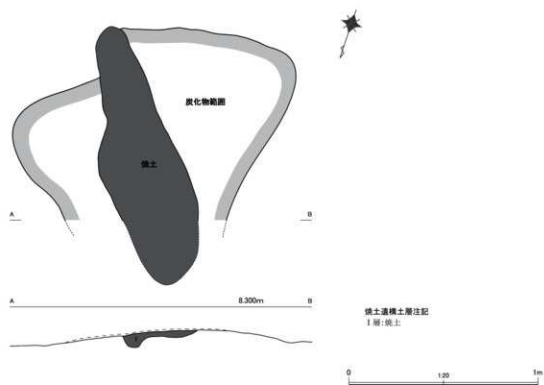
第79図 N107遺跡調査区周辺現況



第80図 N107遺跡遺構配置及び調査区土層断面



第81図 N107遺跡竪穴住居跡実測図



第82図 N107遺跡燒土遺構実測図

図版26 N107遺跡調査状況



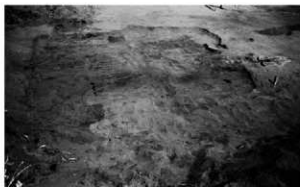
A 調査区近景 (南東から)



B 調査区近景 (南西から)



C 竪穴住居跡完掘状況 (北から)



D 竪穴住居跡完掘状況 (西から)



E カマド検出状況 (南から)



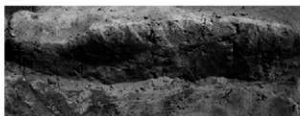
F カマド調査状況 (南から)



G カマド調査状況 (北から)



H 竪穴住居跡カマド火床断面 (東から)



I 竪穴住居跡カマド煙道断面 (西から)

図版27 N107遺跡出土遺物



第16章 H512遺跡調査報告

第1節 業務概要

- (1) 遺跡の所在地及び名称 札幌市東区丘珠町597-1、596-1
H512遺跡（北海道教育委員会登録番号 A-01-512）
- (2) 確認調査対象面積 約14,000㎡
- (3) 業務委託者 札幌市環境局緑化推進部
- (4) 業務受託者 札幌市市民局生活文化部
- (5) 業務主体者 札幌市教育委員会 教育長
- (6) 業務担当者 札幌市市民局生活文化部文化財課埋蔵文化財係（札幌市埋蔵文化財センター）
- (7) 業務期間 自：平成13年4月2日 至：平成14年3月31日
内、現場作業期間 自：平成13年8月1日 至：平成13年9月14日

第2節 業務成果

(1) 調査経緯

札幌市都市局緑化推進部による公園造成工事（札幌市都市公園事業5・6・5モエレ沼公園）に先立ち、試掘調査が平成12年8月22日から平成12年9月1日に実施された。試掘調査対象面積は49,968㎡である。

調査の結果、中～近世の礫群及び近世以前の可能性のある溝状遺構が検出された。面積は約14,000㎡である。

今回の確認調査は、遺跡の立地する微地形単位、溝状遺構の規模と構築時期および遺物集中範囲の確認を目的として実施された。

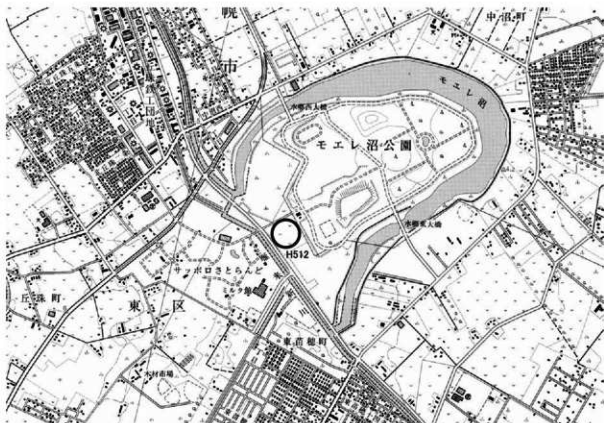
(2) 調査・整理方法

発掘区は10×10mを基本グリッドとして任意に設定した。発掘調査は、長さ20m幅1mのトレンチをY軸に沿って20m間隔で設定し、重機で表土（深さ約0.3m）を除去し、人力による遺構・遺物の検出及び表層地質の確認をおこなった。また、遺構及び遺物の出土状況及び地形に合わせ、任意に発掘区を追加した。

整理作業では、現場で記録した表層地質に関するデータを整理して地質分布図を作成し、遺構・遺物の分布との関連を検討した。また、写真記録のデジタル化及びデータベース化、遺物データベースの作成などをおこなった。

(3) 遺跡の立地と層位

表層地質は、ところによりラミナの発達する粗砂・細砂のシーケンス、シルト・細砂の薄互層のシーケンスおよびグライ化した粘土・泥炭のシーケンスであり、それぞれ、旧河道堆積物、自然堤防



第83図 H512遺跡調査位置 (S=1/25000)

堆積物および後背湿地堆積物に対比される。

調査区内の微地形は、概ね北西-南東方向に卓越する複数のチャネルを持つ小河川に支配されていると言える。

(4) 遺構

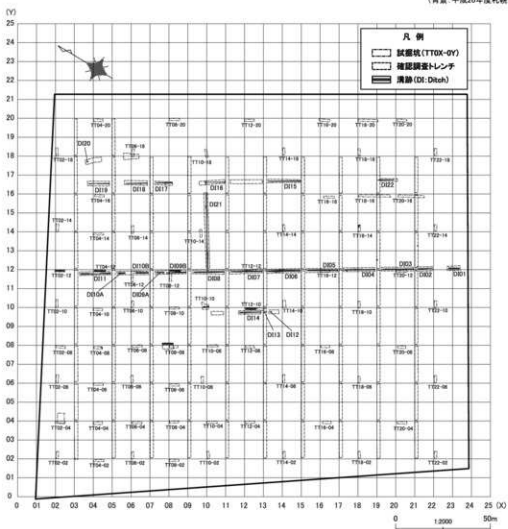
自然堤防上から炭化物集中1ヵ所、礫群1ヵ所が検出された。なお、試掘調査で近世以前の可能性が指摘された溝状遺構は、断面観察と分布の検討から、樽前 aテフラ (1739年降灰) 以降であると判断された。

(5) 遺物

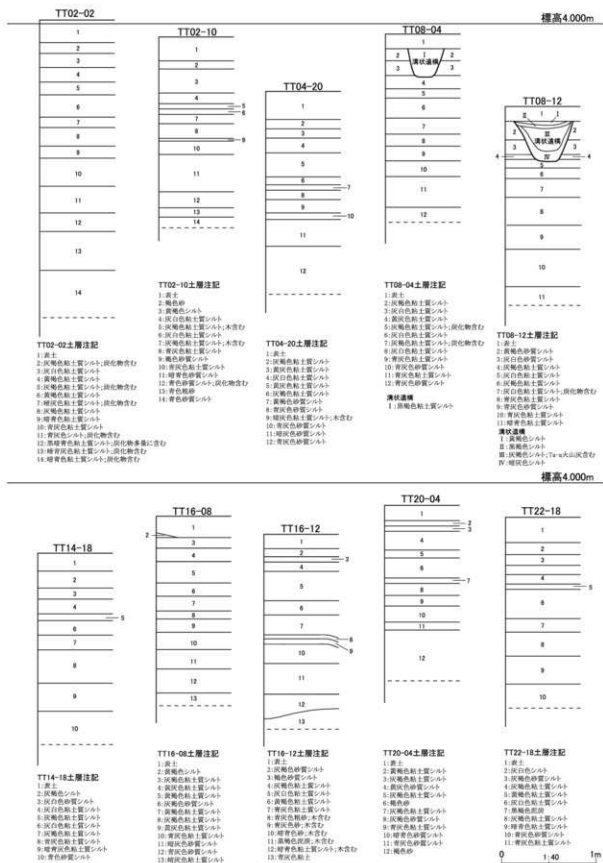
礫が13点出土した。試掘調査では長径20 cm程度の大礫から構成される礫群が検出されたが、今年度出土した礫は、礫群出土如何に関わらず、いずれの場合も長軸5 cm以下の棒状の超円礫が多い。



(背景 - 平成20年度札幌市共有基図)



第84図 H512遺跡調査区配置



第85図 H512遺跡土層断面模式図

図版28 H512遺跡調査状況(1)



A 調査区近景



B 試掘調査 TT08-12西壁土層断面



C 試掘調査 (TT10-10) 礫出土状況



D 溝状遺構 (DI01) 検出状況



E 溝状遺構 (DI02) 検出状況



F 溝状遺構 (DI03) 検出状況



G 溝状遺構 (DI04) 検出状況

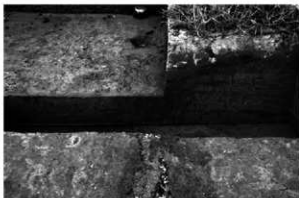


H 溝状遺構 (DI05) 検出状況

図版29 H512遺跡調査状況(2)



A 溝状遺構 (DI06) 検出状況



B 溝状遺構 (DI06) セクション



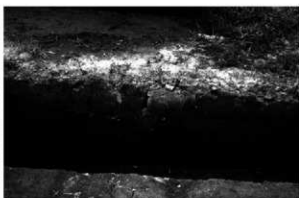
C 溝状遺構 (DI07) 検出状況



D 溝状遺構 (DI07) セクション



E 溝状遺構 (DI08) 検出状況



F 溝状遺構 (DI08) セクション

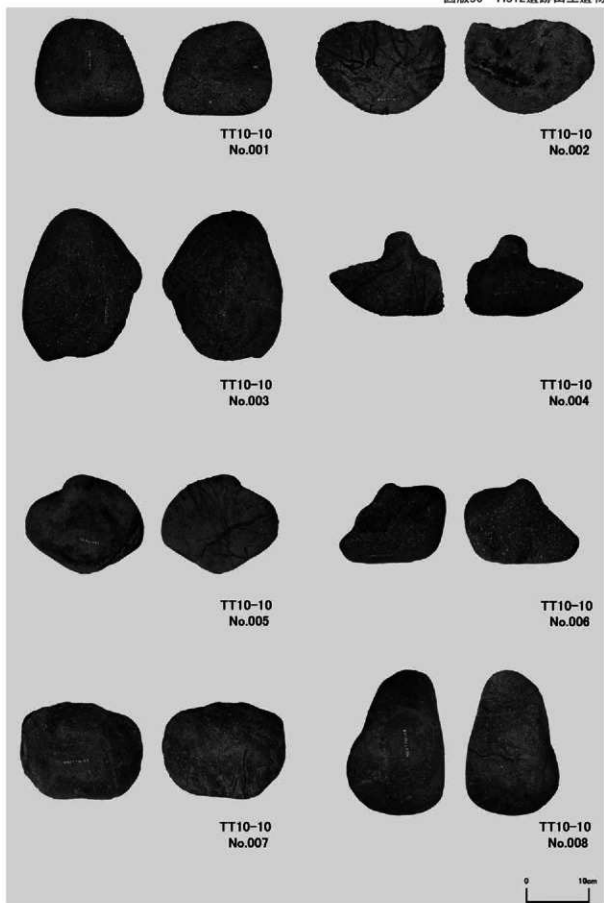


G 22-14区北西壁トレンチ礫出土状況



H 20-13区北西壁トレンチ礫出土状況

図版30 H512遺跡出土遺物



報告書抄録

ふりがな	しないいせきかくにちちょうさとうほうこくしょ		
書名	市内遺跡確認調査等報告書		
副書名			
巻次			
シリーズ名			
シリーズ番号			
編著者名	札幌市観光文化局文化財課埋蔵文化財係		
編集機関	札幌市教育委員会（札幌市観光文化局文化財課埋蔵文化財係）		
所在地	〒064-0922 北海道札幌市中央区南22条西13丁目		Tel011-512-5430
発行年月日	西暦 2010年3月25日		

所収遺跡名	所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
T 7 1 遺跡	札幌市豊平区平岸1条19丁目	01105	71	43°01'12"	141°21'42"	1992/9/21-22	-	宅地造成
N 1 0 7 遺跡	札幌市手稲区前田12条10丁目	01109	107	43°07'59"	141°16'06"	1993/8/25-9/3	-	その他建物
S 2 1 4 遺跡	札幌市白石区栄通14丁目	01104	214	43°01'50"	141°25'12"	1980/7/30-7/29	-	共同住宅
S 2 2 9 遺跡	札幌市白石区北郷4条3丁目	01104	229	43°03'43"	141°21'52"	1983/4/28-5/12	-	住宅
T 2 3 3 遺跡	札幌市豊平区西四2条13丁目	01105	233	42°59'44"	141°22'26"	1984/5/28-6/9	-	宅地造成
S 2 5 2 遺跡	札幌市厚別区上野幌1・2条1丁目	01108	252	43°01'16"	141°27'59"	1981/8/30-8/20	-	宅地造成
S 2 5 4 遺跡	札幌市厚別区上野幌2条1丁目	01108	254	43°01'10"	141°28'03"	1981/8/30-8/20	-	宅地造成
S 2 5 9 遺跡	札幌市厚別区上野幌3条5丁目	01108	259	43°01'01"	141°28'37"	1980/6/16-7/19	-	区画整理
T 2 7 2 遺跡	札幌市清田区平岡公園東1・2丁目	01110	272	43°00'36"	141°28'06"	1980/6/16-7/19	-	区画整理
S 2 7 3 遺跡	札幌市厚別区厚別町上野幌	01108	273	43°00'48"	141°29'03"	1980/6/16-7/19	-	区画整理
T 3 0 3 遺跡	札幌市清田区平岡公園東2・3丁目他	01110	303	43°00'38"	141°28'59"	1980/6/16-7/19	-	区画整理
T 3 1 0 遺跡	札幌市豊平区平岸5条10丁目	01105	310	43°01'49"	141°22'43"	1983/10/24-11/14	-	住宅
M 3 5 1 遺跡	札幌市南区石山7丁目	01106	351	42°57'52"	141°19'09"	1991/9/4-9/21	-	宅地造成
M 3 5 3 遺跡	札幌市南区石山9丁目	01106	353	42°57'45"	141°18'54"	1985/4/16-4/27	-	宅地造成
T 3 6 2 遺跡	札幌市厚別区真栄	01110	362	42°58'45"	141°26'09"	1988/7/11-8/6	-	宅地造成
K 4 4 0 遺跡	札幌市北区北31条西11丁目	01102	440	43°05'54"	141°19'55"	1981/4/7-4/25	-	共同住宅
T 4 7 2 遺跡	札幌市清田区平岡公園	01110	472	43°00'23"	141°28'10"	1988/5/30-6/11	-	公園造成
M 4 8 4 遺跡	札幌市南区雲雀の森1丁目他	01106	484	42°56'44"	141°20'38"	1989/4/30-5/17	-	学校
T 4 8 5 遺跡	札幌市清田区真栄	01110	485	42°58'38"	141°25'40"	1988/7/11-8/6	-	宅地造成
T 4 8 6 遺跡	札幌市清田区真栄6条1丁目	01110	486	42°58'50"	141°26'01"	1991/9/30-10/8	-	宅地造成
H 5 1 2 遺跡	札幌市東区丘陵町	01103	512	43°07'12"	141°25'14"	2001/8/1-9/14	-	公園造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
T 7 1 遺跡	集落跡	縄文、統縄文、弥文	土坑5基	縄文土器、石器	
N 1 0 7 遺跡	集落跡	弥文	竪穴住居跡1軒、焼土1箇所	弥文土器、石器	
S 2 1 4 遺跡	遺物包含地	縄文	落とし穴1基	縄文土器、石器	
S 2 2 9 遺跡	墳墓	縄文	土坑4基、落とし穴2基	縄文土器、石器	
T 2 3 3 遺跡	遺物包含地	縄文	土坑1基、落とし穴7基	縄文土器、石器	
S 2 5 2 遺跡	遺物包含地	縄文		縄文土器、石器	
S 2 5 4 遺跡	遺物包含地	縄文		縄文土器、石器	
S 2 5 9 遺跡	遺物包含地	縄文		縄文土器、石器	
T 2 7 2 遺跡	遺物包含地	縄文		縄文土器、石器	
S 2 7 3 遺跡	遺物包含地	縄文		縄文土器	
T 3 0 3 遺跡	遺物包含地	縄文		縄文土器、石器	
T 3 1 0 遺跡	集落跡	縄文、統縄文、弥文	土坑1基、焼土2箇所	縄文土器、統縄文土器、石器	
M 3 5 1 遺跡	遺物包含地	縄文、統縄文	土坑10基	縄文土器、統縄文土器、石器	
M 3 5 3 遺跡	集落跡	縄文、統縄文、弥文	竪穴住居跡1軒、土坑1基	縄文土器、統縄文土器、弥文土器、土製紡錘車、石器、鉄器	
T 3 6 2 遺跡	遺物包含地	縄文		縄文土器、石器	
K 4 4 0 遺跡	集落跡	弥文		弥文土器	
T 4 7 2 遺跡	遺物包含地	縄文、統縄文		縄文土器、石器	
M 4 8 4 遺跡	遺物包含地	縄文		縄文土器、石器	
T 4 8 5 遺跡	遺物包含地	縄文		縄文土器、石器	
T 4 8 6 遺跡	遺物包含地	縄文		縄文土器、石器	
H 5 1 2 遺跡	遺物包含地	アイヌ文化期		鏝	遺構・遺物なし

市内遺跡確認調査等報告書

平成22年3月18日 印刷

平成22年3月25日 発行

発行者 札幌市教育委員会
060-0002 札幌市中央区北2条西2丁目
札幌市埋蔵文化財センター
編集 064-0922 札幌市中央区南22条西13丁目
TEL 011(512)5430
FAX 011(512)5467
印刷 富士プリント株式会社